
紅い翼

大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い翼

【Nコード】

N3848D

【作者名】

大和

【あらすじ】

内紛の続く世界から来たジャンク屋の青年と、戦闘によって帰る場所を無くした貴族の少女。この二人の出会いにはまさに必然と言えた。舞台はルイズたちがアルビオンのお城へ向かった頃に起きたもう一つの物語…………… なんだか、その後もあつたりします。アルビオンでの戦争をもう一つの視点で書いてみました。

プロローグ（前書き）

えーゼロの使い魔のオリジナル版です。

色々と説明くさい部分や分かりにくい部分もあると思いますが、応援よろしく。

プロローグ

沢山の足音が近づいてくる。

「ハアハア……………しつこい奴等だ」

薄暗い倉庫の中で男は小さく身を潜ませていた。辺りに漂う硝煙の臭いが鼻につく。

壁を見ると幾つもの弾痕が刻まれている事から、相当な銃撃戦が行われていたという事がわかる。

彼にしてみれば、この事態は予定された事では無かった。ただ予想よりも向こうの人数が多くそのせいでこちらの潜入がバレってしまったのだ。さらに自分の武器が入ったケースまで落としてきてしまうといったヘマまで犯していた。

「…………畜生。このままじゃ捕まるのは時間の問題だな」

静かに目を走らせて退路を探す。

しかし、既に出口らしい場所は全て封鎖されていた。

恐らく通風孔にも何かしらのトラップが仕掛けられているだろう。

「八方塞がりとはこの事だな……………やれやれ、この神楽様もヤキが回ったもんだ」

だが自分は死ぬ訳にはいかない。奴等に捕まる＝死ぬ。この結果が変わらない以上、何としても逃げ延びなければならない。

「だがどうする？……………せめてアレがあればなんとかなるんだが…

……………あつた！」

神楽の視線が床に転がっている黒いケースのような物を見つける。

そのケースは偶然にもまだ奴等には見つかってはいないようだ。

「よしっ」

神楽は気付かれないようにそつと近づいていく。なんとか無事にたどり着くとケースの側面にある端末を操作する。

しかし、ケースと言ってもその大きさが余りにも大き過ぎるサイズである。幅が5～60cm、長さは130cm程もあるケースであ

った。

更に言うならば形状も変わっている。一番似ている物で例えるならば洋式の棺桶だ。

だが棺桶に見えるケースもよく見れば表面には幾つもの金具で補強されていて、ケース自体の素材も黒い板金のような物で作られている。

「GRF（重力緩和フィールド）起動よし………セーフティロック解除っ」と

ケースの表面に飾られていた十字架のような装飾がヴヴッと音を立てて光りだす。

その音を聞きつけて連中が集まってくる。

「よっ」と

神楽はその棺桶のようなケースを持ち上げると、着いていたシヨルダーベルト左肩に掛けた。

追い付いた連中がぶら下げているMP5Kサブマシンガンの銃口がこちらに向く。

「おっとヤバイ」

ケースを背負ったまま奴等から逃げるように倉庫の奥へ向かって走り出した。

バババババツ！

それを見て一斉にMP5Kが火を吹く。

「うわわわっ！」

しかし銃弾は一発もかすることはなかった。そのほとんどが背負ったケースで弾かれてしまったからである。ケースの方も大した損傷はない。

驚いた事にあれだけの銃弾を浴びても凹むどころか、傷一つついていなかったのである。

「へっ、そんな豆鉄砲で止められるかよ」

その直後だった。

背後に凄い寒気が襲ってきたのは。

「なっ！」

神楽は素早く首だけ動かして後方を確認する。

「げっ、マジかよ！」

見ると奴等の仲間の一人が一抱えするくらい的大型の機関銃を持ってきたのだ。

ペーマシンガン

（不味い……………HMGなんぞ食らったら骨も残らんぞ！）

咄嗟に近くのコンテナの影に飛び込む。

ドドドッ！

そのすぐ後ろを砲弾のような弾丸が通りすぎる。

「くそっ、無茶苦茶しやがって！だが、このままじゃ……………ん？」

ふと奥の方で何かが光った気がしてそちらに行ってみる。

そこには巨大なシートで覆われた何かがあった。

試しにシートの中に入ってみた。

（なんだコイツは……………）

中は相当暗かったので携帯型のペンライトで照らしてみた。

「こ、コイツは……………へへっ、神様に祈りたくなっただぜ」

「うっ……………」天井から落ちてきた水滴で私は気が付いた。

（……………私は……………そうだ、薬草を取りに来てたんだ）

「んっ……………」

体を起こそうと力を入れようとした途端、体が何かに引っ掛かった。
(なに……………)

周りを見てみると自分の体は幾つもの岩に完全に挟まれているようだった。

(そうか、その最中に落盤が起きて……………)

体を色々と動かしてみるが、なんとか右腕だけ抜け出せただけだった。

(……………せめて魔法が使えれば)

自分の杖を探してみる。

(あつた……………これでなんとか……………)

とりあえず自分の上に乗っかっている岩を 練金 で砂に変えようとして……………、

「っ！」

頭に激痛が走った。

(……………しまった、さっきで頭を打ったんだわ)

どうやら、落盤を避ける時に頭をどこかに打ち付けたらしい。

そのせいか痛みで上手く集中出来ない。

(なんとか……………しないと)

だがどうやっても痛みが集中の邪魔をしてしまい魔法が上手く発動しない。

(だめ…………… 練金 じゃ使えない。なにか別の魔法を……………)

土の性質を変化させる 練金 以外にこの岩を退かせる魔法は……………

……………。

強い魔法なら他の系統でも出来そうだけど……………それも無理のようだ。なにしろこの程度の魔法が出来ないのだ。それ以上の魔法なんて出来る訳がない。

(もつと単純で簡単な魔法なら……………ダメ、威力が足りない)

物体を浮かす フライ や レビテーション は簡単ではあるが、精神状態で効力が左右されるし何より限界重量が存在する。

よってこの魔法も不可。

（助けを呼びたくてもこの場所は私しか知らないし……………助け
……そうだ！確か自分の使い魔を召喚する魔法があった筈だわ）

サモン・サーヴァント

別の空間から術者に仕えし者を召喚する魔法である。

（……………だけどリスクが大き過ぎる）

仮に召喚が成功しても自分の状況をなんとか出来なければ呼んでも意味がない。

小型の魔物は問題外。大型ならベストだが、知性が低ければ自分も危ない。第一、大型の魔物で知性の高い者はそのほとんどが高位の魔物だ。契約しなければそのまま帰ってしまう事だつてあり得る。

（ダメだわ……………どう考えたって成功率が低すぎる）

まして、使い魔の召喚はやり直しが出来ないのだ。

一回で成功させて、知性の高い者を呼び出して、まして契約前の状態で自分を助けてもらう。

そんな都合の良くいくなんて事は万に一つとしてあり得ない。

（でも……………諦めても助かる訳がない）

まさに絶対絶命。

（このまま死ぬなんて絶対にイヤ……………私……………死にたくない……………）

目から涙がこぼれてくる。

……………怖いのだ。目の前から近づいてくる死が。

（イヤだよ……………怖いよ……………まだ死にたくないよ……………）

……だってまだ私何もしてない……………好きな人にも……………恋だつてしたいのに……………）

だから考える。

ゼロの可能性を少しでも上げるために……………。

（どうしよう……………あ……………そうだ）

頭の隅に微かに浮かんだ一つのアイデアが浮かんだ。しかしその考えはあまりにも無謀な物だった。

（ハルゲニアの中がダメでもそれ以外なら……）

すなわち自分の世界ではなく、別の世界…… 異世界 への召喚を考えたのだ。確かに 召喚 とは空間を曲げてこちらに呼び寄せる魔法であるから理論上は可能と言っているだろう。

だが、あくまで理論上の話だ。それを実践した者は存在しない。

………
事故 でやってしまった者は1人いるけど。ル
ーズとか。

（召喚の指定を調整すればもしかしたら……）

使い魔の召喚には自己の系統が強く影響する事は知られている。例えば 火 の系統のメイジが召喚すると火に関係する魔物が召喚される（キュルケのフレイムやギーシュのモグラなど）だから、その設定を任意で変えてしまえばハルゲニア以外からの召喚も可能になるのでは考えたのだ。（ちなみにルイズは偶然それをしてサイトを呼んでしまった）

「よし……すう」

深呼吸をして意識を集中する。痛みが襲ってくるもそれに耐える。

「天上なる幾千、幾万の星たちよ…… 広大なる大宇宙の命ある者たちよ…… 我が意志に従いし者よ…… 我が望みに答えし者よ……

…… 偉大なる私祖ブリミルと大いなるペンタゴンの名の元に現れ出でよ…… 我が名はアリス・フェリーテス…… 汝が主なり！サモン・サーヴァント！」

彼女の前に輝く光の魔方陣が現れた。あとは選ばれた使い魔が出てくるのを待てばいい。

戦闘そして出会い

ズズン！

倉庫の中は完全に追う者と追われる者たちが逆転していた。

彼らを蹴散らしているのは青い巨人である。全長18m、全身をカーボンを主体とした特殊合金の鎧で覆われており、同じく特殊素材で作られた人工筋肉がその巨体を支えていた。

「まさか、武器弾薬だけじゃなく新型のRAG ラウンド・アーク・ギア まであるとはな。お陰で助かったが」

両肩に取り付けられている円形のシールドと背面に装備されている大型ランチャーが主装備らしいが、それとは別に120mmマシンガンが別装備であったのでそれも拝借した。

このRAG ラウンド・アーク・ギア は元々は多目的運用型の機動兵器として国際連合軍が開発した人型兵器なのだが、その汎用性から数多くのタイプが造り出された。

当初は連合軍が独占していたが、コストの面から民間企業に委託してから傭兵の間にも出回るようになった。カスタマイズのしやすい機体と言うことで今ではすっかり定着してしまっている。

「さて、お邪魔虫が出てくる前に逃げないとな」

幸いな事にこの機体はまだ個人登録が済んでいなかったため、セキユリティシステムをスルーして機動できた。

「とは言え、ランチャーをぶっ放す訳にもいかないか」

辺りのコンテナをスキャンすると中身が武器弾薬などの火器がぎっしり積み込まれていることがわかる。

「下手に撃てばドカンって事かい……………」

この倉庫に潜り込んだ時からわかつてはいたが、これだけの量があると流石にゾツとする。

「そこまでだ、コソドロ」

センサーに新たに二機のRAGの反応が出たのでそちらに振り返る。

見ると装備はシンプルだが、グレーのRAGがこちらに銃口を向けていた。おそらく奴等の持っていた量産型のタイプだろう。

「ジャンク屋風情が舐めやがって」

「大人しくその機体を返すならよし、返さなければ……………」

コクピットにロックオンを報せるアラームが鳴り響く。

「そいつをぶっ放つてか？そんなことしたらテメエらまとめて吹き飛ばぞ」

そう言つて後ろ指でコンテナを指す。

「……………ちっ」

意味がわかつたらしく銃口を下ろした。だが、代わりに胸部に備えられたAナイフ^{アサルト}を取り出した。

対象を高振動で切断するナイフで、どうやら接近戦で直接片付けるつもりようだ。この機体にも装備されているが神楽自身、接近戦は苦手であつた。

（あちゃー参つたね）

射撃武器が使えない以上こうなるのは目に見えてわかつていたのだが、こつも素直にやってくれると何とも反応に困る。

「へへ……………かかつたな」

「なに？」

神楽はマシンガンのトリガーを遠慮なく引いた。

ズドドドッ！

弾丸がナイフを持っていた右手に命中する。

「うわっ！」

右手が破壊されてナイフが倉庫の床に落ちる。

「くそっ！ハメられた」

「へっ、まだまだ甘いな……………ん？」

突如機体のセンサーにアラーム警報が表示される。

（……………空間転送警報だと？）

早い話がこの周囲でワームホールが出現するとセンサーが告げている。

「……………くっ！なんでこのタイミングで！」
急にコクピットの全てのモニターが白く染まる。
（ちよつと待てよ……………まさか転送されるのは俺か！？）
どうやらこの警報は何か転送されてくるのではなく、こっちが何処かへ強制転送されるアラームだったらしい。
「うわあああつ！」
そして俺の意識はそこで途絶えた。

「……………っ、なんだっただ今のは？」
目が覚めた場所はどこかの洞窟のようだった。
「なんでこんな所にいるんだ俺？」
周りを見渡して見るが、どうやらコクピットの中ではないらしい。
「おかしいな……………機体ごと転送されたんならなんで俺は外にいるんだ？」
幸いにも自分のケースは近くに転がっていたのでそれを拾い上げようとするが……………。
「重っ！……………おいおい、GRFがオフになってやがる……………まいったな」
とりあえずペンライトを取り出して辺りを照らしてみる。洞窟の壁に真新しいヒビのような物が見えることから、つい最近この洞窟は落盤を起こしたらしい。
「あぶねえな、こりゃ早いとこ脱け出したほうがいいな」

そう判断すると、ケースのシステムを起動して立ち去ろうとした。
「待ってください!」

「ん?」

神楽は声のした方を振り向いた。

(成功した……………)

私は胸の内が喜びで一杯になった。考えていた可能性の中で最も理想としていた成功例がここにあった。

(人だ……………この人に助けを頼めば……………)

……………でもなんて?

……………言葉は通じるの?

……………その人はいい人なの?

……………もし断られたら?

……………そもそも本当に助けてくれるの?

(……………え?)

突然脳裏に様々な不安が横切った。

……………危ない人かも。

……………動けない私を襲うかもしれない。

(……………違う)

……………危険よ。

……………声をかけてはダメ。

……………きつと危ないわ。

(違う!)

私は襲ってくる不安を振り払った。

だがそんな事をしている間に目の前の人は遠ざかろうとしている。

（……ダメ！行かないで！）

「待ってください！」

「ん？」

その人は私の声を聞いて振り返った。

（………やった………これで助かる）

アリスは笑みが溢れた。

「岩に挟まれてしまつて、助けてもらえませんか？」

「俺が？………仕方ないな」

キヨロキヨロと周りを見たあと、自分を指差した。

（………意外と落ち着いてるわね）

目の前の青年の落ち着いている態度を見てキヨトンとする。

もう少し、動揺しているかと思つていたのだ。だけどこれは好都合であつた。

（良かった………これでなんとかなるわ）

この岩をどうするのかは知らないけど大丈夫よね？………と、思つていたのだが………。

彼が行つた方法は彼女の度肝を抜く方法であつた。

大人の甘い契約（前書き）

すみません。サブタイトルあんまり関係無いです。

大人の甘い契約

俺の目の前にいた少女の頼みをついつい聞いてしまったが、よく見てみると実に奇妙な格好をしていた。というかファンタジーな格好と言える。

（なんか……変な場所に飛ばされたが……ま、いいか？）
とりあえず彼女を閉じ込めている岩を観察してみる。どうやら上の大きな岩がそのまま乗っかっているらしく、それさえなんとかすれば助け出せそうだ。

（確か……ケースの中にプラスチック爆弾があった筈だ。……後には信管とコードを出して……）

ケースを開けてガサゴソしていると、目的の物を見つけて少女の元へ向かった。

「それは？」

「プラスチック爆弾だ。ちょっと待ってな」

神楽は彼女と岩の隙間に体を潜り込ませて爆弾をセットする。

「ち、ちよつと何するのよ？！やだ、くすぐったいって！」

少女がバタバタと動くものだから、神楽は作業しずらくなる。

「痛てっ、暴れるな！手元が狂うだろ！……よし、これでいい」
信管を埋め込んで隙間から這い出る。

「お、乙女の体になにするのよ！」

少女は顔を真っ赤にしながらかつちを睨み付ける。

「うるさい小娘だな。大人しくしてろ、足が吹き飛ぶぞ」

手に持ったコードをスイッチの端末の金具に巻き付ける。

「よし、いくぞ」

神楽はスイッチを押した。

ドンッ！

大きい音を立てて岩が爆発する。

「きゃあああ！」

破片が大量に少女に降り注ぐがそのほとんどがその外側に落ちていった。

「あ……あ……危ないじゃない!」

少女は何が起こったのかわからない顔をしていたが、すぐに正気に戻って怒鳴り返してきた。

（はあゝずいぶんとタフな小娘だな）

神楽はその態度に感心してしまう。

「で、怪我はないか?」

「え?あ…うん」

「よし、じゃあな。俺はこれで失礼する」

そう言つてこの洞窟からでようとした。

「……て、ちょっと待つてよ!まだ契約してないじゃない!」

少女は慌て神楽を呼び止めた。

「契約?なんだそりゃ?」

いきなり出た言葉に顔をしかめる。

「私は貴方を使い魔として召喚したの。だから貴方は私と契約しなくてはならないの」

ずいぶんと聞き慣れない単語が飛び出してくる。

「使い魔?召喚?なに言ってるんだ?んなもん、魔法使いじゃあるまいし……」

「私はその魔法使いよ。とにかく、契約しないといけないんだからそこに座つて!」

「いや……だから契約つてなんだよ?」

問答無用にその場に座らされる。

「すう。我が名はアリス・フェリーテス。五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え我が使い魔となせ……」

「はあ?……むぐつ!」

いきなり少女の柔らかい唇が自分の口をふさいだ。それもけっこう長く続いた。

(もういいかしら?)

契約の際使い魔にキスすると本に書いてあったが、どのくらいするのかまでは書かれていなかった。だから長めにしたのだが、いい加減息が続かなくなってきた。

(どうしようかな? 息継ぎしてからもう一度? ……でも二度するなんて書いて無かったし …… あっそうか、こうすれば!)

チュルツ!

アリスは今度は舌を入れる事にした。

なぜか目の前の青年は驚いて(慌てて?)いたが、お構い無しに続行した。

(こうすれば粘液同士くっついたままだから息継ぎしながら出来るわね。)

……………なんとも天然は恐ろしい。

一応教えておくが、彼女はまだ10才の少女である。

だからなんだ? と言えばそこまでだが、いくらなんでもそこまでのディープキスをしなくてもいいと思うが ……?

クチュクチュと唾液同士が混ざりあう音が響く。

「ん …… はむう …… はあ」

(…………… けっこう気持ちいいかも)

若干10才の若さで大人の喜びを覚え始めたアリスであった。

「…………… て、いい加減にしろっ!」

青年の方が堪えきれなくなったのか、アリスの肩を掴んで引き剥がした。

「やん」

「やん、じゃねえ! いきなり何をする!?」

「何って契約よ?」

「アレがか?」

「そうよ?」

……… 半分誤解です。

「…………… 信じられん」

お気持ちはごもつとも。

「ねえ？それよりルーンはでたの？」

「ルーン？それってコイツの事か？」

青年はジャケットを開くと胸元に浮き出たルーンを見せた。

「あつ本当だ。わーい、成功だー！」

ルーンを見て元気に跳び跳ねる。「だから、なんだってんだよ？」

青年は思考がついて行かずただ呆然とへたり込んでいた。

「そうだ、貴方名前は？私は……………」

「アリス・フリーテスだろ？さっき聞いた。俺は神楽冬馬 かぐ

らとうま ジャンク屋だ」

「ジャンク屋？なにそれ？」

「…………… 知らんか。まあ、マイナーな仕事じゃないからな。あとと言

い方は冬馬でいい」

「わかったわ。私もアリスでいいわよろしくね冬馬」

「…………… ん、よろしくアリス」

そう言つと冬馬は立ち上がった。

「さて…………… と、妙な所で時間食つたがサツサと洞窟を出た方がいい

だろ。また落盤が起こるかも知れんしな」

「そうね、あつそうだ」

アリスは瓦礫の山から大きめのカゴを引つ張り出した。

「良かった。薬草は無事だわ」

「なんだ、こんな洞窟で薬草を集めていたのか？」

「はい、コレ」

カゴを冬馬に差し出す。

「へ？」

「荷物持ちよろしく」

ペコツて頭を下げた。

「へいへい……………」

ケースを背負いながらカゴを受け取った。

狙われる者Ⅱ隠された秘密

二人はなんとか無事に洞窟から出ることができた。

「いやゝ一時はどうなるかと思っただわ」

「まっただ」

洞窟の外は深い森で覆われていた。

（……こりやずいぶんと変な所に飛ばされたな）

辺りを見渡しても手に入れたRAGの影も形も見えなかった。

（いったいどこまで飛ばされたんだか）

ボリボリと頭を掻く冬馬の後ろでアリスはしきりにケースの周りを飛び回っている。

洞窟の中ではわからなかったが、彼女の髪は明るい緑色をしていた。よく動く大きい目はこれも鮮やかな紅い瞳になっている。

（……不思議な色だな。………は、ともかく）

「………なんだよ」

ジロツと睨むが効果無し。冬馬に構わず質問責めしてくる。

「ねえねえ、なんなのこのケース？助けてくれた時もここから何か出したみたいだったけど？」

大きな目をキラキラさせて聞いてくるものだから無視も出来ない。

「あん時言っただろ？爆弾だった」

「ばくだん？」

「ああ、信管なんかで着火すればデカイ爆発を引き起こせる代物だ」

「でも火なんか使ってなかったけど？」

「火の代わりに電流を流して爆発させたんだ」

「ふーん。ねね、他には他には？」

「えーい一々しがみつくな！」

右腕にしがみついてくるアリスを振り払いながら周囲に気をくばる。

（………ち、妙な連中に尾けられてるな）

「気をつけて。アイツら最近、私を尾けまわしている奴らよ」

アリスが小さい声で警告する。どうやら冬馬と同じように連中の気配に気付いていたようだ。

（なるほど……………だから、あんなにべったりとくつついてきた訳か）
アリスの行動の意味に気が付いて自分の後ろにいるよう促した。

「で、狙われる根拠は？まさかお前の体目当てか？」

「気持ち悪い事言わないでよ！……………でも、あながちハズレって訳じゃないわね」

「マジかよ……………」

えーっと、つまりはこの連中はオリコン？

「……………なんか誤解してるみたいだけど、アイツらの狙いは私の頭脳よ」

「はあ？」

「詳しい事は後で話すわ。今はアイツらを……………」

「ああ、わかつてる。少し下がってな」

アリスを下がらせると、ケースのセキュリティを解除する。

（足の運びから判断してアマチュアって所か……………銃を使う必要は無いな）

ケースの一部が開いて、そこから黒い日本刀が出てくる。

「来なよ、変態ども。まとめて相手してやる」

木の陰から剣やナイフを持った連中が姿を現した。その数は5人。

どれも簡素ではあるが鎧のような物を着けていた。

（剣に鎧……………て、ずいぶんクラシクな奴らだな）

ケースを地面に置くと、刀を腰だめに構えた。剣術の一つ、居合い斬りの構えだ。

さすがの連中も冬馬の気配が変わった事に気付いて間合いを測ってきた。

（ちつ……………気付きやがったか。それなら……………）

冬馬はいきなり構えを解いた。これには連中も驚いたようで動きが一瞬とまる。しかし、冬馬はその隙を見逃さなかった。

「ひとおおっ！」

一気に間合いを詰めると連中の一人を袈裟斬りに切り捨てる。

「ふたあぁっ！」

そのまま向きを変えてもう一人を横一文字に切り裂く。

「ほっと」

すぐさま飛び退き相手の反撃をかわす。その間僅か2秒の早業であった。

そしてすぐさま構えをとる。

「……………くっ！」

一瞬で仲間の二人を切り捨てられた事により連中の間に動揺が走る。相手の予想外の強さに知らず後退りしてしまう。

「さあ、どうする？このまま死体になりに来るか？」

刀を肩に乗せてわざとらしく挑発する。

「……………！！）」

アリスの後ろに気配を感じ、腰に忍ばせておいた銃を取り出す。以前購入した愛銃OMEGA オメガだ。ちよつとカスタマイズしてあつてオリジナルより命中精度が上がっている。

振り向きながら素早く照準を合わせて撃つ。

ドンッドンッ！

空薬莖を吐き出して打ち出された弾丸は、アリスに襲い掛かろうとしていた男の肩に命中する。

その動作に無駄な動きは一切無く、流れるような動きで確実に標的に弾丸を叩き込んだ。

「ぐお……………」

肩口に命中した為、死ぬことはない。さすがに幼いアリスの真ん前で殺す訳にもいかなかったからである。

「さあて、後の皆さんはどうしますかぁ？頭を吹き飛ばされますかぁ？それとも斬り殺されますかぁ？」

分かりやすく銃を連中に向けて言い放つ。

「……………う……………退くぞ！」

連中の一人が（たぶんリーダー）言つと蜘蛛の子を散らしたように

逃げ出した。

「けっ、手応えのない奴らだ」

「あ……ありがとう」

「別に礼を言われる事はしてねえがな」

銃をホルスターにしまいながらケースとカゴを持ち直す。

「で、アリスの家は近いのか？」

「え？あ……うん。この森を抜けた所にあるから、わりと近く」

「そうか」

また二人は歩き出した。

しばらくして黙って歩く事に耐えられなくなったのか、アリスが口を開いてきた。

「ねえ、聞かないの？私がどうして狙われているのか」

「興味ない」

冬馬は素直に答えたつもりだったがアリスはブスツと頬を膨らませた。

「聞いてよ」

「なんでだよ？」

「いいから！」

（やれやれ……）

仕方がないので聞いてやる事にした。

「私の家はね、アルビオンでは少しは名の通った貴族なの」

「ほう」

（アルビオン……聞かない国だな）

「王室からも結構優遇されていんだけど……」

「何か秘密があった……と？」

「うん」

アリスが思い詰めたように頷く。

「優遇されていた理由がその秘密なの……私の家は代々 禁忌とされてきた魔法や技術を研究してきたの」

（……なるほど、さっきの連中の目的がわかってきたぞ……）

「でも、最近になって他の貴族たちが王室に敵対し始めるようになって……」

ここまで言つとアリスの体が震えてきた。よほど怖かったのだろう。「つまり、他の貴族の連中がアリスの家の研究に狙いをつけた訳か」
「……………うん」

（研究成果の横取りに事実の抹消か……………どこの世界もやる事は皆同じか…………）

冬馬はアリスの話を聞いて呆れてきた。

「つまらない位にどうしようも無いな」

「……………え？」

「なんでも無い……………と、森を抜けたようだな」

「あ……………本当だ」

森を抜けた先に、アリスが言っていたように古びた洋館のような館が見えてきた。

「あれがお前の家か？」

「うん。そうだよ」

アリスの顔にはもう笑顔が戻っていた。

（……………強い娘だ）

これの様子なら話しても良いだろう。俺自身が疑問に思っていた事と、今までの出来事から推測した仮説を同時に解明できる質問が……………。

「なあアリス」

「なに？冬馬」

「お前、俺が別の世界から来た人間だつて信じるか？」

アリスは笑つて答えた。

狙われる者Ⅱ隠された秘密（後書き）

トンテンカン。

ひとつ叩くは趣味のためー

冬馬：

「作者は一体何やってるんだ？」

アリス：

「んーとね、質問こーなーっての作ってるんだって」

ふたーつ叩くは欲のためー。

冬馬：

「なんでそんなもんを………」

さいごーに叩くは金のためー」

冬馬：

「おい作者」

でもやっぱり趣味のためー？

冬馬：

「おい！………聞こえてないのか？」

やっぱ間違い、金のためー」

ゲシッ！

痛いっす！

冬馬：

「いい加減その妙な歌を止めろ」

妙とは失礼な。この歌は私の人生における価値観を歌ったものだ。

冬馬：

「……うつわ、タチ悪いな」

アリス：

「それで、質問コーナーって何なんですか？」

アリスちゃんは落ち着いてるのね。感心感心。

アリス：

「だって私そこまで黒くないもん」

うわー、耳に痛いねーそれ。ま、それは良いとして質問コーナーとその名の通り、読んでいるうちにわからない事柄の疑問をお答えするコーナーです。見なさい、この読者からの質問の手紙の山を！

カサカサ。

冬馬：

「何も無いな」

アリス：

「何も無いね」

うつ……なんか空しい。でもしよげている場合じゃないよね。君たちは何がある？

（二人は腕を組んで考える）

アリス：

「あ、ハイハイ！」

はい、アリスちゃん。

アリス：

「ねえねえ、私も将来お母様みたいな女性になれるかな！？」

ズルッ！

（作者と冬馬はずっこける）

冬馬：

「アリス……なんか随分と飛んだ質問だな？」

私も冬馬と同意見です……。アリスちゃん、心配しなくても君の将来は安泰です。むしろ有望な人材と言えるかも。……………冬馬、今のうちに確保しとくのも1つの手だよ？

冬馬：

「……………うるせえ」

むふふふ……。顔が赤いぞ冬馬くん？それで、君は質問あるかな？

冬馬：

「質問……………そうだな。俺は……………」

あ、時間ギリになった。ゴメン冬馬、君の質問はまた今度ってことで。

冬馬：

「へ？ち、ちょっと待て！もう終わりかよ？」

それではまた次の後書きでっ） 0（／

冬馬：

「俺に質問させろー！」

異端の研究者たち

「たつく、最初っから気付いていたのかよ」

今いる場所はアリスの家のリビング（？）で、アリスは冬馬の隣に座っていた。

何しろ本が至る所に山積みになっているのだ。実際リビングと呼べるのかどうかすら不明だ。

（さすがは研究者の家だ……足の踏み場も無いな）

ちなみに彼女の回答はこうだ。

「もちろん信じるよ。だってそうなるように召喚したもん」

……… 実にあっさりと答えたものだ。

とはいえ、アリス自身も何が召喚されて来るかは分からなかったらしいが、異世界を対象にして呼び出したのだそうだ。そして、たまに選ばれたのが自分だったらいい。

「胡散臭い宝くじに当たった気分だ………」

冬馬は頭を押さえて唸る。

アリスとの会話と自分が気が付いた時の状況で予想はしていたが、実際に突き付けられると頭が痛くなってくる。

「一応聞いておくが、送り返すとか出来ねえよな？」

「うーん……… わかんない」

アリスは首を傾げる。

「お父様、お母様、わかりますか？」

アリスはテーブルの向かい側に座っていた男女に聞いてみた。

そこに座っているのはアリスの両親だと聞いた。

父親の方は白衣を着たほっそりとした若い男だ。気の良さそうな感じだが、ちよつと身なりを整えれば青年と呼べても問題ないように思える。

母親の方も父親に負けず若い。

長く伸びた緑色の髪に、子持ちだと言うには疑うような若々しさを

兼ね備えており、容姿もとても隣の旦那には勿体ない位の美しさだ。ハリのある豊満なスタイルには堪らない魅力がある。

「冬馬？」

アリスがこちらを見ている。

「あ……ああ悪い、ずいぶんと若い両親だなっと思ってな」

「あらあらお上手ね」

母親の方………確か名前はミリアと言ったな。

「アリスも面白い使い魔を召喚したな」

つられるように父親の方も笑う。こっちの方はアルクと名乗っていた。

「お父様！笑ってないでどうなんですか？」

アリスは頬をプクツと膨らませて答えを急かす。

「あはは……ごめんごめん。送り返す方法だね………うーん難しいだろうね。元々 サモン・サーヴァント はこのハルゲニアの生物を召喚する魔法だからね。契約する時に使った コントラクト・サーヴァント を解除する方法ならあるかも知れないがね」

「………そうか」

（………なるほど。元々同じ世界の者を呼び出す魔法なら、わざわざ送り返す必要は無いか）

極端に言うなら、送り返したければ自力で帰らせる事も出来る訳だ。ところが、アリスはそのメカニズムを勝手に変えてしまったから送り返す魔法が存在するのかどうかも不明という事だ。

「まあ、そう気を落とさないでくれ。なにも異世界からやって来たのは前例が無い訳ではないらしい」

「そりゃ 一体………」

「なんでも昔、トリステイン王国のどこかの村に竜の羽衣という物が空から降りて来たらしい」

「昔？どの位だ」

「今から50年位前かな？」

「50年位前ねえ………」

冬馬は自分の世界の同じ頃の歴史を思い出した。

（確か……世界中の国々で戦争やってたな）

俗に言う第二次世界大戦の事だ。

「貴方、お話も良いけどそこまでにしたら？」

「え？……ああ」

アルクは冬馬の隣に座っていたアリスを見て頷いた。

「すーすー」

冬馬も見ると自分の膝を枕にするようにアリスは寝入っていた。な
んとも可愛いらしい寝息をたてている。

「どーりで静かだと思った」

「ふふふ……今日は疲れたのかも知れないわね」

ミリアはそう言ってアリスを抱きかかえようとして手が止まる。

「あらあら」

「……………おいおい」

アリスは冬馬の着ていたジャケットの端をしっかりと掴んでいたのだ。

「ずいぶん気に入られたみたいね。えっと……………」

「神楽冬馬。冬馬でいいです」

「じゃあ冬馬くん、この娘をベッドまで持っていってもらってもい
いかしら？」

「……………しょうがないな」

渋々と冬馬はアリスを運ぶ事にしたが、意外にも冬馬が抱き抱える
と素直にジャケットから手を離れた。が、今度は腕にしがみついて
来たからあんまり変わらなかった。

（俺……………子供は苦手なんだが……………）

それは、今さら言っても仕方がない事である。

「よつと……………いい加減離せ」

ベッドに下ろしても離さない手を無理やり剥がすと、毛布を被せて
やる。

「私の使い魔と言ったが……………これが使い魔の仕事か？子守りの間
違いじゃないのか」

アリスを起こさないようにそつと部屋のドアを閉める。

「ご苦労様です」

部屋を出るとミリアが待っていた。

「主人が待ってますわ。こちらへどうぞ」

ミリアは廊下の奥へ冬馬を案内していく。

「ミリアさん失礼と思いますが一つ聞いても良いですか？」

冬馬は気になった疑問を聞いてみた。

「何ですか？」

「今、おいくつですか？」

本当に失礼な質問だった。

「ふふ……これでも24ですよ」

「……………はい？」

冬馬の間抜けすぎる一言が木霊する。

（……………今24才つて、アリスを産んだのは14才の時かよ？…

……………あり得ねえ）

冬馬は自らが聞いた質問に今さらながら後悔した。

（……………とんだ喰わせ者だな、あの旦那…）

14才の小娘を手込めにするとはアルク……………恐るべし。

「着きましたわ」

などと考えている内に書斎のような所に着いてしまった。

「入ってくれたまえ」

中からアルクの声が聞こえてくる。

「失礼します……………つて凄い量だな」

書斎は見事なまでに書物で溢れていた。

よく見ると、冬馬のケースも運び込まれている。

（……………そついやGRFを作動させたままだったな）

GRFは対象の周囲に擬似的な無重力を作ること、どんな重い物でも簡単に運用する事が出来るシステムだ。それ故にアルクはここまで運ぶことが出来たのだろう。

「ははは……………驚いたかい？娘から聞いたとは思うけどこれが僕らの

研究の成果だよ」

ざっと見渡してみても詳細はわからないが、膨大な研究データと言う事が見てとれる。

（これが例の 禁忌 の研究データか……………確かに、これだけのデータがあれば欲しがるのも無理はないな）

今更ながら納得するしかなかった。

「ところで僕も君に質問してもいいかな？」

「なんだ？」

「君の持ってきたそのケースだよ。見た感じ魔法は使われて無いようだが、アレは一体なんだい？」

俺のケースを指して聞いてきたが、その目には一目でわかるくらいに好奇心で溢れていた。

（この目を見てるとアリスの親だつてのがよくわかるな…………）

この際だから説明しておく。このケースは冬馬が自作した特殊ウェポン・ラックなのだ。様々な武装を施しており、あらゆる場面で対応出来るよう設計されている。武装以外にも特殊装備が仕込んであるが、全部説明すると長いので省かせてもらう。 G R F システム

も特殊装備の一つだ。

ちなみに正式名称は クラウン・クロス と言う。冬馬は面倒なのでただ単にケースと呼んでいる。

「……………つてな訳だ。理解出来たか？」

冬馬は今の説明をほとんど一気に喋り終えた。

「ふーむ、つまりはそのケースの……………えーっと」

「クラウン・クロス か？」

「そうそう。アリスは君が異世界から来たと言っていたが、このクラウン・クロス を見て僕もやっと納得したよ。……………この兵器はこちらの世界では造り出す事は不可能だ」

「……………だろうな。俺もまだ詳しくは知らんが、技術力は恐らく俺の世界の方が格段に上だろう」

見た感じ魔法関連の技術は発展しているようだが、科学技術はほと

んど発達していないようだ。

「こんな技術が存在していたとは驚きだよ……………」

アルクは感心したように頷いた。

「さて、兵器の技術の話は置いて君の世界の話を聞かせて貰えないかな？無論、このハルゲニアの事で聞きたい事があれば僕の知る限りでよければ説明してあげるよ」

これはありがたい申し出だった。元の世界に帰る方法を探すにせよ、この世界の情報が無ければそれも困難だ。それに、どういう世界かわかればイメージも掴みやすい。

しかし……、さっきのアルクの話を聞いて、浮かんできた可能性がある。

……………いや、危険性と言った方がいいかも知れない。

（もしこの世界の兵器レベルの規準が一定以下だとしたら……………アイツは絶対に危険すぎる）

冬馬が危惧したのは、恐らく クラウン・クロス と共に一緒に召喚されたであろうもう一体の兵器、RAGの事である。

どこに飛ばされたのかは知らないが、ここの研究を狙う輩の事もある。

（奴等にアレの有効性が知れば非常に不味い）

「なあ、これだけ先に聞かせてもらえないか？戦闘に使う魔法や、他の兵器の運用方法だ」

「ん？ああ、構わないよ」

アルクが説明してくれた内容は、想定された危険性がそのまま現実になる事の証明になった。

（決定的だな……………と、なれば）

「悪い、急用が出来た。ちよつと外に出てくる」

冬馬はケースを担いで部屋から飛び出した。

「え？あ……………ちよつと！」

「理由は後で説明する！」

ボタンッ！

勢いよく閉まるドアをアルクは呆然と見ていた。

「……………何かいけない事でも言っただかな？」

頭をポリポリと掻くが、冬馬が飛び出した理由をアルクが知る訳も無かった。

紅き騎士との再会

屋外に出ると冬馬は、ケースの中からワイヤーガンと折り畳み式のアンテナを取り出した。

「どこか高い場所は……」

辺りを見渡していると、一本の高い木が見えた。

「あそこで良いな」

木の頂上付近に向けてワイヤーガンを構える。

パシュ！と言う音と共に先端に付いているフックが撃ち出される。

フックは幹に引っ掛かるのを確認するとワイヤーを引き戻す。

それと同時に木に飛び付く。冬馬はワイヤーが巻き戻される力を利用して一気に登りきった。

「さて、始めるか」

懷からバイザーを取り出すと額に装着する。このバイザーには左側に端末が取り付けられていおり、右側に付いている受信機でバイザーの表面に映像が写るようになっていいる。アンテナの後ろに付いているケーブルをバイザーに接続した。

（ちっ………こんな事なら機体の識別信号を登録しとくんだった）
RAGの機体には全て固有の識別信号がセットされている。なぜなら、カスタマイズの多様性から外見や熱照合が困難なため、機体の識別が難しいのだ。

機体の識別信号はその問題を解消するために付けられた機能である。冬馬がアンテナを使っているのはその信号を捕まえるためだ。

「……… あった！距離は……… よし、そんなに遠くないな」

機体の反応がバイザーに表示されて、距離と方角を指している。

（しかし……… 見つかったは良いが、素直に喜べないな）

出来る事ならこの世界に来てないほうが良かったと思う。RAGの戦闘能力はこの世界では強すぎる。

（誰かに見つかる前に隠さないと………）

バイザーに反応を記憶し早速そこに向かおうと木を降りたが、そこでアリスを初めアルク、ミリアが待っていた。

(……………は?)

「どうしたの冬馬。夜のお散歩?」

アリスは寝起きらしく目を擦りながら聞いてくる。

「いけませんね、お話の途中で抜け出すなんて」

アルクは腕を組みながら文句を言ってくる。

「夜は冷えますから、何か着ないと風邪をひきますよ?」

……………ミリアだけ暖かそうな上着を持って来てくれた。なんだろう?アリスは別にしても夫婦でこの違いとは……………。

「で、結局何しに行く気なの?」

アリスがトコトコと近づいて来ながら聞いてくる。

「落とし物を拾いに行くんだよ」

「落とし物?」

「そうだ」

「私も行つていい?」

「……………子供は寝る時間だ」

「ぶー」

アリスが膨れる。よく膨れる娘だ。

「ならば僕が行こう」

アルクが名乗り出る。

「出来れば一人で行きたいんだが……………」

「アリス、風邪をひかないように暖かい格好で行くんですよ。貴方はこっち」

「わーい!お母様ありがとう」

「僕はダメなのかい?」

「はい」

ミリアは頷いてアルクを引っ張って家の中に戻っていく。アリスはすでに戻っていて、入れ違いに出てきた。

「じゃ、行こう」

「……………なあ、その前に一つ言っていいか？」

「なに？」

「俺の意志は無視か！」

「使い魔だからね」

「……………おい」

（戻ったら使い魔の意味を問いただした方がいいな…………）

仕方がないので、二人で向かう事にした。

方角からするとさっき抜けてきた森の方を示している。

「また森の中に入るのか」

ジャケットから小型のパワーライトを取り出した。ペンライトでも良いのだが、あれは外では光量が弱すぎる。

森に入ってしばらく歩いていると、遠くに赤い物が見えてきた。

（……………あれか？反応があつたのは）

近づいてみてその正体がわかった。

「あ…RAGだ。間違いない、俺の乗ってきた機体だ…………」

赤い物の正体、それは片膝をついた状態で立っていたRAGだった。ただし、どこか違和感がある。ライトで照らしてみる事でその違和感の意味がわかった。

「なんだこれは……………機体の色が変わっているだけじゃない、武装まで追加されてやがる」

冬馬の言う通り、機体の色は手に入れた時には青かった物が今では鮮やかな赤色に染まっていた。武装も持っていた120mmマシンガンは腰部ラックに収められていて、大型ランチャーとは別に背面に細長い収納カバーが取り付けられていた。恐らくはミサイル類ではなく大型の対艦刀みたいな武器が収められているのだろう。

あと、変わっているのは色や武装だけではない。バックパックに付いているブースターやスラスタも大幅に改良された物に変わっている。

「まるで別物だなコイツは……………いや、こっちが本来の姿か？」

武装とブースターの性能から言って、たぶんこの機体は遠距離から

ランチャーで狙撃したのち、ブースターの加速力で目標に肉薄した後、対艦刀でバツサリ切ると言った感じのヒット&ウェイを主体とした機体なのだろう。

（怖え機体だな。だが、なおのこと厄介だぞ）

使い方次第ではこの機体一機で国が落とせる。そういう可能性が出てきた。

「ねえ冬馬、これはなんなの？ゴーレムにしては大きいけど……」

「コイツは俺が乗ってきた兵器だ」

「兵器！？このゴーレムが？」

アリスは驚いてRAGを見る。それもそうだろう。

これだけの巨体で、金属で出来たものを見た事がないのだ。驚くのも無理はない。

「でも、こんなはどうするの？持って帰るには大きいと思うけど……」

……

「それなら大丈夫だ。乗って 帰る」

「え？」

「よつと」

冬馬はアリスを持ち上げると、そのまま機体によじ登って胸部にあるレバーを引き出してコクピットを開けた。アリスを持ったままシートに滑り込む。

「わあ！……いきなり何するのよ」

「悪い悪い。コイツを動かすとなると外にいる方が危険だからな」

「危険って？」

冬馬は右側にあるパネルを操作してコクピットハッチを閉じる。それと同時に周りのモニターに周りの映像が写しだされる。

「すごい。中にいるのに外が見える」

「悪いがシートの裏にでも座って……おい、どこに座っている？」

アリスはちゃんと冬馬の膝の上に座り込んでいた。

「ん？冬馬の膝の上だよ」

「お前な……」

ついついため息がでてしまう冬馬だった。

「仕方ない…… システムを起動する。各システムチェック開始

……」

『全システムオールグリーン』

「な、なに？」

『パイロット照合………確認』

ディスプレイに次々と機体の情報が表示される。

「心配するな、今のはこの機体のAIだ」

「えーあい？」

「分かりやすく言えば、今乗っている機体がさっきの声の主さ」

『YES。私がゼイオンのシステムの中枢である マギ です。よろしく』

「あ……どうも」

アリスはモニターにお辞儀する。

冬馬はその間に周囲の地形をスキャンしながら現在位置を確認する。その結果、アリスの家を起点に南方に集落がある事がわかった。こちらの位置はそのちょうどまん中に位置しているため、機体を移動させなければ見つかってしまうだろう。

「さて マギ、ESC（光学迷彩処理）を起動してこの場所から離れるぞ」

『ラジャー（了解）』

ステルスモードが起動してモニターの映像が青く変わる。これで、周りからはこの機体は見えないはずだ。

「アリス飛ぶぞ、しっかり掴まってるよ」

「うん」

そう言って首にしがみついた。………別に悪い気はしないが、少し操縦がやり難い。

スラスターを調整してなるべく音と光を出さないように浮かび上が

ると、アリスの家の反対側にある森に向かって飛んだ。その森は昼間に洞窟から出た時に歩いた森で、地形の様子や集落との位置関係から隠すのに都合が良かった。万が一使用する場合でも近い方がすぐに乗り込む事が出来るのも利点の一つだ。

「すごい！お空を飛んでる」

アリスは首にしがみついたまま楽しそうにはしゃいでいるが、そのたびに首が揺さぶられて視界がぐらぐらする。

「アリス……頼むから首にしがみついたまま動かないでくれ、……操縦しにくい」

「あ……ごめんなさい」

アリスが動くのを止める。

素直でよろしい。

「この辺りで良いかな？」

レーダーを確認しながら着地出来る場所を探す。

しばらく探していると、ちょうい感じの岩陰を見つけたのでそこに着地する。

「到着つと」

ハッチを開けて外にでると、ハッチの内側に取り付けられている迷彩シートを広げた。特殊素材で出来たこのシートは広げた時に周囲の色に自動的に変化するので、機体に被せればちゃんとした力モフラーージュになる。

「これで遠目ならわからないはずだ」

「へー、色々付いてるんだね」

「まあな。元は野戦用に開発されたらしいからこんな装備も取り付けられているんだ。さて、用事もすんだし家に戻るか。俺もいい加減に眠いからな」

「ふわあ……そうね、私も眠くなっちゃって……すやすや」

「……って、俺にしがみついたまま寝るな！」

「むにやむにや……後よろしく……すうすう」

アリスはどうやら完全に寝入ってしまったらしい。仕方がないから

背中におんぶして行く事にした。

「……って、わけだ。明日詳しいセッティングをするからESCは解除しても良いぞ」

『了解しました。良い夢をマスター』

「おう」

冬馬はアリスを背負って家に向かって歩いて行った。

ちなみにケースはそのまま機体の中に放りっぱなしである。さすがにアリスを背負ったままケースを運ぶのは面倒くさい。

「むにやむにや……………お腹すいた……………」

アリスの寝言を聞きながら冬馬はやれやれとため息をつく。

（ふう、とんだ魔法使いの使い魔になったもんだぜ……………）

そう言いながらも、内心満更でもないなと思う冬馬であった。

魔法と科学と……（前書き）

遅くなりました。

魔法と科学と……

チュンチュンチュンチュンチュンチュンチュンチュンチュンチュン
チュンチュン。

「……………ダアッ！うるさい目覚ましだな！」

冬馬はまだ夜が明けきってない時間帯で目が覚めた。

彼を起こしたのは窓を埋め尽くす程の小鳥たちである。

「冬馬、早くなんとかしてよ。私達までうるさくて起きちゃったじゃない」

冬馬は昨夜に機体の回収を終えると、アリスの家に戻ってきた。アリスはそのまま彼女の自室に持つて行ってベッドに寝かせると、用意されていた部屋で寝ることにした。

今彼女がいるのは冬馬の部屋の入口で、寝起きなのかブスツと膨れっ面で立っている。

「無理言うな。俺だって何がなんだかわからんのだ」

「わからんって、冬馬の部屋だけに集まってるんだよ？」

アリスの言う通り、この小鳥たちは冬馬の部屋のみ集中している。

「だからわからないんだ」

「鳥さんをいじめたとか？」

「それは無い」

「鳥さんからのご意見番とか？」

「無い。……ってか、ご意見番ってなんだよ？」

「鳥さんたちのファンクラブー！」

「絶対無い！っか、いらん！」

「ちえ！」

アリス……………遊んでないか？

『おい、その人間さんよー？』

『すみませーん、こっち向いてくれませんか？』

窓の方からいくつもの声が聞こえてくる。

「なんだ！こっちは今忙しいって……………あれ？」

抜け振り返って怒鳴るが誰もいない。いるのは若干数は減ったものの、小鳥しか見えなかった。

「冬馬……………何もチュンチュンうるさいからって、小鳥たちに怒鳴ることないと思うけど？」

アリスが呆れて冬馬をみる。

「え？……………ああ、まあ、たしかに」

（どういうことだ？今、たしかに何者かの声が聞こえてきたんだが……………？）

「目の前にいるのは鳥だけ……………って、まさか……………」

『お、やつと反応したぞ』

『いやあ、良かった良かった。人間相手でも試してみるもんだね』

『ウンウン、まったくだ』

そう言いながら頷く鳥たち。

（マジかよ……………）

思わず頭を押さえ込むが、その行動にあまり意味がないと判断して聞き返す。

「おいお前ら、一体朝っぱらから俺に何の用だ？」

『おう。ワリイけどさ、昨日持ってきたあのデカイのを別のところに移動させてもらえんかね？どうもアレがあると皆怖がつていけねえ』

どうやらこの鳥たちは俺が置いた場所に文句があるらしい。

「無理な相談だな。あの場所はちょうど機体を隠すのに都合がいいんだ。悪いが怖がるのなら慣れてくれ」

『んな無茶苦茶な』

「無茶でもそうしろ」

鳥たちは渋々去っていった。

「……………」

アリスはその光景を呆然とみている。

「……………あー、どういつ訳か動物と会話が可能になったらしいが、

何故こうなったか説明できるか？」

アリスの頭が横に動く。

「そうか、分らないか。俺にも理解不能だ」

冬馬は両手を上に上げた。お手上げの意味だ。

「うーん、今のはたぶん使い魔の 能力 だと思っよ？」

部屋の入り口からアルクが入ってくる。

「使い魔の能力？なんだそれは？」

「使い魔には契約した時に各々に様々な能力が備わるんだよ。主に主人をサポートする能力がね。例えば使い魔との視野を共有するか、主人にとって必要と思われるアイテムを見つけてくるのも能力の1つだし、今みたいな会話能力もあるんじゃないかな？」

「なるほど……で、俺の能力ってのは？」

「さあ？人が使い魔なんてのは例が少ないからね。どういう能力かは発現してみない事には……」

「そうか」

二人は黙り込んでしまう。

「あのーお父様？」

「ん？ああ、おはようアリス。そう言えば朝御飯が出来ているよ着替えておいで」

「あ……はい」

アリスが何か尋ねたがっていたが、アルクは何事もないようにスルーした。

アリスも渋々といった感じで部屋に戻っていく。

「では君も着替えは………ないみたいだし、一緒に降りようか？」

「ああ………そうだな」

促されて冬馬も食堂へ向かう事にした。

「あら、おはようございます」

食堂に入るとミリアがエプロン姿で出迎えてくれた。

「おはようミリア」

「はい、おはよう貴方。冬馬さんもお好きな席にどうぞ」

「どうも」

テーブルの上には見事な朝食が並んでいた。

焼きたてのパンに山菜のサラダ、ほかにも色々な料理が並んでいる。

「おはよー」

アリスも遅れてやってくる。

「おはようアリス。あらあらすごい寝癖」

ミリアは手早くブラシで整えてやる。

「見事なものだな」

「毎朝の光景さ。さ、食事にしよう」

冬馬はアルトに促されるように朝食にした。

「ところで冬馬くん。昨日の夜は随分と忙しかったみたいけど、何を持って来たんだい？」

ふっくらのパンを頬張ってる最中にアルクは唐突に聞いてきた。

「見たいのか？」

「是非とも見たいね」

身を乗り出して聞いてくる。

どうしたものかと考えたが、帰る方法を調べるにしてもしばらくはここに滞在するだろうから、アレを秘密にする必要もないだろう。

「秘密厳守で頼む」

「わかった」

「いいわよ」

……………ん？今、返事が一つ多かつような。

返事の聞こえてきた方向を向くとミリアまでアルクと同じように近いていた。

「私も見たいわ」

期待の眼差しで見つめるミリアがそこにいた。

(……………似た者夫婦とはよく言ったものだ)

「……………この二人はそう言っているがアリスはどうする気だ？」

「もちろん私も行く！」

予想通りの返事が返ってきた。

「じゃあお弁当を用意しないと♪」

「私も手伝うー！」

ミリア達は早速準備のためにキッチンに向かって行った。

既に気分はハイキングの様になっている。

「……………はあ」

二人に気付かれない様に小さくため息を吐いた。

(こりゃ、天然の能天気だな)

「ではその間に、昨日の続きといこう。私の持つ 魔法 と君の持つ 科学 の交換説明会としようじゃないか。なに、損はさせないよ」

アルクはずいぶんとにやけた笑みを浮かべて冬馬の肩を叩く。

「ああ…そう……だな」

冬馬はこの家族がトンでもないマイペース一家だと言う事に、早くも痛感していた。

「ふゝむ、聞けば聞く程不思議な世界だ」

アルクは冬馬の話を聞いてしきりに感心している。

研究者だからだろうか？まったく未知の知識を疑う事なく受け入れている。

「よく信じるな。俺が話している 科学 の概念はこの世界のとは別物なんだが……」

「未知の物を信じられねば、研究者などをやってられないよ」

アルクは肩をすくめて答えた。その仕草に冬馬も笑う。

「そりゃそうだ。魔法 の仕組みも聞けば聞く程興味深い。人の

限界に底がない事を思い知ったよ」

「ふふふ……私もだ」

ふっふっふつと互いに笑みを浮かべる二人だが、ハタから見ると少し不気味に見えた。

「……………一つ提案をしても良いかな？」

「なんだ？」

アルクの提案に冬馬が顔をしかめる。

「このまたと無い機会だ。君の持つ 科学技術 と私の研究している 魔法学 、この2つを使って新しい何かを作ってみないか？」

「……………な」

その言葉に冬馬は驚愕のあまり言葉を失った。

「名付けて 魔法科学 どうだい？」

アルクの言った意味とは、人間が万物の理 ことわり を突き詰めて会得した 科学 と、自然界の力を用いた精神の力である 魔法 。この相対する二つの技術を融合しよう。

と言う意味になる。

「……………いいな。俺の世界の 科学 の限界と、アルク達の世界の 魔法 の限界。2つ合わせりや新世界が拝めるかもな」

冬馬は体が熱くなってくるのを感じていた。

それは コントラクト・サーヴァント の時よりも熱く、強く、そして激しく、心が高ぶった。

アルクも同じだろう。

体が抑え切れないぐらいに奮 ふる えてる。

「私達二人は似た者同士のようだね……………ふふふ」

「まったく……………クッククク」

自然と笑い声が出てくる。

「ふっふっふ……………」

「クッククク……………」

繰り返し言うがその光景は不気味である。……………いや、不気味を通り越して薄気味悪くもあった。

「あらあら、楽しそうね」

ミリアは準備が出来たらしくキッチンから出てきた。

………素晴らしい神経である。あの空気の中を平然と歩いてきた。

アリスはと言えばキッチンの蔭で二人の不気味な空気に気圧されて、ブルブルと震えて出て来れないでいる。

「………二人ともなんか怖い」

冬馬とアルクがそれに気付くと我に返ったようにアリスの方に振り向いた。

「ああ……悪い」

「ゴメンゴメン」

二人揃って頭をさげる。ミリアはその姿を楽しそうに見ていた。

「では、行こうか。冬馬くん、今の続きはまた帰ってきた後で」

「そうだな。じゃあ案内するよ」

そう言って席を立つと、昨晚機体を隠した岩場へと向かって行った。

「アレだ」

しばらく歩いて目的地に着くと岩場のある一角を指さした。

「………なにも見えないが？」

「カモフラージュしてあるからな。こっちだ」

指さした方へ近いくにつれて、岩場の一部が歪んで見えてきた。アルクは目をこすりながら良く見てみると、何か布の様な物がかかっている事に気が付く。

「ん？あそこに何かあるね」

冬馬はその布に近くとスルツと中に入って行く。すると、何かを覆っていた布がスルスルと上がっていった。

布の正体は昨晚仕掛けておいたステルスシートである。

そして、そこから現れたのは10メートル以上はある赤い巨人であっ

た。

「……………なんと巨大なゴーレムだ」

「……初めて見るわ」

アルクもミリアも呆然と巨人を見上げていた。

「コイツは RAG。俺が乗ってきた異世界の兵器だ」

冬馬はハッチの上に乗りながら説明した。

兵器……………これも 科学 で作られているのか？」

「まあな」

冬馬は機体をポンツと叩いた。

ヴォン！

機体のメインカメラが光り、システムが起動した。

『システムを起動します。マスター承認をお願いします』

「おっと」

冬馬はコクピットに潜り込み手早く端末を操作する。

『承認を確認。おはようございます。機体シークエンスを開始します』

「終了後、待機モードに移行しろ」

シート横のマイクを取り出して音声入力で指示をだす。

『Yes・saa』
イエス・サー

「……………喋れるのか？そのゴーレムは」

「まるで人みたいね」

ミリアもアルク同様機体を見上げて驚いている。

「まあな」

冬馬は二人に簡単にこの機体の事を説明した。

さすがに内部構造やメカニズムなどは秘密にしてある。それこそ専門的な知識が無ければ理解出来ない内容だからだ。

しかし、二人にはそれで十分満足できる内容だった。

「うーむ素晴らしいの一言に尽きるね。まさに神の様な技術だ」

「……………まあ、使っている本人達ですらその技術に手を焼いてるんだがね」

冬馬は肩をすくめて自虐的に笑う。

「何故だい？君たちの技術だろう。現にこうやって

「行き過ぎちまったんだよ」……………は？」

アルクの言葉を遮って冬馬が話し始める。

「俺がアルク達にこの機体を見せるのは、知って欲しかったのさ」

「何を……………科学の事をかい？」

「そうだ。……………科学技術は俺達人間が作り上げたどの生物にもない力だ。遠い昔から築き上げられてきたこの技術は、俺の時代から遡る（さかのぼる）事50数年前に劇的なまでの進化を遂げた。

……………詳しい説明は省くがこの機体もその産物だ」

「……………進化とは戦争によってかい？」

「……………ご明察」

アルクはRAGを見上げて何かを確認するかのように口に出す。

「見た所ゴーレムに見えるが、鎧の様な物を着けている。恐らくは戦闘様に作られたのではないか？」

「ああ、その通りだ。コイツの戦闘能力はハルゲニアのどの兵器よりも高いだろうな」

「だから隠したのね」

ミリアは冬馬の行動の意味を悟って機体を見る。

「強すぎる力は争いを産むから、それが分かったから秘密にしておこうと……………」

「異世界の技術なら尚更か……………」

アルクも同意して頷く。

「……………理解してもらって助かるよ」

冬馬は深々と頭を下げてお詫びする。

「いやいや、僕たちも似たような物だからね。公に出せない事情は同じだよ」

アルクも場を取り繕うように答える。

「……………ところでアリスはどこ行っただ？」

キョロキョロと辺りを見渡してみるが、ここに来たメンバーで1人

足りない事に気が付いた。

冬馬が説明を初めた時には一緒に居たが、何故か見当たらない。

自覚は無いが一応 主人 な訳だから心配はする。

「いったい何処に

「へーそうなんだ」……………ん？」

ふと機体の方から話し声が聞こえてきた。

「……………おいおい」

見上げると……………いた。

アリスはコクピットの中に座り込んで、インカムで 誰か と話し込んでいる。

いや、 誰か ではない。インカムを使っているという事は、恐らくRAGのAI マギ に対して会話しているのだろう。

「驚いたな」

冬馬は感心では無く、驚愕した。

アルク達は見るのは今日が初めてだが、アリスは二度目だ。そんなに驚くことはなかったが、しかしたった二度目であそこまで行動できるとは思ひもなかった。

（アリスは 未知 に対して恐怖を感じてない……………それ以上になんて行動力だ）

冬馬はアリスにインカムの使い方を教えていない。

しかしアリスは、今しがた冬馬が使っていたのを見てその道具の使い方を理解したのだ。

「ねえねえ。他にどんな道具があるの？」

アリスはインカムで マギ に色々な質問を続けていた。 マギ

もモニターに情報を写しながらそれに答えている。

『その前にミス・アリス。何やら外で呼んでいる者がおりますが、どうしますか？』

「そと？」

アリスはコクピットから顔を出す。

「アリスー、お昼にしましょー！」

ミリアがバスケットを持ち上げながらアリスを呼んでいた。

「えっと……」

『どうぞ行つて下さい。質問の続きはまた今度と言う事で』

「うん。じゃ、またね！」

『はい』

アリスはインカムを外してコクピットを出ていった。

『……… またね ですか』

初めて聞く言葉に マギ の電子回路の中で何かが変わる気がしたのを彼自身が微かに感じとっていた。

「……………」

冬馬もアリスの行動に対する マギ の反応の変化を感じていた。

（マシンに対して またね …… か。今の マギ の反応…気になるな）

それは技術者の勘と言ふべきか。冬馬はこれから先、自分の知識とはかけ離れたAIの姿を見るのではないかと、そんな気がする予感がした。

魔法と科学と……（後書き）

カサコソカサコソ

冬馬：

「おい」

カサコソカサコソカサコソカサコソ

冬馬：

「何をしてる」

カサコ……………ゲシッ！

痛いぞ。何をする

冬馬：

「無視するからだろ。で、早速だが質問だ」

いきなりですか？まだコーナーの始まりを言っ……………ゲシゲシ！

ああ！わかりました！始めます！はい、質問は？

冬馬：

「何故更新が遅い？」

初っぱなからですか……………。まあ、色々と事情がありまして

冬馬：

「……事情？」

企業秘密です

冬馬：

「なんだそりゃ？」

あ、そうそう。今回ゲストを呼んでたんだ。何でも聞きたい事があるとか。……どうぞー

才人：

「どもー初めまして」

冬馬：

「……………誰だ？」

原作の主人公の才人くん。まだ会わせてなかったよね？

才人：

「で、質問いいですか？早く帰らないとルイズがうるさくて」

早くも尻に敷かれてますな

才人：

「ほつといて下さい」

もしかしてMっ気が……………ホブウツ！

冬馬：

「黙れ。話しが先に進まん」

.....はい

才人：

「RAGって何？」

また直球ストレートなご質問だね。これについては.....へ
イツ冬馬、パス！

冬馬：

「俺が答えるのかよ！.....何がhey、パスだよ。
RAGってのは人型起動兵器の略称だ」

才人：

「それってMSとかPTやACみたいなロボットと同じ感じ？」

冬馬：

「.....まあな。つか、その言い方だと一部の人間でないと理解出来んと思うが。スペックから言えばACに近いな。それを小型化した感じのロボットだ」

才人：

「なるほど。という事はパンチは飛ばないとか？」

冬馬：

「マシंगाーじゃああるまいし」

才人：

「例えが古いです。最近では ブーストナックル とか スパイナ

ルナツコ とかありますよ?」

冬馬：

「詳しいな」

才人：

「常識です」

私やさっぱりわかりマセン

冬馬：

「とまあ、こんな感じだ。作者、これで良いだろう?」

はい結構です。あ、才人くん。次は出番あるかもしれないから、そんな時はヨロシク

才人：

「はい。ありがとうございました」

お粗末さまでした。では次回の質問コーナーでまたお会いしましょう！

冬馬：

「……………やれやれ」

アリス：

「さくしゃー！私の出番がないぞー！」

研究者の魂

アルク達に機体を見せてから、早くも1週間が経とうとしていた。冬馬はアルクとの合同研究の為、当面の間フェリーテス家に居候させてもらう事にした。

アリスの使い魔としての仕事も研究の傍らしてやっているが、アリス自身は元々冬馬を使い魔として見ていなかったたので、基本的にはアリスの遊び相手みたいな事をしている。

「冬馬ー！ここ教えて」

アリスがデカイ本を抱えてこっちへ来る。

ちなみにアリスの遊び相手と言っても実際には家庭教師に近い事をしている。

アリスの遊びとは、遊び＝実験・研究になっているから俺とアルクと一緒に手伝っている事が多い。

冬馬もアルクと研究しているうちに、このハルゲニアの文字も大分理解するようになった。

幸いアルクの書斎には様々な書物が置かれていたので、簡単な文字から複雑なルーン文字まで普通に読めるようになった。

その関係でアリスに読めない文章を冬馬が教える、というやり取りが定着している。

それとは別に冬馬も驚いた出来事もあった。

以前アリスから王室のお抱えの研究者だときいたが、まさか王族自体と関わりがあったとは思わなかった。

なにせアリスの家に訪ねてきたのが、アルビオン王国の王子であるチャールズと言う少年だったからだ。

コンコン。

機体を見せ、科学の簡単な講義をした翌日の事である。

朝早くにフェリーテス家を訪れた客人がいた。

「アリス！すまないが出てくれないか」

アルクはフラスコと本を両手に持っていて文字どおり手が離せない。冬馬は冬馬で見知らぬ機材をいじくっている為動けない。

アリスはそれを見て扉の方に駆け寄った。

「はい。今行きまーす」

鍵を開けて訪問者を迎えたが、その訪問者をみた瞬間、冬馬を除いたアリス、アルク、ミリアの三人は目を丸くした。

「……チャールズ様！……」

見事に三人の声がハモる。さすがは家族。

「しー、そんなに大声出さないでくれ。一応お忍びで来てるんだから」

口元に指を当てて小声で注意する。

「……………誰だ？」

冬馬が手を止めて顔をあげる。

扉の前に立っていたのはフードを被った男だった。

フードの陰から金色の髪が見えているが後は見えない。

「誰だか知らんが家の中でフードはいらんたる？」

チャールズと言う男はこちらに気づいたのか、被っていたフードを取った。

「ああ、すまない」

出てきた顔に冬馬は驚いた。

別に知っている顔をしてた訳ではない。ただ、頬に変なヒゲ(?)

が生えていたのだ。

「……………なあ、変装するくらいなら鏡を見てやったらどうだ？ 頬に変なヒゲが生えているぞ」

「え！？」

チャールズは慌て顔に手を当てて確かめる。

たしかにあった。ココへ来る途中に変装用の付け髭がズレてしまったのだろう。

「あ……あはは」

付け髭を取って取り繕うように笑った。

（チャールズと言ったが中々に天然が入ってるな……………）

これがチャールズに対する冬馬の第一印象であった。

「で、最初に戻って誰なんだ？」

アルクに聞くが、答える前にチャールズが手で制した。

「自己紹介が遅れたね。私の名はチャールズだ」

「俺は神楽冬馬。訳あってこの家に居候させてもらっている」

互いに挨拶を済ませると、チャールズは冬馬の前にある機材に目を向けた。

何やら小型の筒のような物に手甲らしき物が置かれている。他には見知らぬ金属や風石もあった。

「それはなんだい？」

「秘密だ」

冬馬は素っ気なく答える。

「なんでも レールガン と言う武器を作っているとか」

だが、アルクが代わりに答えてしまった。

「 レールガン ？」

「……………バラすなよ。 レールガン ってのは電磁誘導砲と言って、弾丸を超高速で発射する大砲の事だ」

「……………大砲？ このサイズで？」

材料から見る限り、腕に装着するタイプらしいが、大砲と言うには小さすぎる。

「試作機だからな。だが、威力は強力だぞ」

「ほう」

「ちなみに貸さんぞ」

「……………むづ」

チャールズは少し残念そうな顔をする。

「それで、チャールズ様は今日は何用で来られるのですか？」

アルクのいやに丁寧な口調に、冬馬はチャールズと名乗る少年がアリスの言っていた王室の関係者だと気が付いた。

「ん」

チラッと冬馬をみる。

どうやらただの訪問ではないらしい。

「ああ、彼なら大丈夫です。彼は娘の使い魔として召喚された者ですが、信用は出来る人間です。……………冬馬くん、いいかな？」

「俺は問題ない」

冬馬はそう言ってうなずいた。

「召喚……………？道理で変わった服装をしていると思った。どこから来たんだい？」

「異世界だ」

即答する。

「異世界……………ふふふ……………はははっ！なるほど、確かに変わった服装をしている訳だ！……………では、今造っているのも異世界の物かい？」

「まあな。と、言っても半分は魔法に頼っているがな」

冬馬はこのチャールズの態度に感心した。

彼もアルク達同様、未知に対しての抵抗というモノが無い。早くも冬馬の行動を悟り、堂々と接してくる。

「それで、相談があつたんだろ？」

チャールズにここへ来た理由を促す。

「うむ。異世界からの人間ならば奴らとは関係あるまい」

冬馬は安全だと納得したらしく話し始める。

「……………奴ら？」

「最近、我がアルビオン王国に対して反王国制を唱えだした貴族連中の事だ。名を レコン・キスタ」

チャールズは レコン・キスタ について語りだした。

聖地 と呼ばれる土地を奪還すべく、全ての国家を統一しようと画策している一団の様だが、相当数の貴族を丸め込んでいる為に王国側が不利に追い込まれているとチャールズは語った。

「さらに奴らは、禁断の魔法や技術を求めて動いているらしいから注意に来たんだ」

「なんと……………」

アルクも驚きを隠せなかった。

「だから奴らに気付かれない内に……………」

「それならもう手遅れだ」

冬馬はバツサリとチャールズの提案を否定した。

「一昨日、アリスが襲われた。アリスの話しが本当ならフェリーテス家は既に レコン・キスタ に狙われていると見た方がいい」

「……………な！アリスもか」

……………アリスもか？

「……………まてアルク。じゃあもしかしてお前も？」

「ああ、先週襲われた」

アルクも頷く。

「……………」

チャールズは呆然と聞いていた。

「だ、そうだ。良くはないが杞憂ですんだぞ」

冬馬はチャールズの肩をポンツと叩く。

「それで王子様の用件はまだあるんだろ？」

「な！」

チャールズの顔が驚き顔に変わった。

「やっぱりそうか。今の話して王室の使いにしては詳し過ぎると思

つたからな。王子本人が来るとなると忠告だけとは考えられん」

「……………参ったな。まさかいきなりバレるとは思わなかったよ」

「根拠ならあるさ。普通、変装して来る使いなんてあり得ないだろう？」

「……………完敗だな」

チャールズは肩を竦めた。

「実は君たちの力を貸してほしい」

「戦局を打開したいのか？」

冬馬は聞くが、チャールズは首を横にふる。

「いや、今さら遅いだろう。先日、我々の主力戦艦が強奪された。

それにより制空権が奪われてしまった」

「散々だな。ついでに兵力もそれほど残ってない、と」

「……………その通りだ。だが、せめて奴らに一矢報いたい」

チャールズの肩が震えている。

「残念ですがお力を貸すことはできません」

アルクは首を悔しそうに横にふる。

「やはり駄目なのか」

「家訓を曲げる事はできません。曲げてしまったら私達はただの咎人になってしまいます」

「家訓……………『研究を決して国家の為に使うべからず』か……………道理である。」

研究者とは新たな力を見い出す者であり、使う事は二の次である。ましてや国家などの巨大な組織になると、使用者よりも求める側の方が危険度が高くなる。早い話しが、力を求め過ぎて暴走しやすいのだ。

（……………俺の世界がいい例だ）

新しいテクノロジーを戦争に使った為に、戦局を修復不能なまでに拡大させてしまった。

無論、そこに国家や大企業が絡んでいたのは言うまでもない。

（しかし、せつかく頼って来た者を無下に断るのもな……………ま

てよ？)

冬馬は家訓と言う理由で断る事に少し納得出来ないからか、ちょっと屁理屈をこねてみた。

「なあアルク。その家訓は個人目的なら使っても良いのか？」

「え？ああ、もちろん問題ない。そもそも……………そうか！その方法なら」

アルクは冬馬の質問の意味がわかり、チャールズに向き直る。

「チャールズ様、確かに家訓によりアルビオン王国への協力は出来ませんが、友を助ける事であれば喜んで協力させていただきます」

「本当にかい！？」

屁理屈をこねた内容は、まさに家訓の裏をかく事にあつた。

研究の悪用を防ぐだけが目的なら、それ以外の運用は問題ない筈である。友を救う為にアルク達が力を振るう。そのやり方なら使う本人がしっかりしてさえいれば悪用もへつたくれも無い。

ただし、冬馬はチャールズに条件を付け加える事を忘れなかった。

「その代わり、今すぐは無理だ。今こちらが動けば連中が黙ってはいないだろう。だから、本当にヤバくなったら助けてやるよ。それまでは自力で頑張りな」

「ああ、わかった。その時は頼むよ」

チャールズはアルク達や冬馬に頭を下げた。

「そんな、恐れ多いですわ！」

さつきから静かに見ていたミリアもこれにはたまらず口を出す。

「いや、こうさせてくれ。今は君たちの様な者が一人でも欲しいのだ」

冬馬にもチャールズの気持ちは理解できた。既にほとんどの味方を失い、頼るべき他の貴族も無いに等しい状況ではアルク達の様な者は何よりも貴重だ。

その為なら王族の威厳を殴り捨てても構わないのだろう。

(……………中々に肝の座った奴だ)

まさに感服の一言に尽きる程の潔さだった。

「冬馬くんと言ったね。君は初対面なのに何故協力してくれるんだい？」

チャールズは冬馬に向き直り、理由を聞いてきた。

まあ、これもわからん訳では無い。無いが、冬馬の理由は至極簡単なものであった。

「なに、ちよつとした気まぐれだ。アリスやアルク達にも借りがあるしな。……理由なんざそんな所だ」

この返答にはチャールズも開いた口がふさがらなかった。

「……………それだけの理由で？」

「不服か？何なら他の大義名分を付けようか？」

「えー？いついや、十分だよ。……………まったく、君は異世界云々は関係無しに変わった男のようだ。アルビオンのどこを探しても君の様な男はいないだろうな」

「いたら困るだろ？」

「確かに」

冬馬とチャールズはどちらともなく笑みを浮かべた。

そこには、さっきまでの深刻な表情は写っておらず、自然の笑みがこぼれていた。

「さて、こうと決まれば長居は無用だ。城に戻るよ」

「ああ、気をつけてな」

「君たちもね」

そう言い残してチャールズは帰っていった。

「冬馬くん、ありがとう」

チャールズの出でいった扉を見つめながらアルクは冬馬に頭を下げる。

「礼を言われる程の事はしてないがな」

冬馬は中断していた作業に戻ろうとしたら、アリスとミリアにも止められた。

「私達からお礼を言わせて欲しいの。あなたが言ってくれなければきつと後悔していたと思うわ」

「冬馬、ありがとう」

二人そろって頭を下げられると、さすがの冬馬も困惑する。

「まてまて、まだ始まったばかりだろ？礼を言うなら約束を果たした後にしようぜ。連中が動き出す前にこっちも準備を整えないと」冬馬は慌て三人を宥める。

「ああ……そうだったな。しかし、なにをすれば良いのだろう？」アルクも顔を上げて考えるが、何も思い浮かばないらしく考え込んでしまった。

仕方ないので冬馬が提案を出す事にした。

「まずは、連中が襲って来た場合に備えて脱出手段を確保しておくこと。出来れば研究内容を漏らさないやり方がベストだ。理想としては研究記録と一緒に脱出したい」

「それなら良い方法があるわ。私のお父さんが残したマジックアイテムがあるの」

ミリアは胸に手を当てて答える。

「なら研究記録に関してはミリアに任せて、次だ。俺とアルクは可能な限り 魔法科学 の研究を続けて、試作品を用意しよう。後で役に立つ筈だ」

「わかった」

アルクも頷く。

「アリスは？」

こちらを見上げてアリスが聞いてくる。

「アリスは俺とアルクのお手伝い兼魔法の勉強だ」

「お勉強？なんで？」

アリスは不思議そうに聞いてくる。

「これから先、色々な知識を養っていかないと大変だからな。だから今の内に覚えられる知識は覚えておいた方がいい。わかったか？」
「うん」

アリスは頷くと書庫へ走っていった。恐らく可能な限り魔導書を読み倒す気だろう。

「アリスー、無理はするなよー！」

「はい」

一応返事は返ってきた。

「じゃあ、行動開始といきますか」

こうして、それからの一週間は慌ただしい準備の毎日だったわけだ。

冬馬は、研究の合間にアルクにだけは冬馬のもう1つの秘密を打ち明けていた。

その為、研究成果のほとんどを冬馬専用の武器に当てる方向に決まった。

一方ミリアが担当していた研究記録の方は、フェリーテス家秘蔵のマジックアイテム 魔導の書庫 と言う一冊の本の中に納めるとの事らしい。

この 魔導の書庫 と言うマジックアイテム。1ページの中に何百冊もの書物の内容をコピーできる代物らしく、遙か昔に封印されていたのをミリアのお父さんが盗ってきたと説明してくれた。

…………… 一体何者なんだ。

そのコピーした内容は、念のために俺のRAGのメモリにもバックアップしておく事にした。

こうして来るべき時に備えての準備は着実に進んでいった。

それでも漠然とした不安は片時も頭を離れる事はなかったが。

レコン・キスタ

この組織の影は少しずつ近いて来ている。
滅びを連れて。

研究者の魂（後書き）

（お詫び）

ウェールズの名前をチャールズと間違えておりました。

次号からは直しますので何とぞご了承のほどをお願いします。

> (| | :) <

双月のお茶会

準備が始まってから一週間も経つと、慌ただしいながらも普通の日常生活へと少しずつ戻っていくのを冬馬は感じていた。

「なあアルク。前から気になっていた事があるんだが」
作業をしながらアルクに質問を投げかけた。

「なんだい？」

「お前、一体いつ知り合ったんだ？」

視線をミリアの方にチラツと向ける。

ささやかではあるが、二人そろって二十代半ばで十歳の娘をもっている事に疑問を覚えたのだ。

「ミリアとかい？ そうだね、今から１１年位前だったかな」

アルクも手を休めずに答える。

「私は昔ある貴族の１人息子として生活していたんだが、ある日倉庫に眠っていたマジックアイテムを興味本意で使ってしまったね。そしたら屋敷が半壊してしまったのだ。それが原因で勘当されてしまったんだよ」

あははと、笑いながら話すアルクだが、内容はちつとも笑えない。

（…………… どんだけのマジックアイテムを使ったんだよ？）

「それ以来、禁断とか禁忌の魔法やアイテムに魅せられてその研究に没頭してしまった。という訳さ」

「…………… なんつーか、スツゲエ分かりやすい理由だな」

「まあね。ミリアと出会ったのはそんな時さ。私の研究の噂を聞いたらしくってミリアのお父さん、先代のフェリーテス家当主アラドが訪ねて来てね、『私の研究に手を貸してもらえないだろうか？』って言われたんだよ。今まで煙たがれながら研究してきたからね。すぐにその話に飛び付いたんだ」

アルクはその当時を振り返りながら話を続けていく。ただし手は止めずに。

(……………器用な)

冬馬も手を止めずに聞いていたのでどっちもどっちである。

「その時に助手として紹介されたのがミリアだった。……………はつきり言つて一目惚れだったね。彼女はハーフエルフだったが、そんなのは関係ないくらいの綺麗な娘だからね。ダメ元でプロポーズしたらOKしてくれた時は嬉しかったな」

いかん……………そろそろノロケが入ってきた様である。

だが、初めて聞く単語が出てきた。

「ハーフ……………エルフ？なんだそりゃ？」

「ああそうか、そう言えば話してなかったね。エルフは古くからこのハルゲニアにいる先住民の事だよ。聖地より始祖ブリミルが現れ、その地を我々から隔離した種族がエルフなんだ」

「そいつは例のレコン・キスタの奴らが目指している……………」

「そう。そして人間たちと最も対立している種族でもある」

アルクは始祖ブリミルと呼ばれる者と聖地やエルフに関する説明をしてくれた。

「ほう、俺も聖地とやらの興味が出てきたな。つまり所ブリミルって人間は突然そこに現れたんだな」

「そういう事だね。……………それでだ、私とミリアはその後……………」

……………」

完全にアルクはノロケトークに突入してしまい、この後一時間に渡り聞かされ続けた。

(……………聞くんじゃなかった)

冬馬はこめかみをピクピクさせながら黙って聞いていた。正直、他人のノロケ話は結構キツイ。

ちなみにこの会話中に二人の手が止まる事はなかった。

その日の夜、ワイン片手に冬馬は月を肴に飲んでいた。

地球と違って赤い月と青い月が並ぶように浮かんでいるのは、なか

なかに乙なモノである。

しかし、冬馬の頭にあるのは昼間聞いた始祖ブリミルの事であった。
(……始祖ブリミルは 聖地 に突然現れた……か。まるで最初
っからハルゲニアとは別の場所から来たような話し方だな。………

………ん、別の場所？それじゃまるで俺みたいないな………)

そこまで考えていると、部屋の扉がノックされている音に気がついた。

「開いてるよ」

冬馬はひとまずその事は頭から外しておいて、客人を迎える事にした。

「あら、お邪魔だった？」

入ってきたのはミリアだった。手にはツマミの乗ったお盆とワイン
を持っている事からこれから一杯やるのだろう。

「ご一緒にいいかしら？」

「酒の肴をわけてくれるならな」

「決まりね」

ミリアはお盆をテーブルに置いて冬馬の横の椅子に座った。

「いいのか？旦那の晩酌をしなくて」

「あの人は元々お酒弱いから」

「そう言えば酒飲んでる所を見た事なかったな」

持ってきたグラスにワインを注いであげると、ミリアは軽く一口飲
んで冬馬に話しかけた。

「昼間は二人して何話してたの？」

「話………ああ、二人の出逢いを聞いてみたんだ」

冬馬は昼間の会話を思い出す。が、大部分がノロケ話に侵食されて
いてはつきりとは思いつけない。

(………だめだ。相当効いたな、あのノロケトーク)

頭を押さえて唸る。

「大丈夫？」

ミリアは心配そうに顔を覗かせる。

「大丈夫……………だと思う。アルクの奴のノロケ話を散々聞いたからな。頭の中に響いてやがる」

「あらあら……………」

少し困った笑みを浮かべるミリアであった。

「でも昔っから変わってなくて安心したわ」

「そうか」

冬馬も押さえていた頭を戻して話の続ける。

「でも聞いたんなら私の秘密も知ったのでしょっ？」

「ハーフエルフの事か」

「そう。やっぱり私みたいのは厄介者として見られやすいし、もしかしたら貴方も……………」

冬馬から視線を反らしたが、冬馬はお構い無しに答える。

「ハルゲニアの常識なんぞ俺の知った事じゃない。俺の世界にはエルフこそ存在しないが、ハーフもクォーターも幾らでも存在している。いちいち気にする奴はいないさ。いたとしてもソイツは頭の中が壊れているだけだ」

はつきりキツパリ言い切った。

冬馬の物事に対する概念には、人種差別と言う単語は存在しない。存在する差別は愚者と狂者に対してのみである。

「言い切るわね」

「まあな」

冬馬はこれでもかと言う程にふんぞり返る。

「でもクォーターって？」

ミリアは聞き慣れない言葉に冬馬に聞き返した。

「クォーターってのはハーフの次の代、三代目って意味だ。この場合ハリスがそうだな」

「そうなんだ」

ミリアは感心した様で話題を変えた。

「そう言えばアリスも最近をよく外に遊びに行ってるけど、どこに行ってるのかしら？」

「アリスなら マギ の所に勉強に行つてるとさ」

「 マギ ってあのゴーレムの？」

「ああ、なんでも面白い知識を覚えてくれてるらしい。何を教えてるんだか」

肩をすくめて答える冬馬をみてミリアはクスクスと笑いだす。

「なんだよ」

「クスクス……ゴメンゴメン。なんか二人を見ていたら本当の兄妹みたいで……フッフ」

「……………兄妹ね」

確かに冬馬もアリスを妹のように見ている節があるが、こつもキツパリと言われると返答に困る。

「確かに主人と使い魔って関係じゃあないな。……………そうだ、ついでにミリアの方も聞いておくか」

「なにを？」

「アルクとの出逢い。アイツは途中でノロケに入つたからよくわからん。エルフについても知りたいしな」

「ふふ……いいわよ。話してあげる」

ミリアはワインを眺めながら話し始めた。

「私のお母さんってエルフなのは知ってるわね。昔、お父さんは歴史の研究のために 聖地 へ向かつて旅をしていたの」

「ミリアの親父さんはアラドって名前だったっけ？研究者は研究者でも考古学者なのか」

「そう。その関係で色々な魔法やアイテムを扱えたり知っていたわ。お母さんとの出逢いも 聖地 の調査をしていた時みたい。砂漠で倒れていたエルフを介抱してあげたのがきっかけで二人は恋に落ちたんだって」

「……………よくすんなり済んだな。エルフとは仲が悪かつたんだろ？」
「そこはお父さんが説き伏せたそうよ。『死にかけた者を助けるのに、種族もへつたくれも無い！だから貴女を助ける！』って言ったみたい」

「…………一応、口説いたって事になるのか？」

「……………どうだろう？」

かなりストレートな性格をしているようだ。

「そのあとロマリアの実家に帰って家族に猛反発されただけで、結局家族も説得して家を継いだ拳げ句にお母さんと結婚したんだって」

「……………無茶苦茶だな。その親父」

恐らく、相手が国家でも気に入らないなら強引になんとかしてしま
うのでは無いかと冬馬は思った。

「でもロマリアにはいられないから、このアルビオンへ引っ越した
そうよ」

「……………」

冬馬は言葉も出せないくらいに啞然としている。

本物の自由人とはこれ程のモノなのかと思わずにはいられなかった。
冬馬は気づいていないが、彼も似たような行動をしている事にミリア
アは感じ取っていた。

「私がアルクと出会ったのは、お父さんが彼の噂を知って訪ねた時
ね。彼、ほとんど隠居同然の生活をしていたらしくって、スツゴク
酷い格好だったの」

「で、そんな奴のどこに惹かれたんだ？」

「目よ」

「め？」

「なりは汚なくても、その目だけはとても澄んだ綺麗な目をしてい
たの。ああ……………これが一目惚れっていうのね。それからすっかり
仲良くなっちゃって、彼からのプロポーズを受けた時は天に昇る思
いだっただわ」

ポウと頬を赤く染めるミリアだったが、冬馬は慌て止める。このま
まではアルクの時の二の舞になってしまう。

「待て待て待て待て、ミリアちょっと待て。ノロケたいのはわかる、
わかるが止めてくれ」

本当に似た者夫婦だと言う事に再認識させられる。

「ふう」

ぷくーと膨れる所は娘とよく似ている。いや、この場合は逆か。

その後話題はエルフの話しに移り、二人はワインが空になるまで話し込んだ。

夜も深くなり、酒も進む進む。

どうも酔いが回っているのか、冬馬も自分の事を、科学 以外に今まで何をやってきたかをミリアに語った。

「俺はジャンク屋を営む前には傭兵をやっていたんだ。日本で産まれてすぐに戦場へと少年兵として送り込まれた。武器を作る技術も扱う術もそこで身に付けた。」

その後…………… 一時期は紅い翼^{レッドフェザー}つて組織のリーダーをやっていた事もあった。対戦争用の特殊な組織さ。戦争根絶なんて目標を掲げて

いた事もあったな」

「それがなんでジャンク屋つて言う商売なんかに変えたの？」

「ミリア、ジャンクつて言葉の意味を知ってるか？」

ミリアは首を横に振る。

「ジャンクの意味はゴミさ。色々な理由でぶっ壊れたスクラップ品の総称だよ」

「ゴミ屋さん？」

「そうとも言っ。ジャンク屋はそういったゴミをまた使えるように直す修理屋の事だな」

「傭兵から修理屋？随分と変わった転職ね」

「まあな。理由なんか簡単さ。言ってしまうえば戦争が嫌になった。戦争は色々な物を、人を、生活も思い出さえも、壊すだけ壊して後には何も残しはしない。そんな生活が酷く嫌に感じてな……………。だから壊すのを止めて直す道を選んだ。人を直す事は出来なくても、生活の支えになる道具くらいは直したいと思ったのさ」

冬馬は酔っているのか、自分でも信じられない程に饒舌に話してい

た。

「まあ、そのために軍の施設に潜り込んだ方がいいが、道具は落とすは連中に見つかるとは大騒ぎ。挙げ句の果てにRAGをパクってこのハルゲニアに召喚されたって訳だ」

「ずいぶんと無茶苦茶やるわね。お父さんという勝負かも」

「よせやい。そこまで派手に生きてないさ」

「説得力が無いわね」

ミリアも冬馬もどちらともなく笑いだす。ただし深夜という事もあって小声でだが。

それから、2つの月を着に晩酌を楽しんだ後にミリアは自分の部屋に戻っていった。

トラップだらけの脱出劇

森がざわついている。

正確には多数の殺気が森の至るところにひしめいているのだ。

「ひいふうみい………不味いな、軽く30人はいるぞ」

冬馬は窓の向こうの気配を探る。

「いよいよ来たか………」

アルクは荷物を抱えながらじつと構える。

奴らが来たのは今朝になる。森の動物たちが教えてくれたので早く気付く事が出来たのだ。

逃走計画の一つに冬馬は、自分の使い魔の能力を用いて動物を使った監視ラインを引いておいたのだ。

他にもアルクの使い魔のフクロウも夜間の警戒に使っていたので、森の中限定の絶対監視体制を作っている。

今、家の中にはアリス以外の全員がそろっていた。本当ならすでに誰も居なくなっている予定だったが、ミリアの方が思いの外時間がかかってしまった。

「ミリア、あとどれくらいかかる？」

「どんなに急いでも20分は必要よ」
微妙な数字だ。

守るにも相手の数が多ければ、攻め手を封じながら時間を稼ぐしか有効手段がない。

幸いな事にアリスだけは、昨夜の内にRAGのコクピットの中に避難してもらっている。

機体をオートモードに切り替えてあるので、この状況化では最も安全な場所になっている。

アレを生身の人間が破壊する事は物理的に不可能だ。まして、起動しているのなら返り討ちだって造作もない。

「問題は数か……。罠でどれだけ殺れるかだな」

トラップ

家の周囲の林にはいくつもの落とし穴を仕掛けてある。本当なら地雷が欲しかったが、そんな物は持っていないし作る訳にもいかない。地雷の威力を知らないあの連中には効果的な手段だが、問題はアルクたちも知らない事だ。

逃げる時にうつかり踏めば即アウトだ。

まあ、落とし穴にも殺人トラップは仕掛けてある。

「うわっ」

林の奥で早くも引つ掛かった奴が出てきたようだ。冬馬は双眼鏡を取り出して確認する。

見ると、細い板に打ち付けられた杭に胸を貫かれて絶命している男がいた。

「返し板　に引つ掛かったな」

返し板

古来からある落とし穴のバリエーションの一つで、穴の入り口に細い板を仕掛けておき、はまった者は時間差で板がはね上がって顔面に直撃する仕組みだ。

冬馬はその長さを大体胸から腹部くらいに合わせておき、杭を逆さに打ち込んだのを仕掛けていた。これなら引つ掛かった者は何処かしらに致命傷を与える事ができる。

さっきの奴は運悪く心臓に当たっのだろう。

「わっ！」

「しまった！」

「ぐえっ！」

次々と罠に引つ掛かるが、どうも警戒心の薄い連中のようなのである。冬馬は　返し板　以外にも色々な落とし穴を作ってたが全員見事にはまったらしい。

「アホかコイツらは？」

その無様っぷりに少し呆れてしまう。

だが、次に来たのは剣を構えた兵士たちだった。

今度は全員空中を浮いている事から、　フライ　か　レビテーション　を唱えているようだ。しかし、無論冬馬も対策はしてある。アルクの助言の下、木と木の間に目に見えない程の細いワイヤーを張り巡らしてある。

魔法科学　の作品の一つ、　スラッシュワイヤー　である。練金の魔法と地球の合成繊維を用いたワイヤーは、たった一本で1tまでの重量物を軽々と持ち上げる事ができる強靱なワイヤーになった。「ぎゃあ！」

ワイヤーにかかった兵士の一人がバラバラに切り裂かれた。このワイヤー、その名の通り極細の糸で対象をバターののように切ってしまうのだ。

これにより兵士たちの足が止まらざるを得なかった。

「よしっ」

思わずガッツポーズする冬馬だが、アルクはポツリと呟く。

「弱点に気が付かなければいいが……………」

そう、このワイヤーには致命的な欠点があった。火に弱いのだ。自己の発する熱なら耐えられるが、外部からの熱量には悲しい程弱い。

「あ…溶けてく」

「……………気付くの早いって」

後方にいたメイジの　ファイヤー・ウォール　によって、呆気なく溶けていくワイヤー。

それにより進軍を再開する兵士たち。

「次の手はつと……………」

冬馬は近くに吊るされたロープを手繰りよせた。

「来ましたよ！」

アルクの合図と共にロープの一本を切る。

すると家の外壁に偽装してあった丸太が振り下ろされて兵士たちに直撃した。

空中にいたから避けられる筈もなく、木や地面に思いっきり叩きつけられた。

「やりますねー」

「まあな、単純な罠ほど引つ掛かり易いつてね」

冬馬は残りのロープを全部切つて、後の兵士たちを一層する。見れば既に30人いた兵士が10人程までに減っていた。

「ミリアー、終わったか？」

冬馬とアルクはミリアの様子を見る為に後ろを振り向いた。

「……………!!」

ソレに気付くのは同時だった。

「ミリア！」

「ちいっ！」

アルクはミリアの元へ駆け出し、冬馬は咄嗟に近くにあった椅子を掴んだ。

その次の瞬間だった。突然窓から ファイヤーボール が飛び込んできた。

「せいっ！」

冬馬は反射的に椅子を火球に投げつけて迎撃し、間一髪間に合ったアルクは エアシールド を展開して残りの熱量を防ぐ。

「野郎！」

「まだです。次が来ます！」

アルクの警告に冬馬は今度はテーブルを持ち上げた。

「アルク！」

すぐさまアルクが練金でテーブルを鉄にかえる。

それをアルクとミリアの盾になるように構えたら、窓から大量の氷の矢が降り注いできた。

しかし、その^{くらくら}尽くが鉄に変わったテーブルによって弾かれる。

「あらよつと！」

今度はそのテーブルを窓の外に投げつけた。

さすがに命中はしなかったが慌てる姿が見てとれる。

「終わったわ！」

ミリアの終了の声が響くと冬馬はすぐに次の行動に入った。
「よし仕上げだ」

屋敷の外で襲撃の指揮を取っていた指揮官のフィレロース子爵は、
獲物の思わぬ抵抗に地団駄を踏んでいた。

「うぬぬ……なぜあの様なボロ屋敷が落とせんのだ！」
でっぷりとした腹を揺らして激昂するが、既に用意していた兵士の
大部分がやられていた。

「これでは王国を裏切ってまで レコン・キスタ の奴らに取り入
った意味がない！あの研究成果さえ奪えればワシは幹部にも成れる
と言っのに！」

フィレロースは残りの兵士たちに突撃を命じた。

「行けえい！中の女以外は殺して構わん！」

フィレロースの狙いは2つあった。一つは研究成果で、もう一つは
ミリアとアリスである。

子爵の趣味で器量の良い女なら人妻だろうと手に入れる、相当の女
好きだった。それも年齢は問わずにである。

「必ず手に入れてやるぞ………」

だが、結局無駄になる事は本人には分からなかった。

「準備はいいな？」

「ああ」

「大丈夫よ」

冬馬は暗闇で二人に最終確認をする。

今いるのは台所にある地下室である。

息を潜めていると大勢の足音が聞こえてきた。

大方、残りの兵士を突入させたのだろう。

バイザーからRAGがスキャンした映像が送られてくる。

「ひいふう……残り11人か。………ちっ、指揮官はいないな」

冬馬の目的は、残りの戦力を屋敷と道連れに自爆させる事である。

爆弾はRAGに積まれていた小型閃光弾を使用した。小型と言っても質量がRAG用だから閃光弾でも屋敷ぐらいは吹き飛ばせる。

それを遠隔操作で爆発させるが、逃げた事がバレると面倒な為に臨時シエルターを作って隠れているのだ。

ちなみにこの臨時シエルター、元々が地下室なために普通に隠れたのでは屋敷もろとも吹き飛んでしまうのだが、ミリアとアリスだけが使えると言う魔法を使ってもらった。

一対象の攻撃エネルギーを任意の方向へねじ曲げる魔法で名前はリフレクション と言うそうだ。

カウンター と言う魔法の応用らしいが、この魔法を使えばこちらへの衝撃はほとんど軽減できるらしい。

「ん？爆弾に気づいたな」

足音が爆弾のある部屋で止まった。最も、爆弾である事に気づいた者はいないだろうが。

「二人とも伏せてな」

連中がまた動き出す前に冬馬は爆破スイッチを押した。

「……………は？」

フィレロースは我が目を疑った。疑わずにはいらなかった。

兵士を突入させてわずか2分で屋敷は強力な光と共に粉々に吹き飛んだ。兵士も、そして研究成果もミリアとアリスと言う娘も、全部吹き飛んだ。

「……………なぜ」

答える者は誰もいない。

「何故だー！」

絶叫が森に木霊する。

ボコッ

「うわぁ！」

突然瓦礫が盛り上がり、男が顔を出した。

「……………ふー、なんとか出られたな」

自分の兵士ではない。知らない男だ。

「おーい、出て来ても良いぞ」

さらに男に続いて二人出て来た。こちらは見たことがある。

「き……………貴様はアルク・フェリーテス！そしてミリア・フェリーテスだな！」

出て来たのは標的だったミリアと他一名だった。

「……………ん？なんだあの豚は？アルク、ハルゲニアには派手に着飾った豚が二足歩行出来るのか？」

どれくらい言われ方である。

冬馬は今、絶叫らしい声を出した物体をみた。

「あれはフィレロース子爵だよ。そうか、貴方はレコン・キスタ側に寝返ったのですか」

「ヒレにロース？本当に豚じゃねえか！で、肩ロースはあの辺りか？霜降り肉も真つ青な脂身だぞ？」

「私は豚肉ではなああああい！フィレロースである！」
脂肪をブルブル震わせながら叫ぶ。

「おお！人語が喋れる豚だ」

冬馬は完全にフィレロースで遊んでいた。

見るとアルクとミリアも必死に笑いを堪えていた。どうもツボにはまったらしい。

「おおおおのおおおれえええ！平民風情があああ！」

凄い怒りで大気ならぬ全身の脂肪が更に震える。

ブルブルブルブルブルブルブルブルブル。

「だぁはっはっは！スゲエ震えるぞ！脂肪が震えてるぞ！」

冬馬が先に限界にきたらしく、盛大に笑いだした。

アルクとミリアも誘発されて笑いだす。

「あーはっはっは！」

「ふ、フフフ……アハハ！」

「貴様らナメとるのかー！」

怒り任せに特大　ファイヤーボール　を撃とうとしたが、乾いた破裂音と共にフィレロースの額に小さな穴が空いた。

「……………は？」

そのまま地面に倒れる。

アルクとミリアも笑うのを止めて冬馬をみる。

冬馬の手にはいつの間にか拳銃が握られていた。硝煙の煙が銃口から漏れているのがわかる。

「ナメているのはお前だ、豚野郎」

銃をホルスターにしまいながら、RAGのある岩場に向かって歩き出した。

「ここから先は遊びじゃねえんだ。行くぞ」

「あ……ああ」

「……そうね」

アルクもミリアも黙って頷く。

そう、既に戦争は始まっているのだ。

この脱出劇は、ただの前哨戦に過ぎないのを冬馬は理解していた。

この脱出劇こそ、アルビオン王国VSレコン・キスタの戦争に冬馬達が参戦した第1ラウンドになった。

もう一人の相棒

岩場に戻るとRAGからアリスが降りてきて冬馬たちを出迎えた。

「お父様ー！お母様ー！大丈夫でしたか。……………あと冬馬も」

「俺はついでか？」

「だって冬馬だもん」

……………使い魔だもんと言われるよりはマシと思うが、なんか釈然としないのは気のせいかな？

「アリス！待たせたね。ご覧の通り大丈夫だよ」

「ちよつとススだらけになっちゃっただね」

「まあ、俺が原因だな」

冬馬はポリポリと頬をかいて付け加える。

「とーまー？」

アリスがジロツと睨むが気付かないフリをして流す。

「さて、無事に合流した事だし、アルクたちは予定通りに別ルートで逃げてくれ」

「わかったアリス、ちゃんと冬馬くんの言うことを聞くんだぞ？」

アルクはアリスの視線に合わせて頭を撫でてやった。

「もう行っちゃうの？」

アリスの表情が不安で曇っていく。

「ごめんねアリス。大丈夫よ、また会えるわ」

ミリアは、アリスをそつと抱き締めて自分と同じ色の緑色の髪を優しく撫でてあげた。

冬馬の脱出プランはこうだ。

まず連中が襲撃して来るのを待ち、その後撃退したのち冬馬とアリス、アルクとミリアの二手に別れてウェールズの居るニューカッスル城を目指す。こうする事によって追っ手から行方を眩まし易くなる訳だ。幸いアルクも逃走経験は豊富だし（理由は知らんが）俺も

捕まる程間抜けではない。

そして、無事に合流したらウェールズと共に国外へと脱出する。これが大体の筋書きだ。無論そう都合良く行けるとは思って無いので、そこは幾つか考えてはある。

「これを持って行ってくれ。俺の世界の通信機だ。最大で2キロメートル迄なら通信が可能だから何かあれば連絡をくれ」

冬馬はアルクに軍用トランシーバーを渡して簡単に使い方を説明する。

「わかった。冬馬くんも無事にたどり着く事を願っているよ」

「発案者の俺がしくじる訳ねえだろ」

冬馬は笑って返す。

「たしかに。じゃあアリス、お城でまた会おう」

アルクたちは荷物を抱えて森へと去っていく。まだ警戒エリアは健在だから森を抜けるまでは大丈夫だろう。問題は俺たちの方だ。

「さーて、このRAGをどうするかな？」

冬馬は自分の赤い機体を見上げる。

せつかく逃げ出してきたものの、これからの行動を考えるといつまでもこの機体を連れて歩く事は出来ない。

いくらESCを使用していても人の目を完全に欺くことは不可能だろう。まして、今のアルビオンの情勢をみる限り発見されたが最後に軍隊が総掛かりでこのRAGを奪いにくる事は容易に想像がつく。

「あの連中…………… レコン・キスタ 側の貴族だったな」

アイツらが襲ってきたのもフェリーテス家が王国側に付くのを阻止あわよくば禁術などの独占を狙ったのだらう。

何にしても、どちらにしろこの機体の戦闘能力は双方にとって大局を左右する程の代物だ。

（手に入れた側が敵はおるか、世界すらも征服することが可能になる絶対的な力……………か）

それだけは絶対に避けなければならない。

冬馬自身が、過ぎた力を扱う事の危険性は他の誰よりも一番わかつ

ているのだ。

「…………… R A Gはこの世界には過ぎた代物だからな。俺の世界でも未だに扱いきれない技術を他の連中に扱えるとは思えん」
かつて、それによって引き起こされた惨劇。

平和 と言う道を奪い去った異端の技術。それが R A Gとそれに搭載されている クロスドライブ と呼ばれる新技術のジェネレータともう一つ、 ナノマシン と呼ばれる超小型の生体マシンだ。

ナノマシン の事はアルクには一応話しておいたが、冬馬自身が保有者だとは言っていない。

冬馬は過去にある実験施設で ナノマシン を植え付けられているから普通の人間より運動能力は高い。

だが、それは冬馬だけが例外では無く、相当数の兵士が植え付けられているのだ。その為に世界は未だに新技術を用いて戦争を続けている。

しかも、この2つの技術は既にこちらの世界に運び込まれている。
…………… 正確には R A Gと俺自身がそのマシンと技術を所持しているのだ。

それ故にその状況全てが、起こりうる最悪のシミュレーションを明確に作り上げてしまう。

すなわち、圧倒的な力による 殺戮劇 が起こりうるかもしれない。それは最早 戦争 の域を超えた最悪のシナリオだ。

「いつそ機体を解体して…………… ダメだ。そんな時間は無い」

「ねえ冬馬？」

さつきから黙っていたアリスが冬馬を見上げる。

「なんだよ？」

「冬馬は マギ さんをどうしたいの？」

アリスは機体名ではなく、普段から呼び慣れている搭載されている A Iの方で呼んだ。

「うーん…………… 出来れば常に一緒に移動させたいんだが、デカ過ぎて難しいんだよ。それで悩んでいるわけだ」

「おつきくて困るんなら小さくすれば？」

「……………は？」

冬馬はアリスの言った意味に顔をしかめる。

「……………まてアリス。今、何て言った？」

「だから マギさんを小さくするの」

「どうやって？魔法でか？」

「うん。と言つてもお父様が研究していた 先住魔法 って魔法だけだ」

またもや聞き慣れない単語が出てくる。

「 先住魔法 ？アリスたちの魔法とは違うのか？」

冬馬の問いに少し考えながらアリスは説明する。

「んー？お父様の話じゃすごく大きな意思に頼んで使う魔法だって私、練習してたら少しだけ出来るようになったんだ」

「ほー」

冬馬は感心していたが、このハルゲニアで人間が 先住魔法 を使う者はほとんどいない。彼らの魔法は大部分が 系統魔法 と呼ばれる魔法で成り立っている。

先住魔法 が使えるのは精霊やエルフのような者たち以外は本来なら使えないのだ。

だが、アリスはエルフの血をミリアから受け継いでいるので 先住魔法 を使う事ができる。

「で、どうやるんだ？」

「んーと、姿を変える魔法があつたからとりあえず人に変えちゃう」
アリスはRAGを見上げてそう提案した。

「人……………ね。科学者が聞いたら全員笑いだすな」

ここ数日間で自分の持つ常識が次第に意味を持たなくなってきた事には、冬馬も分かつてきたが、コレはコレで常識外れな事になる。

「ちよつと待っててね。……………大空を駆ける偉大なる風たちよ、

我が意志に応えよ。彼の

「ちよつと待った」……………はえ？」

冬馬はアリスの詠唱にストップをかけると機体に乗り込んだ。

「どうしたの？」

「ちよつとセッティングを変える。 マギ 機体をオートモードに切り替えて全ての武装ロックを解除しろ」

『了解。 全システムをオートモードに切り替えます』

「で、AIロジックのガードも外す。 これでゼイオンのコントロールは マギ に移行される」

次々と端末を操作してセッティングを変えていく。

「えーあいろじつくって？」

アリスが聞き慣れない単語に聞き返してくる。

「…… AIロジックってのは、分かりやすく言えば マギ 自身が自己の判断で行動しない様制約をかける鎖みたいなものだ。 普通なら機体が暴走する恐れがあるから絶対に外す事はしない」

「だったらどうして？」

冬馬は少し考えた。 明確な理由はない。 ただ、今まで培ってきた常識が通用しないのなら、いつそのこと無視して行動するのもアリかなと思ったただけだ。

「別に、いつまでも俺の世界の常識に縛られているのもつまらないと思ったからな。 だから、この世界の非常識に賭けてみる事にした」
「…………… 非常識」

冬馬はニヤツと笑うと機体から降りる。

「さて、俺の声は聞こえてるな？ マギ、返事をしてみろ」

RAGの頭部のメインセンサーがヴンツと唸り、カメラが冬馬に向く。 どうやらコントロールの方は上手くいっているようだ。

『YES…………… マスター。 初めまして』

「おう。 とりあえずは思考が慣れるまで俺の指示に従っている」

『YES…………… 一つ質問があります。 このガードを外す事は本来なら禁止事項のはずです。 マスター自身危険性は認知していると思いますか？』

もつともは質問だ。

「ああ、十分承知している。しかし、これからの事を考えるとそんなモノを気にしている余裕はない」

『なるほど、起こりうる可能性を考慮するとこの判断は賭けのような物ですね』

「呑み込みが早くて助かるよ」

『恐縮です』

ゼイオンが冬馬に向かって頭を下げる。巨大な赤い機体が人に向かって頭を下げる、その光景は奇妙な姿ではあった。

「えーっと、続けいいかな？まだ魔法の途中……」

「ん？ああ、悪い悪い」

そう言つて冬馬はゼイオンから離れる。

「じゃあ……どこまで言つたつけ？」

「……おいおい」

「冬馬が途中で止めるから忘れちゃった。まっいいか、何はともあれ……彼の者を望みし姿へと変えよ！」

その瞬間、RAGの周りに突風が吹き荒れる。その勢いは凄まじく巻き上がった土煙で機体の姿が見えなくなってしまった。

「ぐっ……！なあアリス、お前この魔法を使うの初めてか？」

突風に耐えながら冬馬がアリスに聞いてきた。

「はい、そう！」

アリスは冬馬にしがみつきながら必死になって答える。どうも喋るのもキツいらしい。

しかし、幸いにも突風はすぐに収まってくれた。

「どうやら止んでくれたか………は？」

目の前にはすでに機体の姿は無くなっていて、変わりに一人の人間が立っていた。

背丈は冬馬より少し高く、大体190cmくらい。体格はがっかりしているがワリと細身で、冬馬と同じような黒いジャケットを身に纏った赤髪の青年の姿がそこにあった。

「成功した……」

「つーか、RAG………なのか？」

二人はただ茫然とその姿を見つめていた。

「YESマスター冬馬。私は真正銘RAG　ゼイオンのAI、マギ　です。………どうかしましたか？」

「………人だな」

「………うん。間違いなく人だよな？」

「………二人とも？」

しばらくして、二人の体が震え始めた。

「「い………いっやつたー！成功だー！」」

二人は同時に飛び上がった。

「凄いな　先住魔法　って。機械でも人間に変えちまうのか！」

「あくまでも外見だけ何だけどね。姿形は人間でも中身は　マギのままだよ」

「そうか。マギ　今すぐ全身を再チェックしてくれ」

「わかりました。………… チェック完了。各部異常はありません」

「ジェネレータの動力伝達率は？」

「………… 驚きました。ジェネレータ出力は正常です。しかし、伝達率が異常なほど上昇しています。この状態なら現在の出力を80%以上抑えても行動に支障をきたしません」

驚く　と言う表現から早速感情らしき物を使った事に冬馬は少し感心した。

「エネルギーの回復率と照らし合わせてもか？」

「YES」

「そうか」

そう言うって冬馬は腰のホルスターから銃を取り出す。

「装甲はどうだ？」

「試してみますか？」

「OK」

言うや否やいきなり銃の引き金を引いた。
ガキン！

しかし、撃ち出された弾丸はゼイオンに傷つける事なく弾かれてしまった。

「装甲は元のままか……」

「YES」

人の姿になった マギ は頷く。

「ん？どうしたアリス、座りこんで」

「と……冬馬がいきなり銃なんか撃つからでしょうが！びっくりしたじゃない！」

どうやらさっきのやり取りで腰を抜かしてしまったらしい。

「あー悪い」

銃をしまいながら悪びれた様子もなくアリスを立ち上がらせる。

「マスター、レディの前で今のような事は控えたほうが良いと思いますが」

マギ は軽く注意する。

「そうか？なら、野郎相手なら遠慮はいらん？」

「YES」

「ちよつと、何気に物騒な話しないでよ」

「恐縮です」

「誉めてないって」

ジョークまで言えるとは随分とバイタリティの高いAIだ。

「そうだ、元の姿に戻す方法はあるのか？」

冬馬は二人のやり取りを聞きながらアリスに質問する。

「え？それなら簡単よ。元の姿を思い浮かべればいいの」

「それだけか？」

「うん」

ズン！

突然地面が揺れた。

「きゃあ！」

「なんだ!？」

二人が揺れの元を見ている。

『たしかに戻れました』

地震の正体は マギ だった。

確かに元々機械だった自分の体を思い浮かべるのは造作もない事ではある。

素晴らしい理解力だ。

「いきなり戻るな！こつちがびつくりしたわ！……………それより、勝手に戻ったはいいがまた変身する時はどうする気だ？」

『それなら問題ありません』

また風が起こり姿が人間に戻る。

「先程のプロセスを記憶しておきました。これを再現すれば変身も可能です」

「……………あっそう」

……………たいした万能ぶりである。

「じゃあ行くとするか。……………て、俺のケースはどこにいった？」

冬馬は辺りをみるが、冬馬の世界の武器が入った クラウン・クロス の姿が見当たらない。

たしかコクピットから出したハズだ。

「コレですか？」

RAG……………では無い、ここはアリスに習ってマギと呼ぶことにする。そのマギの手には冬馬のケースが握られていた。

「おお、お前が持っていたのか。……………持っている？たしかGRFは切れているはずだぞ？」

クラウン・クロス の重量は人間が持つには重すぎる。それを軽々く持っていることに驚いた。

「機械ですから」

もつともな意見である。

まあ、何はともあれニューカッスル城への旅に一人(?)加わって冬馬たちも出発した。

冬馬は今回の襲撃がウェールズ達が危機的な状況になっていると告げている気がしていた。

（無事でいろよウェールズ……）

冬馬は予感が外れる事を祈った。

正義と言つ名の悪者（前書き）

やっと主人公の登場です。……………って遅っ！

正義と言つ名の悪者

「見えた、あれがニューカッスル城だな」

「うん」

あの襲撃から3日後、新たに加わったマギと共にウェールズのいるニューカッスル城を目指したが、城の目前まで来て立ち往生していた。

「どうしよつか？アレ」

アリスは城の周りに陣取っている連中を指差した。

いや、あれは連中と言つより集団だ。レコン・キスタの軍勢が見事なまでに城を包囲している。

まさに猫一匹入れる余地はない。

だが、城が陥落して無い事から間に合つたようだ。

「包囲している軍の推定数は3万4千人程です」

マギは周囲をサーチして大体の規模を示した。

後でわかったが、人の姿をしても元々の能力は使えるらしく、飛ぶ以外は色々と出来るようだ。

「城の内部は？」

「生体反応は300人強あります」

「兵士が300の残りは非戦闘員つてところか。しかも戦力差は10：1ときたか。泣けるな」

状況は呆れる程に劣勢である。もはや勝負にすらならない。

「いつそのこと奴等は無視して、こつそり城に潜り込むか。アルクたちも抜け道を使うだろうしな」

冬馬はそう判断して城に入れるルートを探す事にした。

マギはRAGの力を使えばあの軍勢を蹴散らす事は不可能では無いが、おそらくあそこに黒幕はいないだろう。逆に後々こつちが不利になる羽目になりかね無い。

ウェールズには悪いが、アルビオン王国には一旦滅びてもらって再

興して貰う方向で事を運んだ方が妥当だ。

（下手に手を出して奴等を撃退させればアルビオンは十中八九、内戦状態に突入する。……………それよりかは滅んでからの再興の方がまだマシだ）

戦争で何よりも厄介なのが内戦だ。

一度でも始まると完全な決着はまず着かない。争いが争いを呼ぶ悪循環に陥りやすいからだ。

隣人同士が殺し合い、弱い者がさらに弱い者から奪い合う。冬馬は幾つもの戦場でそれを見てきた。

そんな物をハルゲニアに来てまで再現させる必要性はない。

「あそこはどうでしょう？」

マギが示したのは城の反対側の崖だった。

「どう思うアリス」

冬馬は試しにアリスに聞いてみる。

「んー、もしかしたら秘密の港があるかも。なんとなくだけど」

これもアルクに聞いた事だが、ハルゲニアには飛行機の代わりに風石を使った飛行船が存在する。それも本当に船の形で飛んでいるのだ。

（さすがに常識を捨てるのに慣れてきたな……………これなら、鉄の塊が空を飛ぶ方がよほど異様に思えてくる）

無論、航空力学が無い世界だからこちらの飛行機の原理が理解出来る筈がないのだが。

「よし、決まりだ。マギ、機体に戻れ。ただしESCは起動してな」

「イエス・サー」

冬馬とアリスはマギから離れると、少し地面が揺れて前方が歪んで見てきた。マギが元の姿に戻り、迷彩モードを起動したのだ。

コクピットに乗り込んで、静かにスラスタを吹かせて崖の方に飛んでいく。

一応念のために、少し遠回りのコースを取る。

「……………あれか」

しばらくすると気流の激しい岩肌の一部に見えづらいが、船の姿が見えた。おそらくあそこが隠れ港に違いない。

周りは乱気流になっているが、この程度の風はRAGなら問題ない。「ESCを解除して着地するぞ」

ゆっくりと港に入って降りれる場所を探す。

ちょうど資材置き場にスペースがあつたからそこに着地した。

見張りの兵士が何か騒いでいるが、いきなり巨人が入ってきたのだから驚くのも無理はない。

「さて、どうするか？」

ウェールズは港の方が騒がしい事に気がついた。

「今度はなんだ？」

今日は何かと客人の多い日だ。イーグル号で襲った貨物船にトリスタニアからの使者が乗っていたり、つい明け方にはフェリーテス家のアルク殿やミリア夫人もやって来た。

次は何がやって来たのだろう。

「おい、一体なんの騒ぎ……………」

港に顔を出すと見張りの兵士が文字通り飛んできた。

「うわっ！」

咄嗟に受け止めると、剣を抜いて港口に飛び出す。

数こそ少なくとも、アルビオンの精鋭の兵士を投げ飛ばすとはただ者ではなかった。

「今度来たのは敵か……………てっ、冬馬くん？」

兵士たちと戦っていたのはアルク殿と一緒にいた冬馬だった。なぜ彼がこちらの兵士と戦っているのかはわからないが、兵士たちが剣や槍で攻撃しているのに冬馬の武器は無手で相手をしている。

それも全ての攻撃をさばいて軽くないしながら、息一つ乱していなかった。

「おうウェールズ、久しぶりだな」

手を休める事なくウェールズに話しかける。

しかもその間にまた一人投げ飛ばす。

「殿下、お下がり下さい！この者はかなりの手練れです！」

兵士の一人がウェールズの前に立つと冬馬に向かって特攻してきた。

「ま、まで！」

「ウオオオオ！わぁー！？」

あっさり投げ飛ばされる兵士。

「コイツらは猪か？」

「皆の者攻撃を止める！彼は私の客人だ」

ウェールズの制止で兵士たちは剣を引いて下がった。

冬馬はそれを見て少し残念そうな顔をした。

あれではメイジをぶつけても相手にもなるまい。

「やれやれ……やっと終わったか」

冬馬はウェールズが兵を制止すると同時に手を止めた。

こっちも好きで暴れた訳ではなかった。騒ぎだし、攻撃を加えようとしてきたので応戦したまでである。

冬馬への攻撃が止んだのを確認してか、アリスがコクピットから降りてきた。

万が一を考えてアリスはコクピット内に残しといたが、このレベルの相手では必要なかったようだ。

それでもアリスを引っ張り出そうと機体をよじ登ってきた奴は、マガが電気ショックで払い落としてやった。ザマミロ。

「随分と変わった物でやって来たね。何なんだい、それは？」

「相変わらずだな。前と同じで秘密だ」

「……………そりゃ残念だ」

ウェールズは肩をすくめて返す。

「……………無事で何よりだ」

「君たちも、アルク殿に襲撃されたと聞いた時はさすがに青ざめたよ」

「アルクたちは先に来ていたのか!？」

「お父様たちはやゝい!」

ウェールズの言葉にアリスも冬馬も、アルクたちの予想以上の到着の速さに驚いた。

「ああ、他にもトリスタニアからの使者も来ているからね」

「使者?」

冬馬は首をかしめる。使者を送るとしても随分妙なタイミングで来るものだ。

「うわ!これって本物のRAGだ。初めてみた」

と、後ろから驚き声が聞こえてきた。

「なにコレ!フーケのゴーレムより大きいじゃない!」

声の数は二人、それもあり若い。

一人は黒髪の少年に、もう一人はピンク色の髪をした気の強そうな少女だった。

だが、それよりも驚いたのは……。

「おい、お前コイツを知っているのか?」

冬馬は少年の言葉に我が耳を疑った。

少年もこちらに気付き驚く。

「えっ!?!あ……黒い髪にその言葉使い………もしかして日本人か?」

少年は冬馬を見てそう聞いてきた。この言葉に冬馬は確信した。

「ああそうだ。じゃあお前も………日本人だな?名前は?」

「平賀才人。東京からやって来た」

「神楽冬馬だ。俺はアメリカからここへ飛ばされてきた」

才人と名乗った少年は背中にも古びた長剣を背負っていたが、服装は確かに日本でよく見られるパーカーなどを着ている。

「誰?サイト、アンタの知り合い?」

横の少女が目釣り上げながら才人に聞いてくる。

「いや、この人は俺と同じ世界から来た人だよ。で、この機体もたぶんこの人が持ってきた物だと思う」

「へー、サイトの世界って変わった物が多いのね？で、コレは何が出来るの？人の形をしているからダンスでも出来るのかしら？」

「はっはっは。そんな事したら転んじまうよ。RAGはそこまで器用じゃない」

冬馬は少女の言葉に笑ってしまう。この機体を見て怯むどころか、こんなにユニークな事を言えるとは中々に大した物である。

「あっそう。それでアンタ誰？……ってさっき言ったわね。私はルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「なげえ名前」

「あ、俺もそう思う・・・」

「うるさい！」ゲフツ！」

才人の言葉にルイズはボディブローを食らわせて黙らせる。なかなか元気な娘である。

「スマンスマン。えーとルイズ…がいいか？それともフランソワーズと呼ぶ方がいいか？」

「フランソワーズ………プツ、似合わねえ………ぶべっ！」

今度は頭をおもいつきり踏んづけるルイズ。

「……………なんか言った？」

「なんでも無いです……ご主人様」

「よろしい。私はルイズで良いわ」

ピクピクしながら倒れている才人を見下ろしながら冬馬も肯定する。

「ああ………わかった」

訂正、元気良すぎる娘である。

「そ、それで神楽さんはどうやってハルゲニアに来たんですか？」

才人はなんとか立ち上がりながら聞いてきた。

「冬馬でいいし、さん付けも要らない。たぶんお前と同じ理由だ。召喚されたんだろ？そのルイズに」

冬馬は今のやり取りからそう推論した。

「え？まあ、俺はルイズに召喚されましたけど………じゃあ冬馬も？」

「ああ、そのアリスによってな。だが、なかなかこの世界は気に入ってるぜ」

後ろ指でウェールズと話し込んでいるアリスをさす。

「そうですか………」

才人は肩を落としたが気持ちはわからない訳ではない。

大方、帰る方法でも聞きたかったのだろう。しかし冬馬も色々あつてか帰る方法を見つけていない。

「何も知らなくて悪いな」

「い、いいえ！こうして同じ世界の人に会えるのは嬉しかったですし」

「そうか」

確かに、どんな形であれこうした者と会えるのは嬉しいのだろう。しかしこうして話していたいのには山々だが、生憎と冬馬も時間が惜しかった。

「さて、すまんが俺もウェールズに用があつてな。詳しい話しはまた今度つて事で」

「あ、はい」

才人とルイズにそう言つてウェールズの下へ向かう。

「ウェールズ、約束通り助けに来たぞ。………と、言いたいがマズイ状況だな」

アリスと話していたウェールズもこちらを向いた。

「冬馬くん。まあね、外は見ただらう？まさに万事休すさ」

「それでも無いぞ。まだなんとか逃げ出せる」

「ああ、私たち以外はね」

………？

冬馬はウェールズの言葉の変化に気が付いた。

「おい、まさかあの船に兵士とウェールズ以外の連中を乗せて逃が

すとか言わないよな」

冬馬の目が険しくなる。

「その通りさ。明日の夜明けと共に彼らは総攻撃を行う。我々が囹
になれば無事に逃げ出せるだろう」

要するにウェールズはすでに死ぬ気だったのを冬馬は悟った。

ゴン！

冬馬の拳がウェールズの頭に叩き落とされた。

「テムエはアホか！みすみす奴らの手柄をくれに行つてどうする！
そんな作戦なんざ愚策もいいとこだ」

「しかし、皆を無事に脱出させるにはこの方法しか……」

ゴゴン！

今度は二度落ちた。

「~~~~っ！」

ウェールズが痛さのあまり疼くまる。

「船の最大乗組人数は？」

「……大体50人くらいだ」

「300だ」

「え？」

「兵士、將軍含めて300人入れるようにしろ！」

「無茶苦茶だ！」

「出来る！大砲も！家具も！飛ぶ以外に不要なものは全部下ろせ！
それでも足りなければ容量を増やせ！それで入れる！」

まさに強引もいいところだ。だが冬馬は言い切った。

昔、全く同じ状況で200人もの人間を逃がした事がある。ただ今
回は100人程多いだけである。問題はなかった。

「仮に入ってもそれでは飛べはしない！重すぎて風石が足りないぞ
！」

「それなら問題ない。コイツを補助に使えばいい」

冬馬はRAGを見た。この機体のブースターを使って船を飛ばす気なのだ。

「……………無茶苦茶だ」

才人も啞然とするしかない。

「では他に良策はあるか？ないなら決定だ」

「……………一つ質問がある。敵はどうする？足止めをしなければすぐにくるぞ？」

「それは我々にお任せを」

ウェールズの後ろからアルクたちが顔をだした。

「お父様！お母様！」

アリスがアルクたちに抱きつく。

「久しぶりだねアリス。言っただろう？すぐに会えるって」

「うん」

アリスの頭を優しく撫でてあげる。

「アルク、任せるって事はアレか？」

「その通り。冬馬くんの作戦を借りたよ。それに必要な物は持ってきてくれたようだし」

チラッとRAGを見る。

「アルク殿、作戦とは？」

ウェールズが聞いてくるが冬馬が変わって答えた。

「俺たちがどうやって襲撃を迎え撃ったか聞いたか？」

「ああ、たしか奴らを引き付けて……………まさか」

「そう、爆破するんだよ。このニューカッスル城をな。アルクもそのつもりで色々仕掛けた筈だ」

「はい。城の至るところに仕掛けた爆弾は連鎖的に爆発する事によって一気に崩すことが出来ます。鉱山の発破技術の応用です」

「……………」

ウェールズは完全に言葉を失った。まあ、予想はしていたが発狂するよりはマシか。

「つまり敵を入れるだけ入れて、城もろとも片付ける作戦だ。連中はウェールズの首と城を取れず、大量の兵を失い、ましてやそろって逃げられたとなれば傑作以外にねえな」

ケケケと愉快そうに笑う冬馬だが、これではどちらが悪者だかわからない。

「なあ、相棒。おめえさんの世界の奴らはこんなのが多いのか？」

才人の背中にいるデルフがきいたが、

「そんなにいてたまるか」と返した。

王国の終焉・前編（前書き）

あれ？何故か前編になっちゃった？σ（￣▽￣）

王国の終焉・前編

「しかしよウェールズ、お前が奴らに殺されて何の益があったんだ？」

冬馬は港口でウェールズの意見を一蹴した後、作戦の説明をする為に広間へと歩いていった。

「ルイズや才人がトリスタニアの使者って事は用件は、亡命をしてくれてとこだろ？今の状況なら願ってもない提案だろうが」

一通りの現在の状況をアルクから聞いた所、その部分が引つ掛かりウェールズに質問したのだ。

「たしかに彼女たちの手紙にはそう書かれていたよ。でも、私がトリスタニアに亡命すれば今度はそこが狙われる。だから私は亡命する訳にはいかなかったのだ」

ウェールズの答えに冬馬は渋い顔をする。甘い。考えが甘過ぎる。クーデターを起こし、聖地奪還だのの大義名分を掲げている連中がアルビオンを手に入れたからと言って終わる訳がない。

次は間違いなく、トリスタニアと言う国を狙う筈だ。

話しによれば、ごく最近に王位を受け継いだ16・7歳くらいの小娘が国を治めているらしい。連中が狙うなら格好の獲物だ。

どうもウェールズは頭は回るくせにツメが甘い。

「ウェールズ言つとくがな、このままお前が討ち死にしても喜ぶのは連中だぞ。王族の首は手に入った、城も手に入った、邪魔者も消えた。どこにも憂いの理由がない」

「……………」

「王族の誇りや義務なんか死人には関係ないからな。生きてなんぼだ」

指を折りながらウェールズに言うたびにシヨボくれていく。

だが、冬馬もだめ押しばかりを言う気がなかった。

「それが嫌なら学び、考える事だ。これは身分も種族も関係ない。

生きる者の義務であり権利だ。死人には出来ん芸当だぞ」

「学び……考える事」

「人、それを学習という。未知の物を受け入れるのもまた同じだ」
冬馬はウェールズの背中をパン！と叩いた。ウェールズはバカではない。ただ知らないだけだ。

ならば教えればいい。

「やれやれ、ウェールズ様を困らせないでほしいですな」

広間の扉の前で一人の貴族が口を挟んできた。

「ワルド子爵」

ウェールズがワルドの事を簡単に説明した。

彼はトリスタニアからルイズたちの護衛として来てくれたとの事だった。

たしかに身のこなしは相当できる者と感じるが、冬馬は別の物を感じた。それは彼が長年戦場で自分の命を支えてくれたモノの感じだ。すなわち 悪寒 と 殺気 である。

二つともワルドから僅かだが漂ってきた。これを無視してタダで済んだ事など、これまでに一度もない。

(……………ただの護衛じゃ無いぞ。まるで敵地にいるような殺気だ)
「神楽冬馬だ」

握手こそしないが一応名乗っとく。

「先程の立ち振舞いは見事でしたよ。是非とも一度お手合わせ願いたいですな」

「機会があればお相手しますよ」

まあ、その機会はすぐにくるだろうが。

「 作戦 の成功を祈ってますよ」

「ええ、 出来るだけ犠牲 は少なくしたいですからね」

そう 出来るだけ犠牲 を少なくね。

ここで冬馬は先に握手を求めた。ワルドもそれに返す。

手を取った瞬間、冬馬はワルドを敵だと直感した。

だが今は何もしない。何故なら相手はまだしつぽも耳も出してない

からだ。

「ではまた」

ワルドは手を離すとマントを翻して去っていく。……………悔しいがかなり決まっている。

「さて、忙しくなるぞ」

ワルドがどこの陣営かは考える必要はない。今アルビオンが敵対しているのはレコン・キスタだけである。

（……連中も網の幅は広いつてか）

この分だとトリスタニアにもまだ何人かいそうだと冬馬は推測した。

広間に入ってから冬馬の行動とウェールズの決断は早かった。

現国王を説得した後、晚餐を取り止めて総掛かりで脱出の準備を進めた。

冬馬は準備の傍らマジに機体のまま待機を命じてもう一つ、ワルドの監視を頼んだ。

「マジ、先程発信器と盗聴器を仕掛けた奴をマークしとけ。なにか動きがあつたら報告しろ」

『イエス・サー』

報告は耳にはめたインカムを通して聞く事ができる。

これで準備しながらワルドを監視する訳だ。

城の爆破には普通の爆弾では威力が足りないので、RAGに搭載されている 反応弾 と言う特殊爆弾を使う事にした。

爆風を発生させる事なく目標のみを破壊する物で、リミッターを変える事で城の基盤部分を破壊すれば、城を自らの重さで自壊できると踏んだのだ。

これにタイマーで起爆させるようにすれば準備完了だ。

ウェールズの話によれば船の改造もなんとか間に合うらしい。

今の所ワルドにもそれらしい動きはない。

自信の表れか、それとも目的は別にあるか、今はそれを判断する材料がない。じつと相手が動くのを待つだけだ。

（まあ…………動くとしたら夜間か早朝かだろうな）

それとは別に、冬馬は手が空いたので才人の話しても聞こうとルイズたちの元へ行くことにした。
やる事なければ休むに限る。

「よう」

才人のいる部屋に入ると何故か才人はふくれていた。
ルイズも見当たらない。

「……………なんかあったか？」

「別に」

才人はブスツと答える。ケンカでもしたのだろうか？

「話してみる、これから忙しくなるんだ。私情を言えるのは今の内だ」

冬馬は才人の隣に腰掛けた。

「……………ルイズの奴が結婚するって」

ミリアにしろ、ルイズにしろハルゲニアには小娘でも結婚できる制度でもあるのだろうか？

「誰と？」

「ワルド子爵」

ガタタ！

冬馬はワルドの名がでた瞬間に椅子から滑り落ちた。

「な、なんだと！？」

（よりによって奴とか！？……………なんとタイミングの悪い小娘だ）

「婚約者なんだってさ……………」

（……………最悪だ）

今度は冬馬がうなだれた。

「大丈夫かよ」

「ああ……それより才人、話しておきたい事がある」

冬馬はワルドのスパイ疑惑と、作戦の内容を説明した。

「……嘘だろ？」

「無論、確証はないし証拠もない。だが、俺の勘は未だに外した事はないし無視して無事に済んだ事もなかった」

「……………ルイズは知っているのか？」

「まだだ。それよりもルイズの動きに注意しといた方が良いかもな。どうも嫌な予感がする」

「なんだ、随分と頭の切れる奴だな」

「…………？」

どこからか声が聞こえてくるが、周りには才人と自分しか見えない。
「誰だ？」

「ここだよここ！」

向いた先は才人の背負っていた長剣だった。

「喋る……………剣だと？」

「ああ、こいつは俺の相棒のデルフって言います」

「よろしくな」

カタカタと鳴らしながら挨拶してくるが、つくづく変わった物がある世界だ。

「ああ……………よろしく」

「しかしなんだな、相棒もお前さんも変わった名前が多いな。ヒラガとカグラか、結構ハルゲニアには珍しいぜ」

「だろうな」

冬馬はもう一度周りを見渡して誰もいない事を確認する。

「まあ、実際にはその名は偽名みたいな物だがな。傭兵をしていると本名が迂濶に名乗れなくなる」

「なるほど、そりゃそうだ」

デルフは納得した。

「偽名？なんでさ」

才人はデルフに聞くが冬馬がそれに答える。

「危険だからさ。本名だと、家族や他の人間に逆恨みしてくる輩も少なからずいる。それ用の対策みたいな感じで偽名を使う。俺の本名は佐々木冬馬って言っんだ。が、冬馬で呼んでもらって構わない」
「分かりました。本名は普通ですね」

「まあな。……………と、そうだ才人、お前はワルドと一緒に城に来たんだよな？ だったら奴についてなにか知らないか？」

冬馬の質問に才人が何かを思い出したようで、沈み込んでしまう。

「……………何故ですか？」

「決まってる、場合によつては俺が奴と殺りあう事になる。敵の情報はある方がいい」

「……………わかりました。はっきり言って強いですワルドは。俺の攻撃が全然当たらなかった」

才人は悔しそうに語る。

どうもコテンパンにやられたようだ。

「そりゃ相棒のせいじゃねえよ。相手が悪かっただけさ」

デルフが才人を慰めた。

「それでデルフ、お前はどうかだった？」

「俺かい？ そうさなあ、ワルドって奴は完全な魔法戦士だぜ。杖を剣のように使い、攻撃しながら詠唱する。ま、経験の浅い相棒にはキツすぎた相手だったな」

「魔法か……………どんな魔法を使ってたんだ？」

「ほとんどが 風 の系統魔法さ。中でも相手に落雷を落とす ライトニング・クラウド は強力だぜ」

「風と雷か……………厄介だな」

冬馬からすればワルドの使う魔法は、はっきり言って自然現象と言ふことになる。

正直対処が難しい攻撃だ。

「ふむ、手は無くもないな」

そう言つて冬馬は立ち上がった。

「さてつと本当ならこの世界に来てからの事とか、色々と話したかったがこんな状況だ、またの機会にしとくか。明日の準備の仕上げもあるから失礼するよ」

才人とデルフに挨拶を済ませると部屋を出ていく。

城内の廊下を歩きながらさっきの会話を思い出す。

（さて……………ワルドがまだ動かないようだし、先に仕込みをしておくか）

冬馬は一度港に待機させてあるRAGへ戻り、色々と何かを取り出し始めた。

『マスター、何をしていますか？』

「んー？どうも明日もう一悶着ありそうだからその準備だ」

座席の後ろにしまっておいたケースから武器をいくつかと、アルクと共に作った試作品を取り出す。

出した物は レールガン とお守りのようなペンダントだ。

（…………… レールガンはともかく、このペンダントを使う機会がくるとは…………… アイツには悪いがちょうど良い実験台になってもらうか）

ケツケツケツと笑いがこぼれてしまう。さすがに科学者とはいえ元傭兵である。戦いとなれば自然と体が熱くなってしまう。

（このペンダントはウェールズに渡して、後は待つだけだ）

冬馬は城の中に戻っていく。

すでに時刻は深夜の11時、明日に備えて寝る事にした。

才人の方も色々と動いたろうし、ルイズに関しては気にしないつもりだ。

ちなみにさっきから姿の見えないアリスは、使い魔そっちのけでアルクたちの手伝いをしていた。やはり親子で一緒にいるのは嬉しいのだろう。少し覗いてみたが、年相応の笑い顔で楽しんでいた。

何にせよ、アルビオンは日の出と共にその歴史に幕を下ろす。問題

はどのように下りるか、だ。
全滅か、生存か、それが明日決まる。

王国の終焉・後編

行動は夜明け前と共に始まった。

改造が終わり、巡洋艦から脱出船と変わった　イーグル号　に城に残っていた人々が続々と乗り込んでいった。

他にも拿捕しつあった　マリー・ガランド号　を使って対処しているが、さすがに一部の者は収容しきれない為に別のルートで逃げる事となった。

まず作戦の要の自爆作業かなめをしていたアルク夫妻と娘のアリス。作戦の先導指揮をしている冬馬とウェールズ、あとは城外で監視員をしている兵士が数人いるだけだ。

……後は知らん。

冬馬は城内の爆破箇所をチェックしていると才人が凄い勢いで走ってきた。

「冬馬さん！………はあ、はあルイズを見ませんでしたか？アイツ、朝起きたらこんな書き置きを残していなくなっただんです！」

「はあ！？」

「しかも俺、まだこの世界の文字が読めないんですよ！」

「………あっそう」

仕方ないので才人の代わりに冬馬がルイズの書き置きを読み上げた。

『サイトへ。』

あなたを私の使い魔を今日限りで辞めてもらいます。

皆で船に乗って脱出して下さい。私はワルド子爵と共にいきます。

今までご苦勞様でした。貴方にはとても感謝しています。どうかお元気で。

ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール

追伸、約束を守れなくてごめんなさい

」

「……だと」

「……あのバカルイズ」

才人は頭を掻きむしってうなだれる。

「そう言えば聞いてなかったな。何故ケンカになったんだ？」

「それは……」

才人は昨夜の事を語り始めた。

「ルイズはああ見えて妙に責任感が強い娘なんです。俺のために自分の幸せも犠牲にさせてしまうような、すごく真面目で、すごく優しくして……だから俺、そんなルイズの足を引っ張らないように……」

「帰る方法くらい自分で探す、なんて事でも言っただんな」

コクツと頷く。

「ワルドに負けて、ここに来るまでに何度もワルドに助けてもらって……そしたらルイズを守ってやれる自信がなくなって……だから俺、ルイズに帰れって！自分勝手な事言っただルイズを怒らせたんだ」

……才人の気持ちも良くわかる。

かつて、冬馬も才人と同じような事をした時があった。自分の力不足を誰かに八つ当たりする事もあった。

それは、男なら誰しも強くなる過程で必ずある苦難だ。

今の才人はまさにその苦難を与えられているのだろう。

だから、才人のしたことを責める気はない。

責めるべきではない。

冬馬は才人の肩に手をそつと置いた。

「才人、その気持ちが悔しいと思うなら強くなれ。敵を倒す力でも構わない、自分の心を誇れるくらいに強くなればいい。実力なんて、死線をいくつも潜れば勝手に身につく。俺が良い例だ」

冬馬は笑って自分の胸を叩いた。確かに冬馬は才人と同じような苦難を味わったが、違ったのは周囲の環境だ。常に戦場の中にいた冬馬は、落ち込んでいる余裕はまるでなかった。

そんな中だからこそ、誰よりも強くあれたのだろう。

「……………まあ、あの状態ではやむを得なかったんだ、そんなに気にするな。が、問題はそこじゃない」

頭を切り替えて、冬馬は手紙の中にワルドの名があった事に何かが引っかかった気がした。

（そう言えばウェールズの奴、ヤケに身なりを整えてたな。あれじやまるで司祭の——！）

頭の中で何かがカチリツと噛み合った。

司祭の格好をしたウェールズ。

消えたルイズ。

手紙にあった　ワルド子爵と共に行きます　の一文。

そしてワルドはルイズの婚約者。

「まさか！」

才人も気づいたようだ。

「確かルイズの奴、ここで結婚する気か！？でも今やるか普通？」

「俺に聞くな！くそっ、結婚式は盲点だった！」

冬馬や才人が気づかなかったのも無理はない。

ハルゲニアにおいて貴族同士が戦場で契りを結ぶ事は、ごく少数ではあるが確かにある。

「礼拝堂へ急ぐぞ！おそらくウェールズもそこにいる！」

「ウェールズさんが！？くっ、間に合ってくれ！」

二人は全力で礼拝堂へ向かって走り出した。

ウェールズは礼拝堂で新郎と新婦の登場を待っていた。

ワルド子爵が、朝早くにルイズとの結婚式を挙げさせてくれるよう頼み込んできたのだ。

無事に生き延びる保障がない以上、せめて先に結ばれたいとウェールズはワルドの言葉を解釈した。

本当ならば冬馬くんと最後の確認などをしたかったが、この願いを聞き入れぬ訳にもいかない。

ルイズはなんとなくワルドについて来てしまった。

昨日の事もあつてか自暴自棄な状態のまま、サイトに置き手紙を残して今ここにいた。

（…………… サイト、なんであんな事を言っただろう？）

ずっと気になってしょうがない。確かにアルビオンに来るまでには色々あった。でも、サイトはいつもすぐ傍で自分を守ってくれた。

盗賊たちに矢を射かけられた時も真っ先に盾になろうと庇ってくれたし、白仮面の男に襲われた時も危険を返りみず助けに来てくれた。サイトは弱くない。

本当に弱ければあんな事出来はしない。

「では、式を始める」

では、なんであんな事を言っただろう？

なにか私が悪いことを言ったのかしら。

「新郎、子爵ジャン・ジャック・フランス・ド・ワルド。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして妻とすることを誓いますか」

「誓います」

ワルドは重々しく頷いて、杖を握った左手を胸の前に置いた。

ウェールズはルイズの方に視線を移した。

「新婦、ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……」

朗々と誓いのための詔を読みあげる。

ここでルイズはやつと自分がいる状況に気が付いた。

(……………え？私はワルドと結ばれたいと思っていたの？)

確かに幼い頃からの夢で、実際に頼りになるし、憧れてもいた。好意だってあった。

でも、なんで嬉しく無いのだろう？

どうして、気持ちだけはこんなにも沈んでしまうのだろうか？

どうして……………あの使い魔の顔が浮かんできてしまうのだろうか？

昨日、滅んでいく王国を見たから？

愛する者を捨ててまで、王国の誇りのために死のうとした王子をみたから？

……………まあ、その後に来たサイトと同じ世界から来たカグラトウマッて人にポカス力殴られてお説教されていたけど。

「へつくし！」

走っている途中で何故かクシャミがでてしまった冬馬であった。

でも、それではこんなに気持ちが沈んでしまうことはない。

(あれ？……………そう言えばなんで私、ワルドと結婚するって言っただんだっけ？)

何故か？決まっている。

止めて欲しかったからだ。

サイトなら止めてくれると思ったからだ。

だって私は……………。

「大丈夫ですか？」

「ああ、誰か噂してるな？……………たぶんアリスだ」
大ハズレである。

「……………ん？」

今度は才人が左目をこする。

「どうした？」

「いや……………なんか目がへんな感じが」

「相棒、疲れてんじゃねえか？」

「そうかなあ？」

「新婦？」

ウェールズはルイズがさつきから黙ったままなので、ずっとこちらを見ていたのだ。

「え？……………あ、あの」

どうしよう……………もう！肝心な時にいないんだから、あのバカ犬！

「ハックション！」

「才人、お前もか？」

「うう、ルイズだな」

「……………まあ、がんばれ」

「緊張しているのかい？仕方がない。初めてのときは、ことがなんであれ、緊張するものだからね」

につこりと笑って、ウェールズは続けた。

「まあ、これは儀式にすぎぬが、儀式にはそれをするだけの意味がある。では繰り返し。汝は始祖ブリミルの名において、このもの

を敬い、愛し、そして夫と……………」

ルイズは覚悟した。

いや、決心と言っている。

（私はサイトの……………いえ、私のために決めたい！決めさせてもらう！）

ウェールズの言葉にルイズは首を振って応える。

「新婦？」

「ルイズ？」

二人が怪訝な顔で、ルイズの顔を覗き込む。ルイズはワルドに向き直った。それはなにかを心に決めた決意の眼差しだった。

「どうしたね？ルイズ、何か気分でも……………」

「違うわ。この結婚は出来ないからよ」

「何故だい？日が悪いなら、改めて……………」

「そうじゃない、そうじゃないの。ごめんなさい、ワルド、私はあなたと結婚できない」

いきなりの展開に、ウェールズは首をかしげた。

「新婦は、この結婚を望ましいと？」

「そのとおりでございます。お二方には、大変失礼を致すことになりますが、わたくしはこの結婚を望みません」

ワルドの顔に、さっと朱がさした。ウェールズは困ったように、首をかしげ、残念そうにワルドに告げた。

「子爵、誠にお気の毒だが、花嫁が望まぬ式をこれ以上続けるわけにはいかぬ」

しかし、ワルドはウェールズに見向きもせず、ルイズの手を取った。

「緊張しているんだ。そうだろルイズ。きみが僕との結婚を拒むわけがない」

「ごめんなさい。でも、気づいたの、私がなにを本当は望んでいたのかを」

その言葉にワルドの表情が一変した。ルイズの肩を掴んで詰め寄っ

てきた。

「世界だルイズ。僕は世界を手に入れる！そのためにはきみが必要なんだ」

ルイズはワルドの豹変にすくんでしまった。その目は冷徹なトカゲのように見えてしまう。

（……なに、なんて目をしているの）

こんなワルドを初めてみた。

怖い………なんでこれほどの冷たい目ができるのだろう。

「見苦しいぞ子爵！」

ウェールズがワルドをルイズから遠ざけようと手をかけた。

「うるさい！」

ワルドはウェールズを突飛ばしてルイズの手を掴む。

「僕が昔に言ったことを忘れたか？きみは始祖ブリミルに劣らぬ、優秀なメイジに成長するだろう！だから僕はきみが、きみの力が欲しいのだ！」

力……？私の力？それが欲しい………それだけの理由で？

………バカにしないでよ。

「……冗談じゃないわ。それが私を選んだ理由？バカにしないでよ！そんな目的の結婚なんて、こっちから願い下げよ！」

ルイズはワルドを振り切って叫んだ。

「くっ……聞き分けのない……」

そこまで言ってワルドの体が祭壇から吹き飛ばされた。

「聞き分けのないのは子爵、あなただ」

見るとウェールズが杖をにかけて立っていた。ルイズの言葉を聞いてワルドに エア・ハンマー を叩きつけたのだ。

「………王子」

「小僧が………」

ダメージが浅かったらしく、ワルドは床から立ち上がってきた。

「ルイズ、今のうちに脱出船に行きなさい。そして冬馬くん達と共

に逃げるんだ。もちろん、きみの大切な使い魔くんと一緒にね」
ルイズにウィンクしてワルドに向き直る。

「王子、あなたは……………」

「さあ、早く！」

「させるかあああ！」

ワルドは二つ名の閃光の通りに素早く杖を取り出して詠唱を完成させた。杖の先から青白く光る刃がウェールズの胸に突き刺さる。

「ぐっ！」

「王子！」

「……………なに！？」

が、刃はウェールズに届かずに反らされてしまった。

みるとウェールズの胸元に同じように光るペンダントが、その刃を反らしていた。

そして、そのペンダントは昨夜に冬馬がウェールズに渡していたお守りであった。万が一を考えて渡しておいた物が、この局面で発揮したのだ。

しかし完全に防げた訳ではなく、受けきれなかった衝撃でウェールズは吹き飛ばされてしまう。

「ちっ。まあ三つの目的のうち、二つは達成できるか」

「目的？」

「そう、まず一つ目はルイズ、お前を手に入れること。二つ目はアンリエッタ王女の手紙を手に入れること。そして最後が……………」

杖でウェールズを指す。

「ウェールズの抹殺、いや始末と言った方がいいか？」

ルイズはウェールズをみた。動かないが、まだ息はしている。さっきので気絶したようだ。

「ウェールズは後でいいだろう。まずは聞き分けのない小娘のお仕置きだ！」

ワルドはルイズに向けて ウィンド・カッター を乱射してきた。
「きゃあああ！」

目に見えない風の刃がルイズの表面を切り裂いていく。ウェールズから借りたウエディングドレスが刻まれて、白い肌が晒されていた。

「ルイズ……残念だよ。きみが素直に従ってくれば、こんな事をする必要はなかっただろうに」

そう言いながらワルドは風の刃を放ち続ける。

急所は外しているためか傷は浅い。

だが、止まることの無い攻撃では浅い、深いは意味をなさない。いずれ力尽きてしまう。

「さあ、僕の所へおいで。許しを請い、永久^{とわ}の忠誠を誓うなら助けてあげなくともない」

ワルドの顔は何かにひたっているかのような笑みを浮かべている。無抵抗の者をいたぶるのを楽しんでいるのだ。

………死んでも許しを請うものですか。

でもこのままでは死んでしまう。

(………ここで死ぬなんてイヤ！助けてサイト！)

礼拝堂へ向かっている途中で才人の足が止まった。

「どうした？」

不振に思った冬馬は才人に近いた。

「なんだコレ、ワルドの姿が見える。まずい……ルイズが危険だ！」
才人は自分の左目を押さえて叫んだ。

今才人の目にはルイズの見える光景がそのまま映って見えていた。そこには杖を振りながらルイズを攻撃しているワルドの姿がはっきりと確認できる。

「………使い魔の能力か！」

冬馬は才人の異変の意味に気づくと、すぐに近くの窓から礼拝堂の位置を確認する。

今二人の位置は礼拝堂と中庭を挟んだ正反対の位置にいる。

普通に行くにはここからぐるっと回って行かなければならないが、それではとても間に合わない判断した。

「仕方がない。奥の手を使うぞ！下がってろ！」

冬馬は左腕を礼拝堂の方向へ向けた。今冬馬の左腕には試作したレールガン が付けられている。

「ち、ちよつと待ってくれ！下手に撃ってルイズやウェールズに当たったりしたら……」

才人はあわてて止めるが、そんな事で止まる冬馬ではない。

「そんな時はその時だ。ワルドの奴に当たればなおのこと良し！」

「無茶苦茶だ……」

「撃つぞ。伏せてろ！」

強い閃光が出たかと思つた瞬間、レールガン から吐き出された弾丸が超スピードで壁を突き破つて礼拝堂へ向かつていった。

「強情な小娘だ。だが、これで終わりだ」

ワルドは杖を高くかかげて詠唱する。

「さようならルイズ、ライトニン……む！」

ドゴオン！

いきなり、ワルドのすぐ後ろを閃光のような物が壁をつきぬけた。

「なっ！」

…… なんとという破壊力だ。ワルドは今のが外部からの攻撃だということを知った。

（誰だ？この城にはコレほどの魔法を使うメイジはいなかったはずだ……）

「ルイズー！」

土煙の中から才人が飛び出してきてルイズの元へ向かう。

「ルイズ！大丈夫か？」

才人はルイズの傷をみて顔をしかめる。

「サイト……遅かったじゃない……ごめん、後……よろしく」

ルイズは途切れ途切れにそう言って気を失った。
だがワルドはそれには目をくれずに、才人が入ってきた穴の方を睨み付けている。

今の攻撃はメイジではない。おそらく奴だ。昨日会った時に初対面で私に殺気を向けた男だろう。
名はたしか……。

「カグラ・トウマか……」

コツコツコツ……。

穴の奥から何者かの足音が聞こえてくる。

「これはこれは、ワルド子爵。お楽しみのところを邪魔してしまいましたかな？」

冬馬は愛刀の黒い刀を右手に持ち、瓦礫の中から姿を現した。

「貴様、何故ここにいる」

「もちろん、作戦の最終確認にですよ子爵」

「最終確認だと？」

「はい。そこにいるウェールズとルイズ嬢、後は才人を回収して脱出する手筈ですから。まあ、ぶっちゃけて言えば子爵以外の人間は脱出船へ連れて行きます」

「ほう。きみは犠牲は無いようにしたいと言っていたと記憶しているが？」

「ええ言いましたよ。ただし、可能な限りであって絶対にはありません。そもそも、スパイで幼女趣味の変態子爵を乗せる余裕は脱出船にはございませんので」

ワルドの顔が険しくなる。
だが冬馬は構わずに続けた。

「しかし何ですな、レコン・キスタ と言う輩はそろって妙な趣味をお持ちの方が多いようですな。まったくもって気色悪い」

「……………貴様、その口を閉じたらどうだ？死にたくは無かるう」

ワルドの殺気が目に見える程に強くなってきた。

だがそれは冬馬も同じだった。

「たしかにそうだな。こっちも無駄話している時間は無い。……」

「―事だ。とつとと失せろ、ゴミ野郎」

冬馬は刀を構えてワルドと対峙する。

今の状況はざっと見渡して確認してある。ウェールズ、ルイズは負傷するもまだ大丈夫だろう。ウェールズに関しては先に渡しておいたお守りが働いたようだ。

つまり、残り時間以外はワルドを倒すのになんら問題ない。

「才人、ルイズを連れて先に逃げろ。ウェールズは俺に任せて大丈夫だ」

「いや、俺も一緒に戦う。これは俺のケンカだ」

才人もデルフを構えてワルドと対峙する。冬馬同様にワルドに対して殺意ともとれる怒りを溢れ出している。

「ならまず二人を下がらせろ。巻き込んで知らんぞ」

「わかった」

「ふん。雑兵と小僧がナメるなあ！」

「いくぞ！」

三人は同時に駆け出した。

反逆の衛士隊隊長のワルドvs伝説の使い魔 ガンダールヴ の才人、元傭兵の冬馬。

今、崩壊する王国で、最後の戦いが始まった。

求め、奪い尽くさんとする者が、護り、救わんとする者たちが、この一戦でどちらかが決まる。

王国の終焉・後編（後書き）

ああ、後編なのに終わってない！

ドウシヨウ……（「」）

冬馬：

「続きを書けばいいだろう………」

理を統べる者×伝説を担う者

「はあ！」

まず先に攻撃を仕掛けたのはワルドだった。

ワルドの迎撃と、ウェールズとルイズの避難の二手に分かれて飛び出した二人のうち、才人に目掛けて エア・ハンマー を放つ。

「才人！右だ！」

すぐに冬馬が警告すると、才人は即座に反応してかわした。今の才人にはガンダールヴの力で体が羽根のように軽い。ワルドへの怒りのためか、いつもよりも数倍軽く感じる。

「とっ！」

才人が跳ぶと足元を エア・ハンマー がかすめる。

「うおりゃあ！」

ワルドが放った隙について冬馬が刀を振り下ろす。

「ちっ！」

それをスレスレで避けて一旦距離を取ろうとするが、さらに蹴りで追撃をかける。

今度は回避しきれずに右腕でガードした。

冬馬はそれ以上の攻撃をせずに逆にワルドから距離をとる。

「さすがにやるねえ」

「くっ、……… 雑兵は撤回しよう。まさか、平民でこれほど者がいるとはな」

冬馬とワルド、二人は共に先程の攻防で互いの実力を計ったのだ。

共に熟練の戦士だからこそその芸当と言えよう。

「が、弱い」

「人は見かけによらない と古人は語るがね」

二人は同時に動き、両者の間に激しい火花が散る。

凄まじいスピードで刀と魔法で強化した杖がぶつかりあう。今はガンダールヴのお陰で視認できるが、そうでなければとても目で追う

事などできる物ではない。

(……………今のうちに)

その間に才人は、こそこそと怪我人の二人を自分たちが入ってきた穴へと移動させる。

瓦礫の蔭へと移した後、才人は激しく打ち合っている二人の方を向いた。

「……………すげえ」

才人は思わず息を飲む。二人の攻防は速いだけではなく、フェイント、ガード、カウンター、崩し、全てが複雑かつ高速で繰り広げられていた。

とてもじゃないが、自分が入り込む隙間が見つからない。

(……………なんてレベルの戦いだよ。俺の出る幕なんて無いじゃんか)

ここへ来て自分と冬馬との実力の違いに思い知らされた。

だが、そこに声をかけてきたのはデルフだった。

「そう気落ちするな相棒。よく見てみな、冬馬の旦那とワルドの野郎は二人とも何かを狙ってやがる」

「え？」

才人は二人の動きをよく観察してみた。すると、たしかに速い攻防だがどこか変だ。

「あーなるほど」

「気づいたみてえだな。旦那はワルドに魔法を撃たせ無いように先手で動きを封じているが、ワルドの方は旦那以外の誰かに魔法を撃ちたいがために、隙を作ろうとしてしている……………ってとこだ」

「誰かって……………まさか」

「おう。相棒の後ろにいる二人だろうよ。どうも奴の狙いは最初っからそっちだったみたいだな」

才人は身を固くした。つまる所、冬馬が隙を作ってしまったらワルドの魔法がこつちへくる、ってことになる。

「不味いじゃん」

「まあな」

デルフはあっさり答える。

しかし、だからといって才人がいたずらに手を出せばそれで隙を作
ってしまいかねない。

(……………あ、そうだアレがあった)

才人はここへくる途中に冬馬からもらった武器を思いだした。ガン
ダールヴの力はあらゆる武器を使いこなす事ができるので、冬馬に
武器を一つ譲ってもらったのだ。

才人は腰のベルトに押し込んだモノを取り出す。

出した物は黒い大型の拳銃だった。

デザート・イーグル

色々な映画にも使われる代表的な、マグナムの次に人気のあるモン
スターガンである。一発でトラックの車輪を吹き飛ばす程の威力が
あり、実際に使う者はそんなにいない代物だが、冬馬は普通に愛用
しているようだ。

左手から詳細な情報が伝わってくるが、やはり相当の反動は覚悟し
ておいた方が良さそうだ。

「相棒……………ずいぶんとじゃじゃ馬な奴をもらったな」

さすがに同じ武器だからだろうか、デルフはこの銃の特徴に気がつ
いた。

「あはは……………まあ、一種の憧れみたいな物だったからな」

「憧れねえ」

実際のところ銃自体は自分の手足のように扱えるし、狙いを外すこ
とはないだろう。問題は反動だ。^{リコイル}これはかりは関係ない。いくら扱
えても下手すれば肩が脱臼してしまう。

「ま、いいか」

冬馬じゃないがその時はその時だ。

デルフを下ろし、両手でゆっくりと構える。

このまま冬馬が押しきればいいが、ワルドだって油断出来ない。だ
から狙いはワルドではなくその足元。体勢を崩して一気に隙を作る

気で撃つ。そうすればあとは冬馬がなんとかしてくれるだろう。

(……………動きを読め。体の重心を見極める)

才人の手がワルドの動きに同調していく。

そして、銃口がワルドの足元に完全に固定された。

(ここだ！)

才人は引き金をおもいつきり引いた。

ドン！

大砲のような轟音とともに撃ち出された弾丸がワルドの足元に着弾する。……………しかし、幾らなんでも反動が大きすぎる。どうやら冬馬は銃の弾丸に何か細工をしていたのだろう。

(……………マジで肩が外れる！)

衝撃が腕から肩へ、さらには全体に広がっていく。

だが、そのぶん威力は凄まじかった。命中した床は大きく抉られて、破片がワルドの足にいくつも突き刺さる。

「があ！」

ワルドは思わずのけ反るが、その隙を見逃す冬馬ではない。

「もらったあ！」

身をひねって渾身の左ストレートを顔面に叩き込む。

ワルドは豪快に吹き飛んでいき、座席の中に埋まった。

「才人、ナイスアシストだ」

「相棒に旦那、やるじゃねえか」

「へへ、まずは1ダウンだ」

才人は銃をしまいデルフを拾い上げた。

「カウントはするか？」

「そうだな……………必要なさそうだ」

崩れた座席が僅かに動く。さすがにこのままK.Oとはいかないようだ。

「この…………ガキが」

声を震わせながら立ち上がろうとするが、足に力が入らないようだ。だが、代わりに近くの瓦礫を風で飛ばしてきた。それも大量に。

「おいおい！地味にあぶねえぞ！」

「うわわっ！」

冬馬と才人はあわてて避けて、弾いて対処した。だが、そこに隙が出来てしまった。

「まとめて死ね！」

すでに詠唱を終えたワルドが杖をこちらに向けている。

狙いは冬馬と才人、他二名。つまりウェールズとルイズだ。

「やべ！」

「しまった！」

すぐに二人は守るべくワルドの射線軸に割り込む。

ワルドの魔法は十中八九、強力な雷タイプだろう。

「相棒！オレを構えな！」

「わかった！冬馬さんは？」

「問題なし！対策はできている」

才人はデルフを構えて備え、冬馬は懐からいくつもの小さい鉄球をとりだした。

「ライジング・ウォール！」

ライトニング・クラウドと違い、広範囲タイプの雷が二人に襲いかかった。

「ぐっ！」

才人は正面からデルフで受け止める。

だがあまりにも強いエネルギーで押し戻されていくが、それでも魔法を受け止め続けている。

「おおお……この感覚、思い出してきたぜ。そうだよ……オレたちはデルフリンガーだったんだ。数千年前からずっと……」

「……デルフ？」

デルフはさっきから魔法を受け止めながらぶつぶつと呟いている。

「相棒、オレたちは全部思いだしたぜ。大丈夫だ！この程度の魔法

なら吸いきれる！」

デルフはそう吠えると受けた雷をどんどん吸い込んでいった。

「……すげえ」

その光景に圧巻される。

冬馬は撃ち出されるや否や、持っていた鉄球を放り投げた。そのまま左腕の レールガン を作動させて鉄球に向けて放電した。

すると電流で磁力を得た鉄球がふわりと宙に浮いていく。ワルドの雷の一部が吸い寄せられるように向きを変えてやってきた。

「ライジング・ウオール か、ならこっちは マグネット・シールド とでも呼ぶかな」

冬馬は笑みを浮かべると鉄球を雷の方向に向けて壁にした。バチチチ！

激しいスパークとともに雷の軌道が大きく曲がっていく。

「科学をナメるなよ。ロリコン子爵！」

曲がった雷はそのまま別の壁に命中する。

(……なぜだ。なぜ私の雷が通用しない)

ワルドは杖を向けたまま愕然としていた。それもそうだろう、ウェールズに続き今度も完全に防がれてしまった。しかも才人に向けた方は剣に吸収され、冬馬に向けた方は宙に浮かんだ鉄球によって反らされしもう。

「こいつは笑いだな。…雷を使っているのに、その性質をほとんど理解していないのか」

冬馬はバカにするように肩をすくめる。

「……なんだと？」

「無学の奴が吼える威勢ほど笑えるものはない、と言ったんだ」

「……………貴様！」

ワルドは今度は冬馬に向かって放つが、またしても防がれてしまう。それも反らされるのではなく、左腕の変わった手甲に吸収されてし

まった。

「な、無駄だろ？」

「旦那、オレっちも相棒もなんでか分からねえんだけどよ。よかったら説明してもらえないかい？」

才人も頷く。

「……………まあ、いいか。才人、雷が落ちやすい場所を知ってるか？」

「……………落ちやすい場所？……………高い木とか金属でできた細い棒とか……………だろ？」

「正解。だがもう一ヶ所ある。それは磁気を帯びた場所だ。雷の性質は高い所や細い金属、そして同じ電気の流れる場所に引き寄せられるようになってる。だから擬似的に避雷針をこの磁気を帯びた鉄球で作ったんだ」

「なるほど。で、どうやって吸収したんだ？」

「このレールガンには発電機として風石を使っている。その充電に使わせてもらった。……………て、わけで雷は通用しない」

才人は感心して冬馬をみた。

昨日話した内容でこれだけの対処方法を編み出したとは、ただ戦場を渡り抜いたわけでは無い証拠だった。

適材適所、臨機応変、この2つの言葉をしっかり使って生き延びてきたのだろう。

「ならば私の風の魔法はなぜ見切れた？」

「それは周りが教えてくれたさ。俺が何の考えなしにあれだけ派手な登場したと思ってたのか？」

「周り……………そうか、粉塵か」

今まで気にしていなかったが、土煙や埃が辺りに充満している。

この粉塵のせいで風の動きを読まれたのだ。

「風の魔法と言っても、実際には密度や気流を操作しているだけだ。それだけなら科学でも何でも無い、ただの気象学でカタはつく」

冬馬はワルドに指差して言い切った。

「お前の魔法はただの手品で十分言い表せる！」

……ただし、タネも仕掛けもない手品だが（笑）。

ドカン！ドカン！

いきなり礼拝堂が揺れ始めて、大勢の足音が響いてきた。

「なんだ！？」

「……おいでなすったな」

「ふふふ、ついに総攻撃が始まったな」

冬馬はすぐにウェールズを抱えて逃げる体勢をとった。

「ぼさつとするな！逃げるぞ！」

「ええ！？ワルドはどうする気ですか！？」

「ほつとけ！それよりさっさと脱出しないと城の自爆に巻き込まれるぞ！」

才人は冬馬に急かされて、あわててルイズを抱き抱える。

だが、ワルドは穴の前で立ち塞がる。

「逃がさんよ」

「でも逃げる」

その時撃ち込まれた砲弾の一つが天井に命中し、ワルドの前に落ちてきた。

「くそっ！」

その隙をついて一気に走り抜ける。

「悪いな！俺は悪運が強いんでね、バイビー！」

「まて！逃げるな！」

後を追おうとするが崩れてきた瓦礫で通路がふさがってしまふ。

「……おのれ！神楽冬馬め………覚えていろよ！」

「やれやれ、危機一髪だったな」

「危なかった……」

脱出船の前まで来て息をつく。

「さて、ここでお別れだ。俺はウェールズを連れて別のルートから脱出する。才人は報告もあるからルイズと一緒にいけ」

「ええ！冬馬さんは一緒に来ないんですか？」

「俺はアルクたちと合流する。その後でトリスタニアに降りるさ」

「……………わかりました。ご無事で」

「おう。ルイズが目覚ましたらよろしく言っといてくれ。じゃあな」

才人はルイズを抱えて船へと歩いていったが、冬馬はその姿に苦笑する。

「しかし、あのルイズが目覚ましてら大騒ぎだったろうな」

それもそのはず、才人が抱えているやり方は完全な お姫さまだっこ になっていた。あの気の強いルイズがそれに気づいたら、さしずめ白馬の王子さまって感じだろうか？

「てっ………… サイトなんて抱えかたしてるのよ！」

船の中から騒がしい声が響いてくる。どうやらルイズが目覚ましたようだ。

大方、顔を真っ赤にしてサイトに怒鳴っている光景が目につく。

「あれなら大丈夫だな。さて、行くか」

冬馬もウェールズを連れて脱出するべく走り出した。

しばらくして、最後の爆弾である反応弾が爆発して、ニューカッスル城を数多の兵士を巻き込みながら崩れていった。

この瞬間、アルビオン王国は長い歴史と共に終わりを迎える事となった。

後にこの戦争を 白の落日 と語る事になる。

理を統べる者×伝説を担う者（後書き）

えー、これにて第一部が終わりましたが、物語はまだまだ続きます。

一難去って……………（前書き）

えー、ここからしばらくオリキャラが大量出現するのでご了承下さい。

一難去って…………

「ニューカッスル城攻略戦報告書」

ついに我らレコン・キスタが、このアルビオン大陸の覇権を手に入れることができる大事な一戦を迎える事となった。

三万を超える大軍で城を包囲し、明け方の総攻撃で永きに渡る革命も終結することだろう。

私は日の出と共に兵士たちに最後の激を飛ばして突入に備えた。それがあの様な事になるとも知らずに…………。

突入開始の合図のもとに次々と城に攻め入る兵士たちから、続々と制圧完了の報告が入る。

王国側からの抵抗もなく、このまま全て制圧するのは時間の問題かと思われた。

しかし、謁見の間や地下の制圧報告がきた時にソレは起こった。突然城の至るところから爆発音が響いてきた。さらにそのすぐ後にはしろの架け橋の周辺、さらには外壁部にまで爆発が続いていく。ここへきて私は王国軍の罠に嵌められたことに気がついた。

彼らは攻め込んできた我らと共に自爆する気なのだ。

急ぎ全ての部隊に後退命令を出したが、それは手遅れだった。

命令を出した瞬間、城の中心部から黒い光を放つ謎の球体が現れて突入していた部隊と、周辺の外壁も城壁も城の全てを呑み込んでいった。

次第にその光は収束していき、後に残ったのは城の残骸であろうと思われる瓦礫と、変わり果てた兵士たちの骸^{むくろ}であった。

その後、帰還したワルド子爵によりウェールズ以下城に残っていた人間全てが爆発に紛れて脱出していた事がわかった。つまり我らは誰もいない空城に攻め込んだ挙げ句に、不要となった城共々に兵力を削り取られたのだ。

さらにワルド子爵の報告によれば、この作戦の提案者は見知らぬ青年によってもたらされ、さらにはウェールズ暗殺もその青年によって妨害されたと語った。

城ではなく国の誇りを取り、それでいて王族の威厳を損なわずに、さらにはなんら犠牲者を出さないでこちらの戦力と戦利品を削る。我らはアルビオンこそ手に入れたが、象徴とも言える城を失い、さらには王族まで逃がした。これにより完全だった勝利が、痛み分けにまで落ちてしまった。

もし、その者がもつと早くに王国側に現れていたら、レコン・キスタの革命は成功しなかったのではないか？と思わずにはいられなかったと明記しておく。

突入連隊総隊長

グレイオス・アルゲイト

「なにも無くなってしまったね」

「そうだな」

ウェールズは城の見渡せる高台から消え去ったニューカッスル城を見ている。

「祖国を失い、帰る居場所も失い、挙げ句は王族の名すら無くしてしまった」

「そうだな」

冬馬はただウェールズの言葉にうなずいている。

「本当にからっぽになつてしまった」

「そうだな」

ここで冬馬はウェールズに聞いた。

「で？」

「なんだか体がすごく軽い気がする」

「そうか」

ウェールズは、なぜか笑いがこぼれてきた。
からっぽ。

不思議と悪い気はしない。

「やつと重荷が下りたな」

冬馬はそんなウェールズの肩をたたいた。

「世の中には失つて始めてわかる事がいくつもある。大抵はイヤな事ばかりだが、たまにはスッキリ出来ることだってあるさ。後はこれからどうするかを考えればいい」

「ああ」

本当にスッキリした顔をしている。

冬馬もその顔をみて安心する。正直、いきなり周りの全てを失って自暴自棄にならないかと考えたが、どうやら杞憂だったようだ。

「それで次はどうする気なんだい？」

「んー？たしかここでアルクたちと合流する手筈なんだが………」

しかし、いくら待っても一向にくる気配がない。

（…………… 妙だな。俺が地形で間違えることはないから、この場所であっているはずなんだが……………？）

その時、腰に吊るしておいた通信機が鳴り出した。

「なんの音だい？」

「ん？通信機か、アルクだな」

通信機を取り出してボタンを押す。

「ようアルク。どうした？」

『冬馬くんかい？すごいな本当に会話が出来る』

予想通り相手はアルクだった。

「それで、なんかあったのか？」

『ああ、すまない。トラブルが発生してしまった。ミリアとアリスが奴隷商に捕まった』

「……………はあ？」

冬馬はとりあえず、スピーカーのボタンを押してウェールズにも聞こえるようにした。

「もう一度聞くぞ？何だって？」

『だから、ミリアとアリス、それに監視員をしていた彼女たちも連れ去られたんだ！』

監視員は城の脱出時に脱出船ではなく、アルク所有の船に乗って脱出していた。

一応護衛も兼ねていたので、心配はしなかったのだが……………。

「彼女たちって……………ウェールズ、腕の立つ兵士だから大丈夫と言わなかったっけ？」

「ああ……………そのはずだったんだが」

『ウェールズ様もいるのか？……………さすがにタイミングが悪かったようです。襲ってきた時にちょうど彼女たちは……………その……………』

「なんだよ」

なぜか言い淀むアルク。

『その……………トイレの最中だったらしくって……………で、そのまま……………』

「捕まったと」

『そうなんだ』

「……………」

三人そろってただ沈黙する。と言つか、それしか出来なかった。
「とりあえず」

先に沈黙を解いたのは冬馬だった。

「その運の悪い彼女たちは嫁にいけなくなつたな」

「……………まあ、そうだろうな」

『突っ込む所はそこかい！？』

「冗談だ。大事なところを全部見られたって死にはしない」

「……………それとこれとは話が違うのでは？」

『デリカシーのないフォローだね』

「やかましい。それよりアルク、今どこにいるんだ？」

『合流場所から東へ行ったリンフェル村にいる。今からなら夕暮れ前には着けるだろう』

「わかつた、なるべく速い方法を探してみる。連絡の時間を考えると、襲われてそれほど経ってないだろう？」

『まあね』

「なら決まりだ、大人しく待つてろ」

『ああ、そうする。奴隷商なら殺される心配はないだろうし』

「じゃあ切るぞ」

冬馬は通信を終えると、荷物の中から城から持ち出した地図を広げた。

「いつのまに……………」

ウェールズも感心する周到さである。

「リンフェルは……………あつたぞここだ」

すぐに目的地を見つける。

「しかし、速くと言ってもどうすれば……………」

「馬を使う。RAGが戻ってくるまでにあと3、4時間はかかるだろうしな」

「何処から調達する気だ？この辺りには民家もなにも……………」

「あるだろう、あそこに沢山」

冬馬は丘の向こうを指した。

「あそこって……………いい！？」

そこにあつたのはレコン・キスタの軍隊だった。たしかに軍隊なら馬は沢山いるが、そこから調達すると言う事は敵陣の中にわざわざ

飛び込むのと同義語である。

「……………本気かい？」

「相手が奴隷商なら、時間がかかればキズ物にされかねないぞ。お前はミリアやアリス、自分の部下たちが見知らぬ野郎共の慰みものになっても良いのか？」

「うう……………わかった。たしかにそれは赦せないな」

「まあ、駆けつけて間に合わなかったら奴等が全員血祭りになるだけだな……………ケツケツケツ」

冬馬はそれこそ愉しそうに笑う。それがかえって恐い。

「泥棒だー！」

「うわはは！この馬はもらっていくぞー！」

「これじゃ本当に悪者だよ」

あっさり馬を調達した冬馬は一直線にリンフェル村へと向かった。これにより夕暮れ前どころかまだ日の高い内に到着できた。ちなみに馬は途中でダウンしたので逃がして（おいて）きた。

……………本音と建前が逆の気がする。気のせいだろう。

「ところでウェールズ、これから先は偽名を使わないとやってられないぞ」

「偽名か……………そうだね、なら……………たしか冬馬くんの持っていたあのケースの名前は……………」

「クラウン・クロス か？」

「そう、だから名前はクラウンにするよ」

「……………クラウンって 道化 の意味だぞ。いいのか？」

「ああ、今の私にぴったりだろ？」

ウェールズは何の気なしに答えた。

たしかに今のウェールズは王族でも貴族でもない、メイジだけの普通の人間だ。

道化 の名も言い得て妙だ。

「そうか、なら構わないな。…………と、あれか」

冬馬たちの前方に小さな村が見えてきた。地図で確認しても間違いないリンフェル村になる。

「しかし、よくもまあ次から次へと問題が出てくるもんだ」

一応村に入る前に、ウェールズ改めクラウンにフードをかぶってもらった。

「さて、早くアルクを探すとするか」

「そうだね」

アルクの居所は近くの住民からすぐに聞き出せた。話によれば村の奥の小屋にいるとの事だった。

「やあ。久しぶり」

小屋の中に入ってみるとアルクがベッドの上で横になっていた。

よく見てみると体のあちこちに包帯が巻かれている。

「なんだ、半死人状態じゃないか。奴らにやられたのか？」

「まあね。襲われた時は私はいなかったけど、その後に捕まっている皆を見つけて……」

「助けようとして返り討ちにされた」

「正解」

アルクの言葉をそのまま続けて言ってみたが、何も肯定しなくてもいいと思うが……。

「それで怪我の具合はどうなんだい？」

後ろにいたクラウンも心配そうにアルクをみる。

「ウェールズ様！ご心配なく、それほど重いものではありません」

アルクが包帯の巻かれている腕を持ち上げるが、確かに心配の必要はなさそうだ。

「いや、今はウェールズではなくてクラウンと呼んでくれ。後、様はいらないよ。普通に呼んでくれ」

「そうですか……しかし、道化クラウンとはなかなか妙案ですね」

「冬馬くんにもそう言われたよ」

(……………はて、口に出して言ってたかな?)

冬馬はあごに手を当てて考える。

「そこら辺は後にして、アルク、その連中はどこに行ったんだ?」
とりあえず時間も惜しいので連れ去ったという連中の事を聞いてみた。

「あのまま南の森に逃げていったよ。数が数だから森の中に本隊でもいるのだろう」

「ならまだ今日なら追い付けるな。後は場所か」

奴隷商と言っくらいだ。拐ってきた者以外にもまだいるだろうし、下手すれば近くに野営地があるかもしれない。

やみくもに探しても、じきに日が沈むこの時間帯では逆に闇討ちにあうかもしれない。

確実にその場所を把握しないと最悪の場合には逃げられる。

「じきに日が暮れる、そうなれば見つけるのは簡単だ。私には彼がいるからね」

アルクはすぐ近くの窓を開けるとそこから一羽のフクロウが飛んできた。

「スパロウ、私の言葉は聞いていたね? 日が暮れたら彼らと一緒にミリアたちを探すんだ」

やって来たのはアルクの使い魔のフクロウのスパロウだ。

「なるほど、確かにフクロウなら夜目がきく」

もともとフクロウは夜行性の鳥だ。夜の森ならスパロウのテリトリとなる。

「道案内を頼むぞ、スパロウ」

するとスパロウは冬馬の肩にのり、なぜかこつちを見る。

『気乗りしねえがやってやるよ。よろしくなボウス』

「お…おっ」

……………どこぞのヤーさんか、このフクロウは?

時々、自分の動物会話能力が恨めしくなる。

しかし、さすがはフクロウ。森に入って30分としない内に連中の

野営地を見つけたした。

『奴らはここから南西の広場に陣をはってやがる。数は全部で20人は越えてるぜ!』

「わかった。後は任せろ」

クラウンには上空からスパロウがホーホーと鳴いているようにしか聞こえないが、冬馬はしっかり会話しているようで改めて感心してしまう。

「さあクラウン、少し暴れるとするか」

冬馬の顔が明るくなる。戦闘という行為そのものが楽しいらしい。

「……あくまでもこれは救出であって、ケンカじゃない事を忘れないように」

クラウンも杖を取り出して戦いに備える。

「OK、OK、大丈夫だってちゃんと救出を優先するって」
ケンカ

（……………何故だろう。今 ケンカを優先する と聞こえた気がする）

クラウンは早くも冬馬のペースに巻き込まれていこうとしていた。

合掌。

囚われの乙女たち（前書き）

今回は少しアダルトが入ってます。まあ、気にしないで下さい。

囚われの乙女たち

森の奥に小さな明かりがちらほらと見えてくる。

そこが奴隷商人たちの野営地であることがわかった。

このアルビオンでは奴隷の売買は禁止されているが、陰ではこうした者たちが数多くいると以前に聞いた事がある。

クラウンは息を潜めて辺りを慎重にうかがう。

（……まさか、噂の奴隷商がこんな所にいるとは……）

この近くにはレコン・キスタの軍も陣を張っているのに何もないと
言うことは……。

（レコン・キスタは奴らのスポンサーと言う訳か……）

おそらく、王家の裏で長年にわたり暗躍していたのだろ。彼らの
資金源もこのような組織が調達していたに違いない。

違法な人身売買や薄汚い商売が、王国の影に蠢く者たちに力を与え
ていたのだ。

（……これでは国に巣くうダニじゃないか。いや……寄生虫だ！）
そのような者たちに国を盗られた。クラウンは今更のようにレコン・
キスタに途方もない怒りを感じた。
だが今は動けない。

ここで怒りに任せて動いてしまったら、全て台無しになってしまう。
（……今は我が怒りを抑えよう。そのために道化と名乗ったのだ
から）

クラウンは彼らへの復讐よりも今自分が出来ることをしようと心に
決めた。

「……………1……6……全部で見張りは6人か。で、捕らえられた者たち
はあのテントの中にいるって……」

冬馬は高い木に登り、上からバイザーの暗視装置とサーモグラフを使って野営地にいる人間の数と配置を調べていた。

スパロウが言っていた数よりも奴隷の数が若干多いようだ。多分、捕まったアリスたちも他の奴隷たちと一緒にいるとみていいだろう。「さて、厄介な事になってきやがったぞ」

腕を組んで考え込む。

『何故考え込む必要がある？ミリア様とアリス様、後は捕まった二人の小娘を連れて逃げ出せばそれで事はすむ』

スパロウは冬馬の肩に乗り聞いてくるが、その案を冬馬は否定した。「黙れ、トリ頭の分際で語るな。」

こいつはそれほど単純にはいかないんだよ」

『ほう、理由は？』

「捕まっている人間の数が多いと、連れ出す時に連中の騒ぎが大きくなる。第一、皆一緒の場所に閉じ込められているなら尚更だ。」

それに捕まっている数はどう見ても30人あたりはいるぞ。だってら全員脱出させるのがまだ簡単だ」

『なるほどな。……ところでさっきの トリ頭 と言う言葉の意味はなんだ？俺はフクロウだからトリ頭なのは当たり前だぞ？』

スパロウは首を90°回転させて質問してくる。

「考えの浅い奴のことだよ……」

冬馬はあえてスパロウの方を見ずに答えた。

（……何故に俺は、フクロウとこんな会話をしなければいけないんだ？）

自問自答するが当然答えが出るわけがない。

（……………これが宿命さだめってんなら遠慮したいが……………ん？）
バイザーに何かの反応が表示される。

（この反応は……）

その正体を知った冬馬はニヤリと笑う。

「スパロウ、作戦が出来た。クラウンの所に戻るぞ」

『うむ、わかった。……………と、あそこに旨そうな野うさぎがいる

な。ちよつと獲ってくるから先に行つてくれ」

スパロウは遠目に獲物を見つけると飛び去ってしまった。

「……………本能か。やはり、所詮はフクロウだな」

さすがに少し呆れるが、構わずに戻る事にした。

「戻つたぞ」

茂みから冬馬が顔をだす。

『遅かつたな』

何故かスパロウがクラウンの肩に止まっていた。

「うをつ！なんで先に戻ってるんだよ！？ウサギはどうした！？」

『ここにある。フクロウをナメるな』

見るとクラウンの足下に獲ってきたウサギがあつた。

「びつくりしたよ。いきなりスパロウがウサギを持って戻ってくるとは思つてなかったからね」

『常に食料の確保は忘れない。これは生きる上での常識だ』

「と、言っている」

スパロウの言葉を冬馬が通訳する。

「ああ……………なるほど。それで首尾は？」

「問題ない。ただ助け出す人数が大幅に増えたぞ」

「何人くらいだい？」

「ざつと30人くらい」

クラウンがずっこける。

「静かにしろ」

「ご、ごめん。…………でも増えたのつて30人？多くないかい？」

「多いぞ。はつきり言つて多すぎるくらいだ。だから全員をいつぺんにまとめて逃がす作戦を考えた」

「そ、そうかい…………」

クラウンの驚きようもわかるが、多いものは仕方がなかった。

「作戦と言っても簡単だ。まず見張りを片付けて全員解放する。で、テントの裏手からこっそり脱出させる。その際にはクラウンは先頭を、スパロウは上空で連中の動きを監視して、俺が殿を^{しんがり}務める」
「大丈夫か？」

「この程度で死ぬほどマヌケじゃない」

「いや、作戦のほうだよ」

「8割がた気付かれるだろうな。まあ、なんとかなるさ」

「……………本当かい？」

「たぶん」

クラウンも心配するが、世の中何事も 絶対 と言う事はない。だから 臨機応変 と言う言葉が存在する。

「とにかく行動開始だ」

『ウサギはどうする？』

「知るか。気になるならどこかに隠しておけ」

『やれやれ……………』

スパロウはウサギを掴んでどこかへ飛んでいく。

（……………食い意地のはったフクロウなんぞ初めて見たな）

やはりペットは飼い主に似る、というだろうか？

野営地の周辺は、かがり火の明かり以外には暗闇に染められた。ゆっくりと近いて行くと、奴隷たちを閉じ込めているテントの中から三人程が出てくる。

（……………ん？見張り……………じゃ無いな）

三人のうち二人は武装した男だったが、後の一人はまだ幼い少女のようだ。見ると着ている衣服はボロボロで体にいくつもの生傷がある。

（なるほどな……………）

冬馬はこの少女が連れ出された理由がわかった。

要するにあの少女が、奴らの慰みものとしてこれから強姦^{レイプ}されるわけだ。

奴隷は奴らにとって（性）奴隷と同じ意味があるようだ。すなわちクソ野郎専用の肉便器だ。

少女の目にもすでに意志の光はなく、体を見る限り、もう幾度となく連中のオモチャとして襲われた事がみてとれる。

（冬馬、あの娘は……）

クラウンの表情は険しくなっている。

（お前の想像の通りだろうな）

（くっ、アイツら！）

クラウンは飛び出そうとしたが、冬馬はそれを抑える。

（待て、予定変更だ。見張りを片付けた後で二手に別れる。クラウンは予定通りにテントへ行って脱出させる。俺はあの娘を助けた後で奴らの陽動をする）

（わかった）

クラウンは頷くと静かに野営地に忍びよっていく。

（しかし、君も本当に弱い者の味方が好きだね）

（勘違いするな、俺は自分がやりたい事をしているだけだ。今回も、奴らが気に入らないってのが理由なだけだな。他意はない）

（そうかい？）

見張りの掃討は実に簡単だった。クラウンが誘き寄せ、冬馬が仕留める。これだけで終わる。

距離のある相手には消音機^{サイレンサー}を付けた銃で片付ける。発射口の光は布

をかけて隠してあるから気付かれる事はない。

（お見事）

（まあまあだ、じゃあ後はよろしく。くれぐれも騒ぎは抑えろよ）

（了解）

ここでクラウンと冬馬は別行動になる。

クラウンはテントに忍び寄ると中の様子を伺う。捕まっている人た

ちは確かに一カ所に集められているようだ。

（鍵は……よし、これなら）

クラウンは杖を取り出して解錠の魔法で外して、音をたてないように中にはいる。

（……皆さん、助けにきました！）

魔法で簡単に明かりをつけるとすぐに見覚えのある顔を見つけた。

（レオナ、リナ、大丈夫か？）

（隊長！）

（なんでここに？）

そこにいたのは一緒に捕まったクラウンの部下たちだった。双子の姉妹で姉がレオナで妹がリナになる。

（君たちが捕まったと聞いてね。無事で何よりだ）

（不覚でした）

（すみません）

二人はクラウンに頭を下げる。

とりあえず他の面々を見渡すと、なんと捕まっていた者全員が若い女性だった。

（……………なんとまあ）

さすがに啞然としてしまう。どうも連中は貴族相手に性奴隷に使うらしい人材を集めていたようだ。

（呆れて言葉もないとはこの事だ）

この数から推測するに相当数の貴族がここで取引しているらしい。

（ウェールズお兄ちゃん！？）

ここで出てきたのはアリスだった。

その後ろには気を失っているミリアが寝そべっている。

（ミリア様なら大丈夫です）

（お薬を嗅がされて眠っているだけで……………どうしました？）

クラウンは何故か顔を赤くして横を向いている。

（いや……………その……………）

それもそのはず、ミリアの格好は大きな胸元がはだけていて裾も腰

の辺りにまで捲れ上がっていた。とても正面から見るとは刺激が強すぎる姿だった。

よくさっきの奴らはこんな状態のミリアを連れて行かなかったものだ。

あどけない寝顔に抜群のスタイル、そこに衣服のはだけた姿に冷静でいられる男などいるのだろうか？

（隊長ー見ちゃダメです！）

リナがクラウンの目を隠す。

（あ……ごめん）

ここでやつと本来の目的を思い出した。

（じゃ、なくて！レオナとリナは皆にこれから脱出するから騒がないように伝えるんだ。あとアリスちゃんはなんとかミリアさんを起こしてくれないかな？）

（はい）

しかし……アリスはこの状況下でも動じる気配は見せていない。それもそのはず、アリスは冬馬にどんな状況下でも自分らしく行動するようにと教えられていたのだ。

（……やはり冬馬くんはただ者じゃ無いな）

クラウンはつくづく冬馬という人間に感心してしまう。

冬馬は気配を消して男たちの後を追っていった。

奴らはテントを離れて森へと娘を連れていく。

（先回りしておくか）

素早くルートを変更して森に入る。他の目につかず、かつ適当に広い場所に目星をつけて木の上に潜んだ。

このようなゲリラ戦術は幼い頃から学んでいるから、今では冬馬の十八番である。

「ここら辺でいいか」

予想通りに奴らが現れる。

「おら！さつさとケツを向ける」

娘を地面に押し倒すと、服を無理やり捲り上げる。

「きゃっ」

さすがに悲鳴をあげるが、もう一人の男が口に丸めた布を押し込んで口をふさいでしまう。

「静かにしな。こんな場所、誰も来ることなんざねえよ」

それでもまだモゴモゴと口を動かすので、男は彼女の首を絞めて黙らせた。

「んー！んー！」

いきなり呼吸を止められて手足をバタバタと動かして抵抗する。

「おいおい、まだ殺すなよ。これからが楽しみなんだからよ」

そう言つて首を解放させるとゲホッゲホッと苦しそうに息継ぎするが、布を押し込まれているので上手くいかない。

そんな中で手早く手足をロープで縛ると、強引に彼女の股を広げ始める。それに抵抗しようとするが、息継ぎも満足でない状態ではあつさりと足を広げられて自分の秘所をさらけ出されてしまう。

（……そろそろか）

冬馬は木の上からじつとタイミングを見計らう。

「へへ、まあ濡らさないでもいいよな」

男がまだ抵抗を続ける少女に向かって身を乗り出す。

「んー！んー！」

最後の抵抗か、腰を動かして男から逃れようとした。男はそれを両手で押さえて自分の方へ引き寄せた。

「いいねえ。やっぱり若い娘は活きがいいな！」

（今だ！）

冬馬は音を立てずに木の上から飛び降りた。

刀を真下に構え少女の上にのし掛かっていた男の脳天にそのまま突き刺す。

「がっ……」

素早く刀を抜き、男を蹴り飛ばして少女から遠ざける。

「な……」

さらに残りの一人も冬馬の一閃で首をはね飛ばされた。
その所要時間は実に2秒という早業である。

「動けるか？」

冬馬は少女を解放しながらそれだけ聞いた。大丈夫かどうかは見ていたので聞く必要はないし、後は動く気力があるのかだけだ。

問題なければ安全な所まで自分で歩かせるし、無理なら連れて行かなければならない。

「あ……」

「どうだ？」

「動け……ます」

震えながら立ち上がるが、たしかに歩くには問題なさそうだ。

少女の服はもはやただのボロ切れみたいになってしまっていたので、自分の上着を着せてやった。

「……すごく温かい……です」

少女は安心したように冬馬の上着を抱き締めた。

「そうか？……まあ、今さっきまで着ていたからな。それより、森をこのまま真っ直ぐに歩けば小さな広場に出れる。そこなら安全だし助けもくる」

森を指して少女に退路を教えると、野营地の方へと戻っていく。

「あの……」

そこへ少女が呼び止める。

「一緒に……」

一緒に来てほしい。だろうか？

「広場には一人でいけ。俺はまだやることもある」

「いえ……一緒に行かせて下さい」

「………なぬ？」

予期せぬ回答に思わず動きが止まる。

一緒に来て、ではなく一緒に行かせてほしい……だと？正気かこの娘？

「何故だ？」

「その方が、一番安全だと思うから……です」

……沈黙。

ただひたすら沈黙。

逆だろ。

俺と一緒にの方が一番危ないと思うが？

「ダメ……ですか？」

ここは断わるのが正しいのか？

それとも連れていく方が正しいのか？

どちらにしてもイヤな予感がする。

（………どうする。直感に頼ろうにも、どっちも危険な予感がするぞ）

ならば、リスクはまとめて受けることにしよう。

「………わかった、好きにしろ。だが命の保証はしないぞ」

「……はい」

少女の顔がほつとしたような表情した。

（………あー、なんでこうなるんだよ）

冬馬の残りの仕事は連中の陽動、できれば掃討する事だ。はっきり言って危険この上ない。

………やるしかないか。

重い足取りで野営地へと向かう冬馬であった。

それぞれの戦い

野営地に戻ってみると蜂の巣を叩いたような騒ぎになっていた。

どうやら片付けた見張りが見つかったようだ。これは好都合である。

「さて、暴れるとするか」

冬馬の全身の血が騒いでくる。

念のため、ついて来た彼女には自分のすぐ後ろから離れないように言っておいた。

「今回は周りに才人もいなければクラウンもない。ついでにアリスもないから、久しぶりに楽しめそうだ」

少なくとも後ろの少女を気にする必要はない。

自分の側が安全だと言ったのだ。存分に期待してもらおう。

なんにしても、今回は遠慮なく暴れられるのは間違いない。

なんだかんだ言って全力で戦ったのはワルドとの一戦ぐらいだ。それも時間切れでお流れ。だから時間無制限で出来るこの機会はまさにウサ晴らしにはもってこいだ。

「な、なんだお前は!？」

向こうもこちらに気がついたようだ。何人かが剣を構えて向かってくる。

「そう言えば名前はなんて言うんだ？」

冬馬はこの状況下で、場違いな質問を試してみた。

「…え? ……あの、マリア………マリア・エルフラムです」

「そうか、俺は神楽冬馬だ。さあ、しっかり付いてきな!」

「はい!」

二人は明日に………じゃなくて戦場へ走りだした。

ドカーン!

クラウンは予定通りにテントの裏から穴を開けて脱出しようとしたら、外から大きな音が響いてきた。

「なっ！……………冬馬くんはもう始めたのか」

クラウンは急ぎ風の魔法で周りの音を遮断して、捕まっていた皆と共にテントから森に逃げ込む。

その際少し後ろの方を見ると、そこには地獄絵図の光景が広がっていた。

冬馬はたった一人で大人数と戦っていた。そして、何故かその背後に少女を連れた状態で刀と拳を振るっている。

「あり得ない……………」

あの人数で、後ろの少女を守りながら、それでいて彼らを圧倒している。

とても人間技とは思えなかった。

「いや、今は彼女たちを逃がさないで」

クラウンはそーっと森の闇に紛れるように皆を誘導していった。

飛び散る血飛沫。

鳴り止まぬ悲鳴。

自分の前に立つ男の腕が、脚が、その全てが動くたびに一人、また一人とその命が散っていく。

（やっぱり……ついて来て正解）

されども、ただ一つとして自分の所に攻撃が届くことはなかった。ただ一緒にいる。それだけの選択が自分の命をつないだ。

（……………大丈夫、この人なら絶対に大丈夫）

確信が自分にはあった。

森で助けられた時に直感した。自分がいられる最高の安全地帯が…

……。

ここにあった。

冬馬は不思議な感覚に包まれた。

(……………何故だ?)

さつきから感じている違和感がある。後ろのマリアを守りながら戦っているはずなのにそんな気が全くしない。

いや、守ってはいる。

彼女へ向かった攻撃は全て防いでいる。ただ、その動きに合わせてマリアは邪魔にならない程度に移動しているので、迎撃がそのままこちらの攻撃になると言う現象が起こっているのだ。

これは冬馬にとって初めての現象だ。

今までの守るために犠牲にしなければならなかった動きが、彼女にいたっては必要がない。いつも通りに一人で戦う動きで十分問題はない。

そこにマリアへ向かう攻撃のみ迎撃する作業を付け加えるだけで事足りた。

(この娘……………ある種の天才だな)

初めて会った人間の動きを瞬時に読み取り、その動きを正確に自分にシンクロさせて行動する。

だから全ての動きにムダがない。

冬馬の動きにムダがないからこそ、マリアもそれだけの動きが出来るのだろう。

(これはまるで……………)

「ダンスをしているみたい…ですね」

マリアが冬馬の考えを読んだように話します。

冬馬がその言葉に一瞬動きが止まってしまふ。

無論そこを狙って連中が襲いかかってくる。が、だからと言って殺られる冬馬ではない。

「遅い！」

刀を風の如く振るい、瞬時に切り捨てる。

「妙な事を言うな……」

「……ごめんなさい」

動きを止めずにシユンとなって謝る。

「いや……まあ、気にするな」

…… 本当に調子が狂う。

マリアは未だかつて会った事のないタイプの天才肌の人間らしい。だが、そういつまでも上手くないのが世の常だ。

「貴様ああ」

奥から現れたのは目付きの悪く、ついでにガラも悪そうな男だった。杖を持っているのでメイジだとはわかる。

どうやらこのリーダーのようだ。

「やっと本命のお出ましか」

刀を振るって刃についた血を落として構えなおす。

しかし、ここで一つ問題が出てきた。

間合いである。

冬馬の脚力なら呪文を唱えられる前に近付けるが、そのスピードにマリアが追い付けるかわからない。

たぶん無理だろう。そうなれば突っ込んだ時点で無防備になってしまう。

さらにマズイ事にメイジは奴以外に後ろに控えている。

間違いなく、無防備になったマリアが狙われるだろう。

「どうします…か？」

マリアは背中にぴったりと寄ってどんな動きにも合わせられるよう備えている。

ピー、ピー、ピー

その時、耳につけていたインカムから通信が届いた。
それを聴いて冬馬は剣を鞘に収めた。

「……………遅かったじゃねえか」

「……………え？」

マリアは冬馬の顔をみた。

笑っている。

連中は降参したと思ったのか、一斉に呪文を唱えだした。

さすがに生かして帰す気は毛頭ないらしい。だったらこちらも遠慮はしない。

「マギ、奴らを吹き飛ばせ」

突如 何もない 空間から強力な砲弾が降り注いできた。

否、何かが冬馬の右後方にいた。

「ESCを解除しろ」

閃光と共に現れたのは、脱出船と一緒にトリスタニアへ降りていた
RAGだった。

『間に合いましたか？』

「ああ、いいタイミングだ」

その紅い機体の頭部に搭載されている対人用フラックス砲から硝煙の煙が出ている。

先ほどの斉射はコレを撃ったからによるものだ。

「う……………うわ」

着弾が手前だったために、文字通り吹き飛ばされた連中があまりの事に腰を抜かしている。

他にも吹き飛ばされた者たちもいたが、運が悪かったのだろっ、体のあちこちが変な角度で曲がってしまっている。おそらく生きてはいまい。

「消せ」

肩のウェポンラックには様々な武器が搭載されているが、今回は小

型ロケット砲が撃ち出される。数は3発。

とはいえ一発一発が対戦車用と同じ威力なので骨が残ればラッキーと言える。

冬馬はマリアを爆風から守りながら素早く爆音に紛れて森へ逃げ込んだ。

これにて陽動兼始末が完了。この近辺にレコン・キスタがまだいる以上長居は禁物だ。

RAGも同じように爆風に紛れて人間に変化して冬馬の後を追った。

森を抜けて広場に出ると、クラウンとスパロウが先に待っていた。

「お疲れ様でした」

『ご苦労。みるウサギもちやんと回収してあるぞ』

たしかにスパロウの足元にはさっき獲ったウサギがある。……覚え
てやがったか。

「冬馬ー！」

冬馬の姿を確認したのか、アリスが飛び付いてきた。

「アリスか！大丈夫そうだな」

冬馬もアリスの頭をグリグリとなでる。

「すっごく怖かったよー」

顔を押し付けてくると震えながら泣き出した。よほど怖かったのだ
ろう。

「よーし、よーし、もう大丈夫だ。俺がおもいつきり痛めつけてや
ったからな、だからもう大丈夫だ。泣き顔は可愛くないぞ」

背中をポンポンと優しく叩いて慰めてやる。

「うー」

それでも顔を押し付けてくる。しばらく、そのままにしたほうが良
さそうだ。

クラウンはその光景を見て自分の勘違いに気付いた。

アリスは、たしかに冬馬からどんな状況でも動けるように教えてもらった。

だが、それが動ける「怖くないではなかったのだ。彼女だってまだ10歳の子供だ。

父親とは離され、母親が動けず、一緒にいるはずの使い魔の冬馬もいない。そんな状況で怖くない筈がない。

（……私もまだまだだな）

クラウンは己の未熟さを改めて思い知った。

『に、しても 痛めつけた では無くて ぶっ殺した の間違いじゃないか？』

空から冬馬の行動を見ていたスパロウは、冬馬にわからないようにボソツと呟いた。

「なんか言ったか？」

素早く冬馬が反応する。

『なにも言っていないぞ』

プイツと顔を反らしてトボケる。

「はあ、はあ、間に合ったか」

と、茂みから何故かアルクが出てきた。

「アルクさん!？」

「なんだ、怪我人なんだから大人しく寝ていれば良いのに」

クラウンは驚き、冬馬はその前に気配に気付いたので呆れたようにアルクをみる。

「ふふ……女房と娘の一大事に、のんびり寝ているほど私だって呑気ではないさ」

息も絶え絶えに喋るが、いくら何でも無理すれば死ぬぞ？マジで。

「とはいえ、もう終わってしまったようだね」

「まあな」

アルクは周りを見渡して状況を把握した。

広場には連れ出してきた者たちで一杯だった。

「彼女たちが全部……」

「奴隷だ」

冬馬が頷く。

「お…お父様あ」

さっきまでしがみついていたアリスが、やっとアルクに気がついたらしく今度はアルクに抱きついた。

「アリス……ああ、無事で良かった。ミリアも一緒かい？」

アルクは我が娘を抱き締めてもう一人、大事な自分の妻を探す。

「ふああ……私はここよ」

アルクの声にミリアが出てくるが、何故か眠そうだ。

「ミリア！………なんだか眠そうだね？」

再会に喜ぶアルクだが、ミリアの様子に首をひねる。

「そうなのよ、まだ薬が効いてるみたいで………ふわあ」

ずいぶんと可愛いアクビをするミリアに、この場にいる全員の気が抜ける。

「さすが……天然の能天気は変わらずか」

冬馬も腰に手を当てて嘆息した。

そんな空気にやっとアリスが泣き止んでくれた。

「それで、これからどうする？」

アルクはこれからの動きを聞いてきた。

ちなみに、まだ眠そうなミリアと、泣き止んだばかりのアリスは広場にいる彼女たちに任せる事にした。

女の事は女同士のほうが上手くいく。

「トリスタニアへ降りる。これは変更しない」

このままアルビオン大陸に留まるのはレコン・キスタに捕まると同義語だ。

今回の件もあるし、一刻の猶予もない。生き残りが奴等に連絡しないとは限らないからだ。

「問題は……」

クラウンは広場をみる。

30人はいる彼女たちをどうするか、だ。

連れていくしかないのは決定事項だが、最大の問題はその数である。

「アルク…船には乗せられるよな？」

「一応大丈夫だろうね。大きさのわりに色々と入るから」

「なら問題は降りた後か……」

「……」

三人で考え込む。

「降りてから考えるか」

「賛成」

結局、冬馬の問題を後回しにする方向で意見が一致した。

その後、船を隠した場所へ向かうと、夜明けを待って出発した。

それと、船へ向かう途中で彼女たちには今のアルビオンの状況にクラウンの正体と隠す理由、冬馬たちの事情を簡単にだが説明してやった。

幸いな事に、ミリアやアリスまで説明に入ってくれたのですんなりと信じてくれた。

驚いたのはそこにマリアも入って冬馬に関してフォローしてくれたのだ。

理由を聞いたところ、返ってきた答えが

「私の安全地帯だから」だそうだった。

一応マギの方も自己紹介するが、こちらはあまり歓迎しなかった。まあ、あれだけ暴れれば当たり前か。

何はともあれ、ずいぶんと人数の増えた一行はトリスタニアへと渡る事になった。
遠く離れていくアルビオン大陸を、冬馬とクラウンはじっと見つめていた。

今は遠く離れる大陸だが……、いつか必ずアルビオンへ戻ってくる。
クラウン……いや、ウェールズは打倒レコン・キスタ、そして王国
復興のために。

そして冬馬はワルドと決着をつけるために。

「必ず…取り戻してみせる。王族ではなく、私の威信に賭けて！」

「待つてやがれ……あのバカ共が誰にケンカを吹っ掛けたのか、地
獄の底でわからせてやる」

第二ラウンドのゴングは、静かにその時を待っていた。

一時の休息

トリスタニア王国の外れの草原に飛行船は不時着した。

後になって知ったが、この船の名前が　タイタニック号　と言つらしい。すつごく縁起の悪い名前だ。

無論この名前も伊達ではなかった。

ここに来るまでに沈没ならぬ墜落しそうになったからだ。

「無事に着けましたね……」

アルクやクラウン以下乗員の皆さんが、ヨロヨロになりながら船から降りてくる。

「………奇跡だ」

クラウンもうんざりしたように顔を上げる。

「………なにが奇跡だつて？」

最後に降りて来たのは冬馬だった。彼がこの中で一番ヨロヨロだった。

「いきなり風石が切れたお蔭で、上空１０００Ｍから墜落する所だ
つたんだぞ！」

冬馬は絶叫に近い文句を言う。

「うつ……」

そのために軽い貧血を起こしてよろける。

「大丈夫？」

マリアが倒れそうな冬馬をそつと支えてくれた。

ついでにミリア、アリスの二人はその墜落騒ぎですっかり気絶していた。普段はマイペースなのに、この手の絶叫系のアクシデントには弱いらしい。

「本当に冬馬くんがいてくれて良かったよ」

アルクが腕を組んで頷く。

風石と呼ばれる鉱石は、魔法と同じように精神力を注ぐ事で高い浮

力を発生させる魔法石の一つだ。

ある程度鉱石自身が浮力を持続させるので、その性質を利用した物を動力としたのが飛行船と呼ばれる船になる。

では浮力が切れたらどうするか？

方法は簡単、新たに精神力を注ぐだけでいい。問題は誰がやるかだ。この中でメイジは4人、だがうちの二人……ミリアとアリスは気絶しているため無理。

アルクは船の操舵をしているから離れられないし、クラウンは……

……騒ぎだしている彼女たちを抑えていた。……で、残ったのが冬馬である。

メイジではないが、気力が有り余っていそうだと言う理由だけで白羽の矢が立ってしまった。

仕方なく風石に精神力（？）を注ぐ事になったが、これが予想以上にしんどかった。

簡潔に説明すれば、意識が風石に吸い取られていくような感じた。

少しでも気を抜けば間違いなく意識が飛んでしまう。

それでも必死に抵抗したためか、風石に莫大な浮力を産み出すことができた。

まあ、その代償として冬馬自身が疲労困憊の状態になってしまったわけだ。

「いつそ殺せ……」

完全にグロッキーになっている。むしろまだ立っていられる事の方が信じられなかった。

冬馬が放った精神力は、最上級メイジが束にならなければならない程のパワーを作り出していたのだ。この抵当の代償は当然である。

「あなたは……殺しても死なない」

マリアは身も蓋もないフォローをしてくれた。

「うーん、日もまだ高いけどここは皆の回復を兼ねて宿を張ろうか。冬馬くんもこんな感じだし、これからの方針を決めるのは明日で良いだろう」

アルクは周りをみてそう判断した。

幸い船の中には食料も十分にある、ここで野宿するには問題はない。
「冬馬くんを船の中で休ませた後で、付近を調べてみよう。近くに村があれば目つけ物だ」

矢継ぎ早に指示を飛ばしていく。

アルクも冬馬程ではないが、リーダーとしての資質を持っていた。
普段そんな機会が無いから目立たないのだ。

実際には先の脱出作戦の時に爆弾の設置を指揮していた事があったが、冬馬の活躍によってうやむやになっている。

だからといって、本人はそれを全く気にしていない。

クラウンもそのリーダーシップを見習う事にした。

冬馬の言う通り、やはり色々と学ぶのは後々役に立つ。

今は自分の周りの出来事を知ることが、何よりも重要だと言う事がだんだん分かってきたようだ。

「タルブ村？…はて、どこかで聞いたような……」

地図によってこの近くに小さな村がある事が分かった。

アルクはどこか聞き覚えのある地名だったが思い出せない。距離はここから歩いて3、4時間程の所にあつたから行けなくもなかった。

「まあ、そこへは明日訪ねる事にしよう。今は少し休んだ方がいい」
そう言つて近くの森から取ってきた薪で火を起こしてスープを作り始めた。

冬馬程では無いが、アルクもいくらかサバイバル知識はあつたから手際よく作っていく。

「今、精のつくスープを作つてあげるよ。ちょっと待っててね」

船から大鍋を持ってきて材料を切り分け、放り込み、煮詰めていく。

「手慣れてますね」

「はは。いつもはミリアに作ってもらっているけど、昔は何でも自分でやってたからね」

二人は近くにいた人物を同時に指差す。

「「マギ」…さん」

それに気が付いたのかマギ（人間モード）が振り返る。

「……………お前、何を教えた？」

「看護の仕方を教えてほしいと言われましたから、教えました」

「……………参考にした教材を述べよ」

「ナースでハーレム です」

……………アダルトゲームじゃねえか（怒）

なんつーカテゴリーを持つてるんだこの万能AIは？

……………万能にも程があるぞ。

恨めし気味に睨むが、自分は無関係とばかりにどこかへ行ってしまう。

（……………おのれ）

しかし今はこの状況をなんとかしなくてはならない。

だが、なんとかしようにも二人が乗っかってるので動けない。それに力もまだ十分に帰ってないから振り落とす事も無理。

まさに まな板の鯉 ……ならぬ ベッドの冬馬 と言う状態だ。

成すがまま、無抵抗、鴨がネギ背負って…は違うか、お釈迦さまの手のひら等々……………。

とにかく非常にマズイ事態だ。

「あーん」

「…あーん」

二人がスプーンを持って差しだしてくる。何かのスープのようだが、コレでは本当に病人になった気分だ。

「…なんだソレは」

「お父様特製スープだよ」

アルク特製？……………なら危険は無いだろう。

だが……………やはり病み上がりからだろうか？
食欲があんまりなかった。

「いや、今はいい。後で食べるよ」

「ダメだよ、ちゃんと食べないと」

「…ダメ」

「しかしなあ……」

すると何を思ったのか、マリアが皿のスープを一口だけ口に含んだ。

………ん？含んだ？

まてまて、まさか………。

「…強制摂取させる」

マリアの柔らかい唇が冬馬の口に押し付けられる。

「………！！！！」

そのまま中のスープが直接口移しで流し込まれてきた。

ついでに舌も入ってきた。

（………こ、これはあの時の再現か？）

第3話参照

「あー！マリアさんずるいよー、私も！」

負けじとアリスも続く。

（………やめろー！）

制止させたいが手足は動かない、口もふさがれて声も出せない。ま

さに万事休す。

しかもアリスが終わったらずにマリアが口を塞ぎ、マリアが終わ

ったらアリスが………エンドレス。

スープの入った皿が空になった頃には、冬馬は酸欠でピクピクさせ

てダウンしていた。

（………本当に殺せ）

まさに拷問だった。

入れ替わり立ち替わり口移しをしてきた為に、冬馬は呼吸が満足に

する事が出来なかったのだ。

反面、アリスたちは満足そうに皿を片付けて部屋を出ていく。

………あれは鬼だ。

「………何故だ、何故ここ（ハルゲニア）に来てから女難続きなんだ？」

あいにくと、その問いに答えられる人間はここにはいなかった。

また目を覚ましたら今度は朝日が登ってきた。
どうやらあのまま力尽きていたらしい。

体の調子は昨日よりもずいぶん良い。やはりアルクのスーブは効いたようだ。

…………… 摂取方法は別にして。

(…まだ感触が)

ここは悪夢だったと割りきろう。

船から外に出るとクラウンが何かの体操をしていた。

「何をやってるんだ？」

その声を聞いてこちらを向いた。

「ああ、おはよう。体の方は良いのか？」

「元が丈夫だからな。で、何をやってるんだ？」

冬馬が再度聞いた。

「前の戦いの事を思い出してね。私も冬馬くんみたいに魔法を使わなくても戦えるように出来ないかと思ったんだ」

前の戦いとは奴隷商との一戦の事を言っているようだ。

「それで体操か？」

「まあ、そんな感じ」

「…………… ふむ」

たしかにクラウンの話も一理ある。戦闘の際にはいつ自分の得物が使えなくなるか分からない。

それだけに冬馬も、地球にいたかつての戦友も、複数のパターンの戦術を持っていた。

ちようと体も動かしたかったので、試しに自分の使う武術を実際に見せてやる事にした。

「良いだろう、せっかくだから見せてやる。俺の使う流派は神楽精かぐらせい仙術せんと言いう古武術だ」

「わかった」

クラウンも構える。

「なら打うってこい。心配するな、反撃はしない」

冬馬も左手を後ろに回し、右手だけ前に出して構える。

「いくぞ！」

クラウンが飛びかかった。中々のスピードで冬馬に迫る。

振り上げた拳が風を切るように目標を打ち抜こうと迫りくる。

「…反計術、柳の舞」

右手を相手の拳に沿うように滑らせて、踏み込みに合わせてこちら
も半歩前へでる。

「な……」

クラウンは自分の拳がいきなり当たる寸前で軌道を変えられた事に
驚き、後から来る冬馬の右手に全く反応出来なかった。

「はい終了」

気が付いた時には自分の額に冬馬の手が乗せられた。

「……………いつの間に」

「この技はカウンターの一つでな、相手の動きをそのまま利用して
繰り出す。実戦だったら今頃は死ぬか、戦闘不能になっていたぞ」

「……はは、降参だ」

両手を上げて降参の意志表示をした時、いきなりアルクが飛び込ん
できた。

「思い出したよ！タルブ村は例の……おや？冬馬くんおはよう」

コロコロ変わる話のテンポについて行けず、冬馬とクラウンはずっ
こけた。

「その切り替えはなんとかならんのか？」

「いやぁクセみたいな物だからね。…と、それより冬馬くん以前
竜の羽衣の話をしたと思うけど、この先のタルブと言いう村にそれ
があるらしいんだよ」

「竜の羽衣……か。少し気になるな」

「それで皆の事もあるし、ひとまずそこに向かおうと思うのだが良
いかな？」

アルクの提案は最も意見だ。

何時までもここにいられないから、移動先の目安が出来たのは良い
ことである。

「そうだな、行く当てもないしそこに移動するか。……だが船はどう
する？」

「固定化の魔法をかけて置いておくさ」

「よし、皆に伝えて荷物をまとめよう。タルブまでの距離は？」

「歩いて3、4時間ほどかな？」

次の目標が決まれば彼らの行動は早かった。たちまち準備が整えら
れて日が登った頃には出発できるようになった。

だが、その時はこれから行く村で突然の再会と、衝撃の事実が待ち
受けているとは冬馬は思いもしなかった。

祖国の絆（前書き）

ふー、やっと本編に絡めた。

祖国の絆

タルブの村に一行が着いたのはお昼を回った頃だった。

「わー綺麗だね」

アリス以下女性陣の全てがその光景に感嘆してしまう。

「ほう……見事なものだ」

そこに広がっていたのは一面に咲き誇る花畑であった。赤、青、黄色、紫、様々な花が草原を埋め尽くしている。

「トリスタニアの花は、やはり美しい」

クラウンもすっかり見入っている。

「これは全部野草なのか？」

冬馬はまだ花の種類に疎いためにアルクに聞いてみた。

「そうだね、だがこれだけ群生しているのは初めて見たよ」

アルクもこの光景に驚いていた。

しばらく花畑を見ながら進んでいくと村の入口についた。

「クラウン」

「わかってる」

クラウンが魔法で自分の金髪の髪をブラウンカラーへ変えた後、アルクから借りただて眼鏡で変装する。

村に入った所でいきなり多数の村人に出くわした。皆手にそれぞれ農具だの槍（？）を持っていが、何故か空気が険しい。

「……………これは一体？」

やはり突然謎の一団が来たので警戒しているのだろうか？それにしては殺気立っているが……………。

（ああ）

冬馬はポンツと手を合わせる。この原因に気が付いたのだ。

「アルク、アレだ。昨日草原に不時着した……」

「まさか…私の船が原因で？」

「だろうな」

理由が他に見当たらない。

そりゃ近所の草原に突然空から船が落ちてきて、その後にこんな団体さまで来られようものなら誰だって警戒するだろう。

「では…私が説明してみるよ」

「おう」

そう言っただけでアルクが村人の方へと歩いて行った。

……………。

しばらく待っているとアルクが手を振って合図してきた。どうやら上手くいったようだ。

冬馬たちはそれから村長に詳しい事情を話し、連れてきた彼女たちの引き取りをお願いしてみた。

「……そうかい。それで遥々アルビオンから逃げて来たのか。わかった、この少女たちは村で引き受けよう。そうすれば少しは賑やかになるだろうしな」

村長は冬馬の願いを快く引き受けてくれた。

「に、しても今日は客人の多い日じゃな。お主たち以外にもトリスタニアの魔法学校から来たと言うマードさんの所の娘さんが帰って来たのだよ」

「そうですか」

なるほど、自分たち以外にも客人が来ていたのか。

冬馬はその話を聞いてふとトリスタニアにルイズと共に渡っていた平賀才人の事を思い出す。

（たしかアイツが居るのも魔法学校と言っていたが……まさかな）
村長の家を出ると後のことをアルクに任せてその客人を訪ねてみる事にした。

「ここか…」

来てみたその家は周りとは違い日本家屋のような平屋の造りになっていた。

ちなみに例によってアリスはいない。………使い魔の主人はどんなったんだ？

代わりに何故かマリアと一緒に来ている。

「なんで一緒に来る？」

「…なんとなく」

とりあえず頼つぺたをグイグイと引っ張ってやる。

「…いふあいふあい（痛い痛い）」

痛がるが無視する。

「…なんで？」

涙目でこつちを見るが無視する。

「…うるうる」

………あー面倒くさい。

冬馬は構わず行こうとすると誰かが家から出てきた。

出てきたのは黒い髪をした少女だった。

「どなたですか？」

髪と同じ色の黒い瞳がこちらを見つめる。

（…日本人？）

そう思える印象を受けた。

「あの……」

再度聞いてくる。

「ああスマナイ。今日この村に来た旅人なのだが、同じようにやって来た客人在ると聞いて訪ねてみたんだが…」

「シエスタ、お客さんか？」

奥から聴いた声が聞こえる。

「その声は………」

「才人さん」

そう聞こえてきた声の持ち主は、ニューカッスル城で別れた才人だ

った。

「冬馬さん！」

「まさかと思ったが、元気そうだな」

冬馬が軽く手を上げて挨拶する。

「え？あの…才人さんのお知り合いの方ですか？」

「ああ、アルビオンに行つてた時に助けてもらった人だよ。いつこちらに来たんですか？」

「敬語はいらない、来たのはつい昨日だ。あと、後ろにいるのが…」

「マリア・エルフラムと申します。冬馬さんとは切っても切れぬとても深い関係で…痛い」

マリアが頭を押さえてうずくまる。

冬馬のゲンコツが落ちたのだ。

「…派手に誤解を招く紹介をするな」

「切っても切れぬ…」

「深い関係…」

才人とシエスタは腕を組んで考え込む。

「……………お前ら（怒）。

「どーしたのダーリン？」

「騒がしいな、何があつたんだい？」

「…うるさい」

さらに中から赤毛の制服のやたらとスタイルの良い少女と青髪の低い少女、金髪のキザツたらしい少年が続けて出てきた。

「みんな！冬馬、紹介するよ。この人たちは俺の友達で…」

「シエスタと言います」

黒髪の少女が丁寧に頭を下げる。

「キクルケよ」

赤毛の少女が胸に手を当てて挨拶をしてきた。

「…タバサ」

青髪の少女は素っ気なく答える。

「ギーシュだ。よろしくミス・マリア」

金髪の少年だけわざとらしくマリアの手を取って深々と挨拶してきた。

「あ……」

マリアが冬馬をみて、どうしようかと言うように目で訴える。

（俺は知らん）

こちらも目で応える。

マリアは

「うーん」と考え込む。一応意味は伝わったらしい。

「……私の手は冬馬以外には触らせない」

ペシッとギーシュの手を弾く。

さらにそのマリアの頭にもう一回、今度は手刀が落ちる。

「どんな対応の仕方だ！」

……… 本当に何を考えているのか分かん娘だ。

「……うう、痛い」

……… だから知るか。

「で、なんで才人はここにいるんだ？ルイズはどうした？」

「……う」

才人が押し黙る。どうやらまた何かあったらしい。

「……色々大変」

マリアが勝手につつこむ。

「……… まあ、いいか。で、なんでだ？」

「あの、才人は私の家に伝わる 竜の羽衣 を探しに来たんです」

才人に変わってシエスタが説明してくれる。

「 竜の羽衣 だと!？」

「そう、ここにあるらしいんだ。何でもひいおじいさんが乗ってきたとか」

「……ふむ。だったら俺も付いていっても良いか？」

「え?……はあ、良いですけど……… お宝とかではありませんよ?」

「構わない。むしろ宝じゃない方がありがたい」
冬馬がそう言うと、シエスタも了承してくれた。頼んでみるものだ。
「それでは案内致しますので付いてきて下さい」
こうして才人たち以外に冬馬とマリアも加わって案内される事となった。

竜の羽衣　がある場所は村から外れた場所にある洞窟の中にある
とのことだ。
松明を最前列にシエスタが、最後尾に冬馬という形で隊列を組んで
進んでいく。
洞窟の中程に入った時に冬馬はすぐ後ろに誰かの気配を感じ取った。
(なに！……いつの間に)

この気配に冬馬が驚く。なにせこれ程近付かれてやっと気がつくなど、自分が昔に武術や戦術を教えてくれた師匠以来である。

なお、冬馬のすぐ後に同じく後ろの方にいたタバサもこの気配に気づいた。

「気をつけて！」
その瞬間だった。

いきなり天井が爆発して破片が降り注いできた。

「うわぁ！」

突然の事に才人たちが慌てふためく。ただし二人だけ素早く反応していた。

タバサは瞬時に風の魔法で瓦礫を防ぎ、冬馬は刀を抜いて気配の方へ駆け出す。

「宝を荒らす盗人共め！今のは警告だ！大人しく………」

「するのは貴様だ！」

声の主を素早く掴み取り、投げ飛ばした。

「うわ！」

現れたのは紺色のローブを着た男だった。長めの杖を持っているので間違いなくメイジだろう。

そのメイジは受け身を取ってすぐに体制を立て直す。

「むう、ただ者ではないな」

「ほう、その動きは俺と同業者らしいな」

ローブのメイジと冬馬が互いに構える。

一触即発の空気が洞窟内に立ち込めてきた。

ところが、そんな空気を一発で吹き飛ばした人物がいた。

「コルベール先生！なんでここに？」

才人だった。

「な…才人くん！？それにミス・ツエルプストーにタバサ、ギーシユくんまで…なんでここに？」

「……………知り合いか？」

冬馬は警戒を解かずに才人に聞く。

「ああ、魔法学校の先生で俺の先生だ。コルベール先生は大丈夫だから武器を下ろしてくれ」

才人が説明するが、冬馬は武器を下ろさない。

「向こうが先だ」

冬馬はコルベールを睨み付けながらそう言った。これは冬馬からすれば当然の対応だ。

人の話を鵜呑みにして逆に殺される、もしくは先手を取られるのは戦場ではよくある事である。

それはコルベールも分かったのだろう。先に杖を投げ捨てた。それを見て冬馬も刀を引く。

「ふん、命拾いしたな」

「才人くん、彼は一体……………」

「俺の友達です。先の任務の時に助けてもらったんです」

「なるほど…えーっと」

「神楽…冬馬だ。冬馬でいい」

「彼の本名は佐々木冬馬って言うんですけど、今のは偽名らしい」

です」

「…余計な説明はいらん」

「ゴメン」

冬馬のつつこみに才人が謝る。

「あの…もう先に進んでもよろしいでしょうか？」

シエスタがそろーと言ってきた。

「そうだな」

一同が洞窟を抜けると、そこには箱庭のような森があった。

「この先です」

さらに進んでいくと木々の間から何かの小屋みたいな物が見えてきた。

木造の造りの掘っ立て小屋だったが、それをみた途端才人と冬馬の足が止まった。

「どうしたんですか？」

シエスタが声をかけるが反応しない。

「…なあ才人、これはまさか……」

「…ですよ。これ、昔ひい祖父さんのアルバムで見ました」

その造りには二人とも見覚えがあった。

第二次世界大戦の時に日本軍が建てていた航空機用の格納庫にそっくりだったのだ。

（…おい、冗談じゃないよな）

フラフラと小屋の扉に手をかける。

ガラガラ……。

すんなりと横にスライドしていく中で二人は小屋の中身に絶句した。

「マジかよ……」

「……そんなバカな」

そこにあつたのは一機の複翼機だった。くすんだ濃緑の塗装に赤い丸の国籍標識、そして胴体に書かれた 辰 の文字。

日本を代表する戦闘機、ゼロ戦であつた。

「なんだいコレは？こんな力ヌーに翼を取り付けたようなオモチャが竜の羽衣なのかい？まったくいい加減なデマにもうんざりだ。これならワイバーンやドラゴンのほうが何倍もマシさ

「……れ」

「本当よ。こんなものが飛ぶわけないじゃない

「……まれ」

ギーシュとキュルケが口々に言う。

「黙れ！」

いきなり冬馬が大声で全員を黙らせる。

「いいから黙つてろ……」

才人も何も言わずにゼロ戦の周りを調べていく。

「どうだ？」

「……間違いなく本物だよ。でもなんでこんな物がここに……？」

ここでやつとコルベルが口を開いた。

「……才人くん、この竜みたいのが本当に竜の羽衣なのかね？」

「はい、シエスタからひいお祖父さんが空からやって来たという話も、間違いなく本当にあつた事でしよう」

「ではこの竜は飛べるのかい？」

「無理ですよ先生。この竜には飛ぶための翼も無ければ動くことすら出来ない。本当に飛べるのならこのグラモン、平民に頭を下げてもいいくらいですよ」

ギーシュが得意げに言い放つ。

「なら、今すぐ頭を下げる。才人、コイツは動くぜ。燃料がまだ残っている」

「本当か！でも場所が……」

「広い草原で良いだろう？運搬なら当てがある」

「そうか、アレか！」

才人はすぐに気づいた。

「なんか知らないけど……あら？タバサはどこに行ったのかしら？

あとマリアさんも」

キュルケは周りを見てみるとタバサとマリアが小屋の外で何かを見ていた。

「どうしたの？」

「……あれ」

キュルケも覗いてみる。

それは石碑……と言うより墓石だった。

「ああ、それはひいお祖父さんのお墓なんです。でもそこに書いてある文字が異国の文字らしくって、誰も銘が読めないんですよ……」

「何かしら？…象形文字みたいだけど」

「『日本帝国軍海軍少尉佐々木武雄、異界二眠ル』」

「はい？」

すらすらと才人が読み上げたので、シエスタは目を丸くした。

「これは日本語ですよ。俺と冬馬の国の文字です」

「ダーリンの国の文字……」

キュルケやシエスタ、タバサとマリアも驚いて才人を見る。

ちなみにギーシュは、さっきあっさり冬馬に言い返されたシヨックで立ち尽くしていたのでほっといてある。

「佐々木…武雄、この名前は間違いない……俺のひい祖父さんの名前だ」

冬馬が墓石をみてうなずいた。

「え！？」

これには才人の方が驚く。

「機体に書いてあった辰の文字は、じいさんがいた部隊のマークなんだ。だが、哨戒任務の最中に消息を絶ったと記録されているがね……そうか、ハルゲニアに流れ着いていたのか」

墓石を見ながらどこか遠くを見つめている。

「シエスタ…君はお祖父さん似だって言われなかった？」

才人がシエスタに聞くがシエスタは驚いた。

「ええ、確かに言われましたけど……なんでそれを？」

「黒い髪に黒い瞳、これは東洋人の……日本人特有の色なんだ。だから、シエスタにも日本人の血が流れているんだろう」

この回答には冬馬が答えた。

「…俺、シエスタを初めて見た時に、すっごく懐かしい感じがしたんだ。それが、こういう訳だったんだ」

才人は自然と涙が出てきた。忘れる筈もない望郷の念が溢れてきたのだろう。

冬馬はそれを見て腰にかけておいた水筒を取りだし、墓石に少しだけかけるとシエスタに渡す。

「え？あの……」

訳も分らずに受けとるシエスタだが、同じようにやるように言うてシエスタも水をかける。

「ほら、才人も」

才人にも残りの水を渡す。

「いいのか？」

「ああ、頼む」

才人も残りの水を全部かけた。

その意味が分からずにただキュルケたちは見ていた。

それから冬馬は懷から二本の葉巻を取り出した。

「本当は線香が欲しい所だが……」

葉巻に火を着けて墓の前に差し込む。

「何をしているんだい？」

コルベールが聞くが冬馬は構わずに才人にもう一本の葉巻を渡す。

才人はすぐにその意味に気がついて受けとると同じように差した。

そして二人で墓の前で手を合わせる。

「これは、俺たちの国の墓参りのやり方なんです。水で墓石を清めて、墓前に線香と言う香を焚く、それが供養になります」

才人がコルベールやキュルケたちに説明する。

ただシエスタだけはその姿を見て胸が熱くなった。

(…あれ？なんでだろう)

そう思うと頬を一滴の涙が流れてきた。

「え？なんで…」

止めようとしても次から次へと流れていく。それでも全然悲しいとは感じなかった。

まるで自分の中にいる誰かが泣いているような感じた。

見ると冬馬も泣いていた。

ただし、表情は変わっていないからシエスタと同じ状態なのだろう。

「この葉巻は純国産製だ。少しは故郷（くに）を感じられるだろう……さて
そこで冬馬は一旦言葉をとめる。

軽く息を吸って備える。

「南無……」

冬馬はうる覚えながらもお経を唱え始めた。

シエスタやコルベール、キュルケたちにはその内容も意味も分からなかったが、その良く澄んだ声は森中に響き渡っていった。

そのお経に才人も心の中で何かが奮えていた。

日本にいた頃は聞くのも嫌だったお経も、今ではむしろ心が洗われるような気がしていた。

それはこの場にいる全員が同じ気持ちだったようだ。

お経を唱え終わると一旦村に戻る事になった。

ちなみにギーシュは先程の暴言に対して、シエスタや才人から事情を聞いた後、冬馬と才人に自分の勝手な妄想で二人の祖国をバカにしてしまった事を泣いて謝ったそうだ。

本当に頭を下げる羽目になるとは、まさに自業自得である。

真夜中の説明会

……………疲れた。

何に疲れたと言えば説明である。

村に戻るとすぐにアルクたちが飛んできた。

理由は簡単だ。俺が 竜の羽衣 を見に行った事を知ったからだろ
う。

そして、才人を交えた説明会が開かれたのだ。

受講者はアルク以下ミリア、アリスのフェリーテス家とコルベール、
そしてシエスタにルイズのメンバーになった。

と言っても話について来れたのはアルクたちとコルベールのみだっ
た。

残りのメンバーはチンプンカンプンのまま話を聞いている。

まあ、元々が研究者の三人と同じように独学で研究しているコルベ
ールは、なんとか理解が追い付いてはいるらしかった。

「つまり、あのゼロ戦と言う竜の羽根が動かないのは、風の揚力
を受けるためだ？」

「その通りだ。その分かりやすい例がコレだ」

冬馬は適当な紙で紙飛行機を折って飛ばしてみせる。

紙飛行機はそのままルイズの所に落ちた。

「なんでこんなモノが例になるのよ？」

ルイズは摘まんで投げ返す。

「ルイズ、なんで普通の紙が魔法なしに飛ぶと思う？」

「なんでって……………なんで？」

ルイズは首をひねり、代わりにコルベールが答えた。

「そうか、これが揚力なんだ！翼が固定されていれば流れてくる風
が翼の下に潜り込んで紙飛行機を押し上げるんだね」

「正解。これを応用したのが俺達の世界にある飛行機の基礎原理だ」

「そしてゼロ戦の先端にあるプロペラで、さらに強い風を送り込ん

であの機体を浮かすんです。それを可能にしたのがコルベール先生
の作った、動くヘビくんなんです」

「動くヘビくん？なんだそりゃ？」

冬馬の説明を才人が引き継ぐが、いきなり変な単語が出てきた。

「先生が作った初歩的なエンジンだよ。と言っても半分オモチャだ
けどね」

「……マジで？」

「マジ」

「本気と書いてマジ？」

「本気」^{マジ}

これには冬馬も驚いた。まさかこのハルゲニアで、自力でエンジン
を作る者がいるとは考えてもいなかったのだ。

「それでこの技術は他には使えるのかい？やはりそのエンジンが無
ければ無理とか……」

「いや、簡単なモノならそんなの必要ない。その原理だけを使った
飛行器具があるからな」

「え？なにになに？」

さすがにすぐに食いついて来たのはアリスだった。

「その名もハングライダーだ。材料があれば明日までには作ってや
るぞ」

「わーい！」

これが帰ってきた後にあった説明会の全容である。

そして、アルクとコルベールにお願いして材料も揃えてもらったの
で才人と共にただいま夜通しで制作中だ。

……余計なことを言うんじゃないかった。

ちなみに何であの場にルイズがいたのかと言うと、途中までコルベ

ールと一緒に来たものはぐれてしまっていたようだ。

翌朝早くに冬馬と才人が一晩かけて作ったハングライダーが草原に置かれている。材料はシエスタの家からもらってきた大きめの白いシートに、なぜか群生していた竹を使って支軸を作り、即席のハングライダーを作り上げたのだ。

無論ちゃんと安全性は確認済みだ。

「うーむ、意外と使えるなそのガンダールヴ」

冬馬が感心したのは才人の使い魔の能力である。本人が言うにはあらゆる武器を使いこなす事が出来るらしいが、本当に武器なら何でも問題ないらしかった。

竹の加工に持っていたアーミーナイフを才人に貸した所、実にあっさりと使ってしまう。

（そついや才人に渡した銃も、初めてでしっかり当てていたな）
昨夜の作業中の出来事を思い出す。

「なんだ？銃は使えるのに整備が出来ないのかよ」

一応返してもらった銃を点検がてら才人用に調整していた時だった。

「うん、まあ、デルフなんかの剣だったらわりと簡単なんだけど、整備しようとする力が消えるんだよ」

「さっきゼロ戦を見ていただろうが？」

「うーん、なんでだろ？」

才人も腕を組んで考える。

（…能力は武器を使う時に発動して、それ以外の物を使う時は発動しない……か）

ふと、冬馬はひらめいた。

「才人、この工具は技術者の大事な武器同様の代物だ」

試しに、持っていたドライバーを才人に渡す。

「今お前は俺の大事な武器を持っている。そうだな？」

「あ…うん」

その時だった。突然才人の左手にあるルーンが光りだした。

「おお！ガンダールヴが発動した！」

「…やはりな。どうやら、その能力は本人が持っている物を武器と認識すれば発動するようだな」

「え？どうして」

「才人、武器って言ってもその種類は多種多様だ。もしその能力が全部に通用するのなら、形状が武器の形をしていなくても構わない。むしろ剣や槍などと限定すると あらゆる とは言えない」

「なーる程、使おうと思えば石ころでも武器になるからな」

才人はそう言って納得した。

「なー相棒に旦那、それ以外の武器ってなにがあるんだい？」

同じ武器だからか、才人のデルフリンガーが聞いてきた。

「んー、他の武器だとブーメランかな？投げる武器なんだけど、弧を描くように相手に向かって飛んでいくから意外と便利かな？外れでも手元に戻ってくるし」

「古い物なら鎖鎌くさりがまなんてのもあるな」

才人と冬馬は次々と知っている武器の名前を言っていく。

「ほー、あの 破壊の杖 も変わっていたけど、色々な武器があるもんだね」

カタカタと震えながらデルフは聞いている。

「 破壊の杖 ？」

「こつちの世界へ流れ着いたロケットランチャーの事ですよ。何でも30年くらい前に一人の兵士が持っていた武器だとか」

デルフの口（？）から出た奇妙な単語を才人が補足して説明してくれた。

「…30年前か、ベトナム戦争の頃辺りだな。で、今その兵士はどうしている？」

「すでに亡くなったそうです」

「…そうか」

少し落胆するが、良い情報が手に入った。

これで冬馬や才人、今は亡き佐々木の三人以外にもこの世界にやって来た人間や、兵器がある可能性が出てきた。

なお、今の会話中にハングライダー制作の手が止まる事はなかった。冬馬は別として、才人に関してはガンダールヴによる能力の影響が大きい。

しばらくして、シエスタが夜食とお茶を持ってきてくれたので、一時小休止する事にした。

「はい、どうぞ」

カップにお茶を注いでくれて冬馬が受けとる。

「おお！これは緑茶だな」

「ひいお祖父さんがよく好んで飲んでいたお茶です。祖国の味がするっていつも言っていました」

「たしかに、緑茶は日本の代表的な飲み物だしな。うん、うまい」

「才人さんから同郷の人だと聞きましたから、気にいって貰えて良かったです。あ、才人さん、良かったらこちらもどうぞ。シェンベイと言うお菓子です」

出てきたのは丸く平らな焼き菓子だった。

「…見た目そのままに煎餅せんべいだな」

「…だね。シエスタ、これもひいお祖父さんが？」

「はい、そうです」

シエスタが頷く。

「よく考えてみたら、村のあちこちに日本風の物があつたようだが…まさかそれも？」

「ひいお祖父さんが作ってくれました。村の暮らしが良くなるよう

につて」

村の外れに小さな川が流れているが、そこに水車小屋があるのを偶然見つけたのだ。

ほかにも井戸や風見鶏、竹を使って防風林なども所々作つてある。この分だと、探せばまだまだ出てくるかも知れない。

「あ…そうだ。才人さん、これを受け取つて下さい」
シエスタが何かを取り出して才人に手渡す。

「なんだ、ラブレターか？」

ドス！とシエスタの肘が冬馬の鳩尾みぞおちに突き刺さる。

（……ぐおお。い、今は効いたぞ）

黙つて痛みに耐える。

「そんな、才人さんの前で恥ずかしい事を言わないで下さいよ」

」

シエスタの顔が赤くなりもじもじと答える。

…どうやら今の一撃は照れ隠しのつもりらしい。

（…いつもこうなのか？）

目線だけで才人に質問する。

コクツと才人が頷いた。

（……マジかい？）

どうも普段から才人は中々にバイオレンスな日々を送っているようだ。

ちなみに、渡されたのは古びたゴーグルだった。昔、よく戦闘機乗りが好んで使っていた物にしている。

「じいさんの形見か」

「ええ、残してくれた遺品はこれだけだったんです。あと遺言もあって、『墓に書かれた文字を読めた者に竜の羽衣を譲る』と言つてました」

「…そうか、だったら」

「俺はいらん」え？」

冬馬が才人の言葉を遮つて先に断つた。

「どうしてだよ？あのゼロ戦は元々、冬馬さんのひいお祖父さんの物だろ？」

「言っちゃ悪いが、あんなロートル戦闘機の乗り方なんぞ俺は知らん。第一、すでに愛機なら持っている」

愛機とはRAGの事だ。

「お前が使え。あれも兵器だから使えるだろ？」

「あ……分かった。そう言うなら俺が貰うよ」

ゴーグルを握りしめて言葉を返す。

「良かったです。……あ、ところで私も一つ聞きたかった事があるんですけど」

「俺の交友関係とか？」

「それも気になりますが、私が気になるのはその剣なんです。お祖父さんが持ってきたカタナって剣に良く似ているんですね」

……やはり気になるのか？俺の交友関係は……。

「たしかに黒刀って珍しいですよ。銘は何なんですか？」

「おう、なんて名前なんだ？」

シエスタの質問に才人とデルフが乗っかってくる。

「ふむ、才人なら聞いた事はあるだろ」

スラリと刀を抜いて作業台の上に置いた。

「こいつの名は 斬鋼剣さんこうけん と言う。昔の名は 斬鉄剣ざんてつけん だったかな

？そいつを軍が使っている特殊鋼と隕鉄で打ち直した刀だ」

「特殊鋼と隕鉄……ですか。良く作れましたね」

「世界中探しても、これを上回る刀は存在しないだろうな。そもそも、日本の刀は古今東西の剣の歴史を見ても技術レベルにおいて不動を誇っている。……今は知らんけど」

最近だと、市販のナイフでもなかなかの切れ味がある。うーむ、時代の差か。

「ひいお祖父さんのカタナはたしか…… 妖刀・紅桜あへくさくら って名前でした」

「なに！」

妖刀・紅桜。

戦国末期に闇に消えた刀の一つで、幾人もの武将の手から手へと渡り歩き、千を超える人間の血を吸ってきた妖刀である。

「…その刀はいまどこに？」

「ひいお祖父さんがカタナを潰して包丁にしちゃいました。今でも良く切れますよ」

「「……………マジかい？」」

「はい」

……………天下の妖刀の末路が包丁とは。

「…俺たちの余生も包丁で過ごしてみるかな」

「魔法吸収&おしゃべりな包丁なんか誰が使うんだよ？」

「もちろん相棒」

「……………いや、無理」

と、まあしばらく三人（と一本）で話をした後で制作作業を再開したのだが……………。

その翌朝、つまりこの後のハングライダーお披露目会にとんでもない珍入者が飛び込んで来ようとは誰も予想しなかったのだ。

大空のキャンパス

「うわー、大きい翼だ！」

村のほうから続々と集まってくるなかで、一番乗りのアリスが歓声をあげた。

「…うわ、本当に飛ぶの？コレ」

続いて二番着はルイズである。

「昨日飛ばした紙飛行機と同じ原理で作ってあるから、ちゃんと飛ぶよ」

かなり半信半疑のルイズに才人が説明する。

「おー、すごいな。コレがハングライダーか」

その後をアルクとミリア、コルベールが興味津々に眺め、キュルケやタバサ、ギーシュとシエスタが近づいてきた。

一同が揃った所で冬馬の説明が始まった。

「さて、どうやら揃ったみたいだから説明するぞ。

このハングライダーは魔法を使わないで、風を利用して飛べる乗り物だ。

航続距離は大体2〜3kmは飛行する事が出来るな。

原理としては正面から風を受ける事で浮力を得る。で、そのまま風を受けた状態で空を滑空することが出来るのだが……まあ、これは実際に体験してもらったほうが早い」

そこで一旦言葉を止めて全員を見る。

「じゃあ、まず最初に体験してもらうのは………アリス。そして、ルイズだ」

「ええ！？」

「やったー！」

二人揃って真逆の反応をする。

「なんで私が乗らなきゃならないのよ！」

当然ルイズから反論が来た。

「決まっている。この場においても、でも未だに納得してない者だからだ。」

別の理由ならウェイトの問題だ。アリスはもとよりルイズぐらいに軽量なら簡単に飛べるからな。文句・苦情は受け付けないぞ」

「うぬぬ……」

冬馬にしっかりと言いくるめられてしまい、ワナワナと震えてしまうルイズであった。

「ハングライダーは二台作ったから1号機には俺とアリスが、2号機には才人とルイズで乗ってもらう。ちゃんとインストラクターとして同伴してやるから安心しろ」

見ると翼のほうに番号が書かれている。が、またしても反論したのはルイズだった。

「なんでバカ犬なんかと一緒になのよ！」

今度は同伴者に対する苦情のようだ。

「だと。才人、ルイズが嫌がっているようだから交換するか？」

「べつ別に嫌がってなんかいないわよ！……………だから……………なんで才人なんかと……………」

どんどん顔が赤くなっていくと共に、声も小さくなってきた。

なんの事はない。ただ才人と二人つきりになるのが恥ずかしいだけなのだ。

冬馬はそれを承知でからかっていた。良い証拠に顔が笑っている。

「そうか、ご主人様が言うんじゃしょうがない。アリスちゃん、一緒に行こうか？」

才人はしゃがんでアリスに訪ねる。

「……………うーん、良いよ」

アリスは少し考えてうなずいた。

「ええ！？……………いいや、才人！なんでご主人様を無視してその娘

と乗るのよ！」

ルイズが慌てアリスを才人から引き剥がす。

「なんでって、ルイズが先に断ったんだろ？」

「だから断ってなんかないの！」

「だ、そうです」

才人はルイズの仕草を愉しそうに見てから冬馬に返した。

「そうか。だと、アリスお前はこっちだ」

冬馬もあっさりと答えた。完全に二人で遊んでいる。

「~~~~~！！！」

ガスン！

怒りによるルイズの蹴りが才人の股間を襲った。

「はうつ！」

まさに一撃必殺の如く才人は轟沈してしまう。

「……………ルイズ、テメエ……………なんで毎回毎回、俺の切ない所を蹴るんだよ」

地に沈みながら、なんとか言い返す。

「自業自得よ！」

ルイズは声高らかに言い放つ。

「おいおい……………インストラクターを潰してどうするんだよ」

さすがの冬馬もこの事態に頭を押さえる。

そんなやり取りを、周りのギャラリィは遠い目でみるように見守っていた。

何を考えているかは想像がつく。

（（（（…なにやってんだか））））

こんな所だろう。

結局、才人が回復するまでしばらく待つ事になった。

ついでに、冬馬はハングライダー以外の物についても待つ間教える事にした。

30分後、なんとか回復した才人と、説明を終えてアリスとあやとりをしていた冬馬がそれぞれハングライダーに取り付けたベルトで体を固定させる。

「アリス、キツくないか？」

ベルトの具合をみて聞いてみた。

「大丈夫だよ」

隣を見ると案の定、才人とルイズがギヤーギヤーと騒いでいる最中だった。

「アイツらは……マギ」

マギを呼ぶとボソボソと何かを言った。

「了解」

そのまま騒いでいる二人に近くと強引にベルトに縛り着けた。

……………とまあ、そんなこんなで準備が完了する。

「じゃあ飛びかたを説明するぞ。と言っても簡単だ、このまま真っ直ぐに走ればいい。後は頃合いを見計らって蹴り出せば風を受けて飛び上がる。才人、ガンダールヴのほうはいいか？」

「問題なし」

さすがに冬馬と違い、才人は脚力の方に自信がなかった為に、両手にある物を嵌めている。

銃と同じく借りた、ナックルガードである。

拳を保護する為の防具だが、そのまま着けて使用できるので武器扱いとして発動できた。

その為に脚力が通常の数倍にはね上がっていた。

なお、現在の二人の体制はルイズにおぶさる形で才人が後ろにつき、

その体をベルトで固定している。その為にルイズの顔は完全に真っ赤だった。

頭のすぐ後ろから才人の吐息や、背中から鼓動が聴こえるルイズにしてみれば胸がドキドキしっぱなしである。

両肩から突き出ている才人の腕が、後ろから抱きつかれているようにも感じる。

冬馬のほうはそのままアリスが冬馬の腕の中に埋もれている。

「クラウン、こっちの準備は良いぞ」

無線機で冬馬たちから反対側の位置にいるクラウンに連絡をとる。

クラウンの正体については、昨日の内に全員に説明してあるからこちらも問題ない。

『待ちくたびれたよ。で、君たちが走ってきたら風を送り込めばいいんだね?』

「ああ、加減はしろよ? 飛ぶ前に吹き飛ばされては堪らんからな」

『ははは、了解』

通信を切ると二人はスタンバイ体制に入る。

「行くぞ、おもいつきり走れ!」

「分かつてる」

ぐつと足に力を込める。

「Go!」

一斉に走り出すと、一気にスピードをぐんぐん上げていく。

さすがにルイズの脚力では無理なので、足を上げてバーにしがみついている。

スピードを上げるにつれて翼の抵抗も強くなってきた。

前方にクラウンが見えてくる。

クラウンもそれを確認して魔法を発動した。

「ウインドウ・ブレス!」

ゴウ！と突風が吹き付けて来ると同士に冬馬が叫んだ。

「今だ、跳べ！」

二人が大地を蹴った瞬間だった。

フワア。

ハングライダーは風を受けて浮かび上がっていく。

すぐさま角度を調整して上昇気流に乗ると、一気に上空に達した。飛んでしまえばこっちの物だ。後は気流を捕まえて乗ってさえいれば、複雑な操作は必要ない。

降りる時が大変なのはどの航空機でも一緒だから気にしていない。

「わあ……」

腕の中でアリスが感嘆をもらす。

ちよつと朝日も落ち着き、雲もまばらな空はタルプの草原を幅広く見渡す事が出来た。

「すごいな……」

冬馬も息を飲んだ。

村に来る時に見た花畑は、草原を埋め尽くさんばかりに広がっている。

まさに草原そのものが一枚の巨大なキャンパスと化していた。

（……地球でもこれ程の物は無いんじゃないか？）

絶景……いや、壮観と言うべき光景が広がっているのを見て、冬馬は改めてここが異世界だと言う事を実感した。

「……綺麗」

才人の腕の中でルイズも呟いた。

「……そうだな」

ルイズは最初はいきなり飛んだので驚いたが、青い空と草原のキャンパスを見てそれ以上騒がなくなっている。

自分は今、空を飛んでいる。

魔法が上手くいかず、フライ も レビテーション も使えなかった私がこうして飛んでいる。

才人と一緒に空にいる。

「俺のいた世界だと、考えもしなかったな」

「え？」

ふと呟いた才人の言葉に、ルイズは思わず聞き返した。

「俺のいた世界は争いが絶えなくてさ……昔はこんな景色が一杯あったんだけど、どんどん戦場が広がっていつてほとんどが焼け野原になったんだ。まあ、その中でも俺の祖国の日本って国は戦火は免れているけどね」

「……そう」

ルイズは才人から異世界の話を何回か聞いた事があったが、この話は初めて聞いた。

「……才人、この世界は好き？」

「え？」

今度はルイズが聞いてみた。

「……なんでもない」

そう言つて前に向き直る。

『あー、お二人さん。あつーい語らいの最中に悪いんだが、ちょっといいか？』

いきなり無線から冬馬の声が響いてきた。

「わあ！びっくりした」

『才人、さっきから無線の通話スイッチが入ったままだぞ』

「……え、つて事は今の会話は……」

『全部タダ漏れだ。地上にも聴こえているな、おめでとつ』

「「ええ！？」」

二人同士に八もった絶叫が木霊した。

地上にはウェールズさん……もといクラウンが無線機を持っているか

ら、今ごろ地上では聞いていた人たちが様々な反応をしているだろう。

「あちゃー」

「……サ〜イ〜ト〜!」

「ギャー!ごめん!首を絞めるな!落ちるー!」

冬馬はふと後ろをみると、才人のハングライダーがかなりぐらついている。

「……余計なこと言っただけかな?」

「たぶん」

「落ちるなよ」

心の世界で一応手を合わせるが、幸いすぐに体制を立て直したようだ。良かった良かった。

そこへもう一度連絡をいれる。

「まあそれはともかく、二人とも街道を見てみな。どうやらお客さんらしいぞ」

『街道?……あ、本当だ』

少し前に見つけたのだが、5・6人の護衛を着けた馬車が村に向かっていった。しかも、馬車にはずいぶんと凝った細工が施してある。ただの馬車ではない。

「行ってみるか」

そう言つて機首を変えると近いて行つた。

近づくにつれて、屋根に描かれていた紋章がはっきりと確認できる。そこにあつたのは一角のある馬、おそらくはユニコーンだろう。そして水晶の杖が組み合わせてあつた。

(……はて?どっかで見たような)

どこか見覚えのある紋章に首を傾げつつ、ゆっくりと降下していく。十分に高度を下げると、少し機首を上げて制動をかけて着地する。

手早くベルトを外すとアリスを下ろしてやった。

「お疲れさん」

「あー楽しかった」

アリスはご満悦のようだ。

「うわあああああああ！」

「きゃあああああああ！」

そんな時、冬馬たちの目の前を何かがすごい勢いで横切っていった。無論その正体は分かっている。

「………つたく、アイツらは落ち着いて物腰を済ませられんのか？」

その物体は40M程進んだ所でやっと停止した。

「才人、一応着地の仕方は教えたはずだが？」

「実践は初めてだよ………」

「………死ぬかと思った」

才人とルイズ、二人そろって肩で息をしている。

ガサガサッと、茂みの方から誰かが出てきた。

現れたのはブラウンの髪をした女剣士だった。

「いったい何が………」

どうやら今の着地を見て様子を見に来たのだろう。

「よう、お嬢さん。何か用か？」

冬馬はアリスを背に隠し、女剣士に向き直る。

足の運びから、かなりの手練れだと瞬時に見抜いたのだ。

「貴様、何者だ？」

「人に名を訪ねる時は自分から言うもんだぜ？」

険しい目で見てくる女剣士にさらっと返す。

「………私の名はアニエス。トリスタニア軍銃士隊の隊長をしている」

「神楽冬馬。訳あって一昨日アルビオンから渡ってきた」

アニエスと名乗る女剣士が答えたので、冬馬もそれに応えた。

「では報告にあった不時着した脱出船とは……」

「俺たちのだな」

「あー！アニエスさん！なんでここに？」……………なんだ知り合い
か？」

いきなり冬馬の言葉を遮って才人が口を挟む。

「才人！それにルイズ殿まで！？何故ここに？」

「俺たちは、まあ……………色々あつて。アニエスさんこそなんで？」

「墜落してきた船の調査と……………護衛だ」

護衛とは先程の馬車の事だろう。

「え？…まさか、姫さまがここに」

アニエスは黙って頷く。

ここへ来て、冬馬は馬車に描かれた紋章がなんであるか思い出した。

「ウェールズ宛の捺印か……………」

「なに？」

アニエスは冬馬の呟きを聞き逃さずに反応した。

「なぜアンリエッタ様から、ウェールズ皇太子へ宛てた手紙の事を
知っている？」

「そりゃ封筒を見たからな、中身は知らん。それより上から見た馬
車は嬢さん方のだろ？紋章と言葉から察するに、ウェールズの彼女
であるアンリエッタが乗っている。違うか？」

「……………くっ、正解だ。あと、お嬢さんは止める」

アニエスは苦虫を噛んだように顔をしかめる。

「やっぱり、アンリエッタ様が来ているのですね」

ルイズもアニエスに近づくと、また茂みから一人出てきた。こちら
はルイズと歳が近そうな少女だった。

もつともスタイルは雲泥の差だが。

「姫さま！？」

「アンリエッタ様！？」

才人とルイズが同時に驚いた。

そう、現れたのはアンリエッタ王女だった。

来訪者

俺はここ最近、ずいぶんと様々な人間と知り合ってきたと思う。

いや、別に前の世界でも顔と名前なら世界クラスで知れ渡っているのは自覚していた。なにせ前職が前職だったし。

しかし、この短期間に国の主要人物と二人も知り合うとは考えもしなかった。

………簡潔に言えば、今俺はアニエスに剣を突きつけられて尋問されている。

顔は良いし、強気な性格もなかなか好みなんだが、何故こうなったのか少し説明しよう。

いきなり顔を出した少女に才人、ルイズ、アニエス、アリス………

……まあ、冬馬以外の全員が驚いた。

もちろん冬馬だけ平気な理由は気がついていたのである。

「……あの、今の話は本当ですか？」

アンリエッタと呼ばれた少女は冬馬に恐る恐る聞いてきた。

「話？ああ、墜落の件か。………ふむふむ、そうか君がアンリエッタか」

冬馬はまじまじとアンリエッタの顔を見て納得する。

「アンリエッタ様！危険ですので馬車から出ぬようにと………」
すぐにアニエスが咎め立てる。

「ごめんなさいアニエス。でも、話が聞こえてきたものだから。それより、なんで私の事をご存知なのですか？」

「アルビオンでウェールズから君の事は聞いていた。手紙の差出人は君だろ？」

彼女の名前にすぐに思い立ったのは、脱出する前にクラウン（ウェールズ）から聞かされたからだ。

「ウェールズ様をご存じなのですか！？今どこにいますか？無事にこちらに来ているのですか？」

次から次へと質問の雨を飛ばしてくるアンリエッタに、やんわりと制止する。

「…アイツなら今ここに来てるよ。脱出戦の時に一緒に連れ出したからな」

「良かった…」

ホツと安堵の息を漏らしてこちらを見た。

だが、こちらは安堵出来なかった。

カチャリ。

「…で、これは何の真似だ？」

首元に寄せられた剣先を差しつつアニエスを睨む。

「アニエス！…なにを？」

「すみませんアンリエッタ様、この者にどうしても聞きたい事柄がございます。で、だ……ウェールズ様の件は置いといて貴様に聞きたい事がある」

「なんだよ？」

才人にアンリエッタをクラウンの所へ案内するよう手で指示すると、心配そうに見ながらアンリエッタを連れていった。

「アニエス、事情はどうあれ手荒な事はしてはなりませんよ」

「分かってます」

アニエスは了解の返事を返すが、目は相当マジである。

下手に動いたら頸動脈から殺られるな。

才人たちが遠ざかったの確認してアニエスに続きを促す。

当然の事ながらアリスも才人と一緒に連れて行ってもらった。

「…冬馬」

アリスが心配そうにこちらを見る。

「心配いらん。質問に答えるだけだ」

冬馬は目線だけアリスに向けて答えてやった。

とは言え……質問に答えるかは内容にもよるが。

「…で、人払いしてやったんだ。聞きたい事はなんだ？」

あえて剣の事は置いといて質問に集中した。いざという時には剣を叩き折ってでも抜け出してやるつもりだ。

どんな状況であれ、この程度で対処も出来ないでいるようでは生き残る事など不可能だからな。

「ふん。アルビオンから脱出する時に何やら奇妙な兵器を使ったそうだな？」

「奇妙な兵器？どれの事を言ってる」

兵器と一言で言っても、城の爆破から脱出船の補助動力と、ワルド戦も含めて色々と使用している。

この世界にはオーバーテクノロジーな代物だから、質問内容としては妥当な選択だ。

「先に言つとく、全部は答えられないぞ。理解するにはかなり特殊な知能と適応力が必要だからな」

「必要ない。ただ、それをこのトリスタニアに持ち込んだのが知りたいだけだ」

アリエスの質問の意味が分かった。

アルビオンで使用した兵器を下手に持ち込まれるのは、かなりのリスクが発生してしまう。

レコン・キスタの工作員として潜入を許してしまえば大惨事を引き起こす可能性もある。

早い話がこれは検閲だ。

だったらこちらの回答は決まっている。

「大多数の兵器なら持ち込んでいるし、使用も可能だ。だが、俺たちは向こう側^{レコン・キスタ}の人間ではない。必要以外には使用する意志もない。これで十分か？」

明確に、かつ適切に返答する。

「なら、こちらでそれらの兵器は接收させてもらう」

「不可能だな、第一扱い方が分かるのか？俺の使う兵器は、ただそこら辺の倉庫に埃を被らせられる代物ではないぞ。時間経過で起動するタイプもある。………ここまで言えば何が言いたいか理解できるな？」

「……うつ」

アニエスの言葉が詰まる。

冬馬の言った意味とはすなわち接收し、王都へ持ち込んだ後に、兵器が、事故や誤って起動してしまっても、その結果どうなっても、対策の取れる事態では済まされないと言う事だ。

「……脅しのつもりか？」

「だと良いがな」

アニエスと冬馬の視線が交差する。

冬馬の目は間違いなく本気の目だった。

トリスタニアにアルクたちのような研究者や、コルベールのような技術者がいるとは限らない。

それ故に取り返しのつかない事だって十分に考えられるのだ。

「……そうか、なら後程王都に来てもらう事にしよう」

「……仕方ないな」

アニエスはそう言って剣を引く。まあ、不法入国の割りには妥当な処置だ

なんとか解放されると、クラウンたちのいる方向をしてみる。そこに広がっている光景は、まさに青春一色だった。

「ウェールズ様……よくぞ」無事で」

「ああ…君にまた会えなんて夢のようだ」

クラウンとアンリエッタは草原で熱い抱擁を交わしていた。

「夢でも構いません。王国が滅ぼされたと聞かされた時には、もう会えぬのでは無いかと覚悟した事もございました。……………本当に良かった」

クラウンの胸の中で涙を流すアンリエッタを周りの全員が感慨深く見守っている。中にはもらい涙を溜めている者もいた。

「私の友人たちが助けてくれなければ、今頃は城の瓦礫に埋もれて死んでいただろう。本当にありがとう」

クラウンは改めてアルクたちを見る。

「とんでもない、友を救うのは当然の事です。それに私たち家族も彼に救われましたから」

「…彼とは？」

「私の娘の使い魔をしている異国の戦士です。城から脱出する時にも尽力してくれました」

アルクはそう言ってアンリエッタに説明した。

「…そう、ルイズの使い魔さんみたいな人がそちらにも居らしたのですね。その人は今どこに？是非ともお礼が言いたいわ」

「貴女の後ろにいますよ」

「え？」

アンリエッタは後ろに振り向くと、さっきアニエスと一緒にいた青年が立っていた。その隣にはアニエスもいる。

「よう。自己紹介が遅れたな、神楽冬馬だ。よろしく」

「それじゃあ貴方が……」

「まあ、半分は成り行きだったかな」

冬馬が肩をすくめて答える。

「そうでしたか。先程はお礼もせずに申し訳ありませんでした。改めてお礼を言わせて貰えませんか？」

アンリエッタが深々と礼をしようとした所で冬馬は止めた。

「礼なんざ要らない。さっきも言ったように、成り行きだった物を

お礼なんざ必要ないって」

手をブンブンと横に振ってキツパリ断った。

「第一、礼なんかよりこの国はこれから忙しくなるんだろうからな。そんな暇は無いんじゃないか？」

冬馬が脱出戦の時にかなりの被害を与えた筈だが、時間さえあればトリスタニアへの侵攻してくるのは間違いない。

それまでに体制を整える必要がある。

「あ…それはそうですが、でもだからと言ってこの国に侵攻するとは限りません」

アンリエッタは毅然として言い切る。

それを見て冬馬は額を押さえた。

(……この能天氣が王女？考えが甘過ぎる)

「さてさて、何を根拠にいえるんだ？ウェールズがここに居る、トリスタニアは小国、航空勢力はレコン・キスタの方が上、襲ってこない事がおかしい」

「…う」

冬馬の指摘にアンリエッタが言葉を詰まらせる。

「…冬馬くん、今はその話は置いておこう。それよりは今日のイベントの続きをしないか？ゲストも来てくれたしさ」

ウェールズがそんなアンリエッタをフォローするように冬馬に進めた。

「……………それもそうだな。アニエス、他の連中も呼んでこいよ、面白いモノを見せてやる」

「私の名を気安く呼ぶな！」

素早く反応するアニエスを見て、冬馬の顔に笑みが浮かんだ。

「ハイハイ。じゃあアニエス 大明神隊長 様、お供の方々をお呼び下さいますよう候」

「…なんだそれは？」

「…俺たちの国の時代劇のセリフですよ」

聞き慣れない言葉使いに才人がフォローする。

「分かりにくかった様だから言い直すか。永久不滅のマドモワゼル、是非ともお供を連れて来ては下さいませんか？」

ピキ。

アニエスの頭の中で何かが切れる音がした。
こちらは意味が伝わったらしい。

「……………斬る」

アニエスの手が剣の柄に触れる。

「だあれえがあ、永久不滅の独身かああ！」

猛ダツシュで間合いを詰めて一閃を振るった。

「うを！危ねえって」

冬馬は半ば反射的に避けた。

「……………もしかして彼氏がいたりする？」

だとしたら今のは失言である。

「私が、色恋沙汰に興味があると思うか？」

鋭い眼光が冬馬を見る。完全に本気の日だった。

「なら図星か……………勿体ない。なかなか可愛いのに」

その言葉にピタツとアニエスの動きが止まる。

（……………お？反応アリ）

「……………やはり斬る。そこに直れ！」

もう一回剣を振り下ろして冬馬に襲いかかってくるが、冬馬はのりくらしりと避けていく。

「これも図星か。顔が真っ赤だぞ？」

「うるさい！うるさい！大人しく斬られろ！」

アニエスがブンブン振るうが、ヒョイヒョイと冬馬に避けられてしまふ。

「そうムキになるな。ちゃんと自覚してるだけまだマシだと思うがな……………とっ！」

最後の一撃を白刃取りで受けるとそのまま剣を奪い取った。

「…ちっ！」

さすがに剣を取られては斬り捨てられないので舌打ちする。

その後、他の人たちもアニメスに呼ばれてイベントの続きが行われた。

回収してきたハングライダーで、シエスタやキュルケたちに飛行体験をもらい（インストラクターは引き続き才人、冬馬が担当した）、いよいよメインイベントとなった。

「オーライ、オーライ、よし降ろせ」

草原に小屋から引つ張り出した 竜の羽衣 もとい、ゼロ戦を降ろしていく。

「便利だな……あのゴーレム」

その作業をしているのは機体の姿に戻ったRAGだった。^{マギ}

昨日冬馬が言っていた運搬のアテとはこの事である。

ギーシュはそんな光景を感じたように見えていた。

魔法を使わず、見た事もない金属で覆われた巨大なゴーレムなど初めて見たのだから当然の事ではある。

ゼロ戦の機体を傷をつけないようにそーっと運ぶなど、とても自分のゴーレムであるワレキューレには真似できない。

ちなみに操作は冬馬が外からインカムで指示を出し、コクピットでアリスがRAGを操縦している。と言っても、ほとんどオートで動いているからアリスの操作は簡単に手足を動かす程度であったが。それでも、これだけすんなりと動かせるのは普段からRAGのAIであるマギによる指導と、アリス自身の才覚が大きい。

……なんつーか、末恐ろしい娘である。

「これは…？」

アンリエッタはこの目の前にある不思議な乗り物をウェールズに尋ねてみた。

「冬馬くんの話だと、さっきのハングライダーと同じように空を飛ぶ乗り物らしいよ」

「飛ぶって……生き物には見えませんが」

「うーん、とりあえず見てみよう」

草原に降ろされたゼロ戦を冬馬が点検、操作確認をしているが特に問題はなさそうだ。

パイロットには才人が乗る事になっていて、冬馬はRAGで追走する形で飛ぶ手筈になっている。

「才人、準備はいいか？」

「OK」

才人がゴーグルを着けてスタンバイする。

「いくぞ！」

冬馬がクラंकを回し、頃合いをみて才人がエンジンに火を入れる。

ババババババババババ！

草原に数十年ぶりに息を吹き返したゼロ戦のエンジン音が響き渡る。歯止めを外すと静かに前進を始めた。

「…動いた」

才人が操縦管を握りながらスロットルを上げていく。

「才人、数十年ぶりのフライトだ。飛ぶ前にコケるんじゃないぞ！」

冬馬はゼロ戦から離れ、RAGのコクピットでアリスと交代した。

「わかってる！」

徐々にスピードを上げていき、十分な加速が加わると一気に操縦管を引き上げた。

「飛べえー！」

車輪が大地を離れ、ゼロ戦が空へと舞い上がって行った。

来訪者（後書き）

えー、少しの間本編から話しが飛びます。ご命令………じゃなかった、ご希望、要望や願望、妄想、野望、渴望もありなので良かったらどうぞお寄せ下さい。

青春謳歌（前書き）

はい、ごめんなさい。

最近色々と仕事が忙しく、更新のこの字も忘れていました。

多分まだ暫く更新が遅くなると思います。

読者の皆さま方、何とぞ見捨てないで……もとい、応援のほどを宜しくお願いします。

大和

青春謳歌

かつて、人は空に憧れて空を目指した。

ただ高く、ただ遠く、ただ雲の彼方へ目指した。

その目標は、何時の日か戦う為に飛ぶ事へと変わっていく事になった。

それでも人は空を目指し、より優れた翼を作り続けた。

そして今、その翼は遠く異世界の空を飛んでいる。

自由と危険の隣り合わせの空を悠々と駆け抜けている。

「……スゲエ」

才人はこう見えて結構高い所が好きである。

眼下に広がるのはハングライダーの時よりも遠く見渡せるハルゲニアの大地が広がっている。

「本当に凄いわね」

「そうそう………ってルイズ!？」

才人がバツと後ろを振り向くと、いつから乗り込んだのかルイズが座っていた。

「…いつの間に」

「ご主人様を出し抜こうなんて百年早いわ」

ルイズは腕を組んで無い胸をはる。

『どうした才人、なんかあったか？』

通信機から冬馬の声が聞こえてきた。

「実は……………ルイズが乗り込んでるんですよ」

『……………はあ？』

そりゃこつちが言いたいセリフである。

『まあいいや、4時の方向を見てみな』

「なに言ってるの？時間に方向なんて無いじゃない」

言った意味がわからないルイズに才人が説明する。

「ルイズ、今の意味は時間の事じゃなくて方向を表してるんだよ。

自分の向いている方を正面に見て、そこから時計回りに向きを示すやり方なんだ」

「へーそうなんだ……………あ！あの時のゴーレムだわ」

才人に言われた通りに向くと、下の方に冬馬のRAGが追走するよううに迫って来ていた。

軽く手を振って才人たちに人差し指をクルクル回して合図する。

周囲を旋回する　と言っているらしい。

「了解」

スロットルを横に倒し、機体を円を描くように旋回させた。

「わースゴイスゴイ！」

地上ではアルク、アリスが親子揃ってゼロ戦の飛行を見てはしゃいでいた。

「凄いな、彼らの国の技術力は。我々の遙か先を、楽々と突き進んでいる」

ウェールズはその光景を感嘆とした目で眺める。

「……………冬馬くん曰く、万能だけど不完全　な技術だそうです」
アルクはウェールズに向き直り、以前冬馬が話した事を伝えた。

「なんだいそれは？」

「科学技術の発端は我々の使う 錬金 と同様の物だと聞きました。それを他の人に分かりやすく、使いやすい方法に変化させた技術らしいのですが、それ故に万能性を誇りながらも未だに完成されてない……との事です」

「そうか…まるで我々の魔法のようだな。始祖ブリミルから始まった我々の魔法も未だに完成された魔法は存在しない……………優れた科学もまた然りか」

ウェールズは何かに納得するようにうなずいた。

「それでも、彼らの技術は私たちの技術を軽々と凌駕していますわ」
アンリエッタは目の前の光景にただ圧倒されている。

ルイズからアルビオンでの報告を聞いていたが、この光景を見ていたら確かに今回の結果は当然の事だとわかった。

「そうですね。しかし、それが諸刃の刃とならなければ良いのですが…………」

アルクの心配も最もだった。

「……サイトさん」

「……サイトの奴」

「……ダーリン」

シエスタ、ギーシュ、キュルケの三人は上空を飛行中の二機を見上げて一斉に愚痴った。

「……いいな…………」

ちなみにタバサと一緒に飛ぼうとしているシルフィードを必死に宥めていた。

「……うーむ、あんな物が本当に飛ぶとは…………バカにしたのは不味かったかな」

昨日の事を思いだしギーシュが顔をしかめる。

「でも、ダーリンって本当に何でも出来るのね。どっかの誰かさんとは大違い」

無論その誰かとは、才人のご主人のルイズだが、生憎と今は空の上にいるので聞こえてはいない。

「……サイトさんのバカ。ミス・ヴァリエールじゃ無くて私を乗せてくれても良いのに」

シエスタはシエスタで人差し指をいじいじと動かして膨れている。

そんな三人を知って知らずか、二機は旋回を終えて少し離れた所に機体を着陸させた。

「ふー、疲れた」

風防を開けてサイトとルイズが降りて来ると三人は直ぐ様二人に詰め寄った。

「サイト！次は僕の番だ」

「ダーリン、ルイズだけじゃ無くて私も乗せて」

「さ、サイトさん！今度は、私の、番です！」

シエスタだけ少し出遅れてしまったらしく肩息をつきながらサイトに詰め寄る。

そんな光景を冬馬は少し離れて眺めていた。

RAGは既に人型に戻りウェールズやコルベールらと何やら話している。どうもここ最近はそうやって一人(?)フラフラと歩いては何かを学習しているようだ。

やはり以前にフェーリテス家脱出戦の時に、秘蔵の魔法研究の書物を読み込ませたのが原因らしい。だんだんと人間くさくなっている気がする。

「冬馬さん！」

才人が泣きつくように冬馬を呼ぶが、面倒くさいのであっさり見捨てる事にした。

「ま、がんばれ」

「そんな〜（ー）」

助け船を断わられて右往左往とルイズを加えた四人の相手をしてい

た。

「青春だね」

冬馬は他人事のようにその光景を眺めていた。

結局才人は三人とも順番に乗せる事になり、その上何故かキュルケの時にはタバサとシルフィードが追走して飛行していたので、操縦に相当気を使わなくてはならなかった。

おかげで全部終わった頃には才人はへロへロになっていた。

「ゴクローさん」

そんな才人を冬馬は面白そうに見て、冷たい水を差し出した。

「……………ども」

力なく受け取ると一気に飲み干す。

「……………っ……………ぷはぁ生き返った」

才人はようやく一息ついたようで地面にへたりこんだ。

冬馬も才人の隣に腰かける。

「あゝ疲れた。でもコレを後で学園まで飛ばさなきゃならないんだよな……………」

才人はこのゼロ戦を学園に持ち帰るつもりでいた。幸い燃料も十分にあるし直接乗って帰った方が色々と手間が省けた。

「で？燃料の方は当てはあるのか」

「それならコルベール先生がガソリンを作ってくれたんだ。だから今のところは問題ないと思う」

「……………ガソリン？才人が教えたのか」

「まさか！先生が自分で作ったんだよ」

「ほう……………自分でねえ」

冬馬は感心したようにコルベールを見た。

コルベールもこちらに気付いたらしく近寄ってきた。

更にその後ろからウェールズ、アルク、人型に戻ったマギが続いて

やって来た。

「なんだなんだ？そろそろとやって来てどうした？」

「いやなに、これからの事を彼らと相談していた所でね」

アルクが冬馬の疑問に答えた。

「ああ…。それで結論は出たのか？」

「いや、その前に冬馬くんの意見を聞きたいと思ってね。……で、率直に聞くけどアルビ… レコン・キスタ はこれからどう動くと思う？」

「……… 本当に率直に聞くな。俺も奴らの全容は知らんから確かな事は言えないが、少なくともあと一週間ぐらいは動かないと思うがね」

この言葉に今度はウエールズが聞いてきた。

「と、言うത്？」

「城を脱出する時に連中の兵力の一部を削ってやっただろ？恐らく今の奴らはその兵力の補充や後始末でてんでこ舞いの筈だ。

その間にトリスタニア侵攻の体制を整えるだろうが、その期間を考えても一週間が妥当な所だ」

「……… なるほど」

ウエールズとアルク、コルベールの三人は頷く。

「… 実際にはそれよりも侵攻は早いだろうな」

冬馬のその言葉にウエールズとアルクが耳を疑った。

「な、何故だい？」

「… 今の話はあくまであの時、城に集結していたのが奴らの兵力全てだったらの場合だ。

間者を送り込んだ事を考えると、まだ別の兵力が温存してあったとしても不思議じゃない。

だとしたら後始末に適当な区切りがついたら即、仕掛けて来るぞ」

先程言った自分の意見を冬馬は取って返す様に言い切った。

「もう一つ言えば侵攻する理由にウエールズ、お前の名を利用するだろう。ワールドが生きている以上、お前の生存を奴らは知っている

のは間違いない」

「……………」

冬馬の指摘にウェールズとアルクは黙ってしまった。

「まあまあ二人とも、まだ予想であって違う事もあり得る訳ですし」
「コルベールが空気を読んでフォローしてくれた。」

「コルベールの言う通りだ、こっちの手数が少ない以上は相手の出方を待つのが得策だろう。慌てて事を構える必要はない」

「……それもそうですね。事を急いで仕損じる　とも言いますし、どつしりと構えてましょう」

「そう……だな」

ウェールズは少し納得いかなかったようだが、それ以上の良案もなかった。なのでその方針で行く事に決めた。

「ではお前の身柄を拘束し、王都まで連行する」

「……………　ちよつと待て」

冬馬はアニエスへ向けて両腕を突き出す。

何故両腕なのかと言うと、ロープで罪人の様に拘束されていたからだ。

「な・ん・で、城に行くのに拘束されなきゃならねえんだ！俺は犯罪者か！？」

「人相が犯罪者だ」

「……………　蹴り飛ばすぞ（怒）」

アニエスと冬馬がバチバチと火花を散らせながら睨み合つ。

何故こうなったのか、話は30分前に遡る。

とりあえず今の方針が決まった所でアンリエッタの元に戻ったウェールズだったが、そこで突然の申し出があった。

「えっ、トリスタニアに來ないかだって？」

「はい。こうして無事に亡命を果たしたわけですし、城の中なら安全ですわ」

アンリエッタの申し出は確かにこちらとしては有り難かった。一つの出来事を除けばの話ではあるが。

「ウェールズが行くのは止めた方が良いでしょう」

案の定口を挟んだのは冬馬だった。

「何故です？このような所よりかは警備も万全ですし、何より優秀なメイジも沢山あります……」

「その 優秀なメイジ の裏切りに最後まで気付かなかったおマヌケ警備が安全とは言い難いかな」

「うっ……」

その言葉にアンリエッタも言葉が詰まる。

アンリエッタとて親衛隊の隊長だったワルドの裏切りを聞いた後、マザリー二枢機卿に頼んで内通者の洗い出しを行ったが、既に何名かの貴族が行方を眩ましていて所在が掴めないでいた。

まだ何人反逆者が残っているか分からない伏魔殿と化した城にウェールズを行かせる危険性を冬馬は危惧しているのだ。

それでもアンリエッタは一度は絶望視した恋人に再会出来た幸せを、埋伏している反逆者を理由に手放したくはなかった。

「それは私が必ずなんとかします！ですからウェールズ様、どうか私と来て下さい！もう……あんな思いは嫌です」

アンリエッタの目に涙が溢れてきた。ウェールズの手を握っている手は目に見える程に震えていた。

それでも冬馬は冷たく言い放つ。

「止めとけ、今城へ行ってもデメリットしか無い」

「……………今？」

ウェールズは冬馬の一言に疑問を覚えた。

「何故…今はダメなんだ？」

冬馬は呆れたようにため息を吐き、頭を掻いた。

「お前は何の為に ^{クラウン}道化 を名乗ったんだ？いくら奴らがお前が生きている事を知っていても、所在までは掴んでない。だったらそれを利用しない手は無いだろう？」

「……そうか！では冬馬くんは……」

「どのみち現状を見るに城に行くのは変わらない。なら、ベストなタイミングで行くのが最良の方法だろ？その時に残ったネズミ共をまとめて駆除すればいい」

冬馬の意図がわかり、ウェールズも納得した。

「これが手数を使い、増やすやり方だ。状況もイベントも利用出来るか否かココ次第さ」

冬馬は自分の頭をトントンと人差し指で叩いた。

「わかった、アンリエッタ私はまだ君と一緒にいる訳にはいかないけど絶対に会いに行く。…だから、待っていてくれるかい？」

「………はい。私は待ってます。ですから、どうかご無事で……」

アンリエッタはウェールズの胸に飛び込んだ。

「…アンリエッタ」

「…ウェールズ様」

二人は別れを惜しむかのように熱い抱擁を交わす。

「……………いつもこうなのか？」

完全に二人だけの世界に入ってしまった彼らから視線を外し、いつしか集まって来ていた全員を見て冬馬は聞いてみた。

……………が。

「ああ…姫さま」

「やっぱり、燃える恋は良いわね」

「ぽー」

「アンリエッタさま……」

順番からすればルイズ、キュルケ、シエスタ、アニエスと続く女性陣面々が顔を赤らめながら　ぽー　っとしていた。

「……………をい」

完全、完璧に冬馬は呆れていた。

この状態は以前アルク夫妻の思い出話を聞いた後の脱力感に良く似ていた。

（……………なんでこう　女　と言う連中はこの手の話が好きなんだ？）
冬馬にはまったく理解出来なかった。

「そろそろ離れたらどうだ？ ……話がちつとも先に進まん」
強引に二人を引き剥がすとアンリエッタに向き合った。

それを見ていた女性陣から猛反発が返ってきた。が、冬馬は無視して話を続ける。

「さて話の続きだ……………おい」

「…ウェールズ様」

アンリエッタはまだウェールズの方を見ている。

冬馬はそれを見て、ウェールズに手を軽く払う様に振って　少し離れてる　と合図した。だが、ウェールズもアンリエッタを見ていて合図に気づいていなかった。

……………（怒）。

さすがに頭にきたので、殺気のこもった眼光をぶつけるとやっと気が付いたらしくウェールズが離れていった。

「……………　つたく、どいつもコイツも。……………で、さっきの続きだが、悪いが俺を城へ連れて行ってもらえないか？　レコン・キスタ　に　関しての情報提供がある」

「……………　情報提供…ですか？　別に構いませんが」

ウェールズを引き剥がされふて腐れた顔をするアンリエッタだったが、すんなりと了承してくれた。

「助かる」

冬馬も素直に礼を言った。

「では夕暮れ前には出発しますので遅れる事の無きようお願いします」

プイツと目を背けると馬車の方に戻って行ってしまった。

「…怒らせたかね？」

空を見ると直に夕暮れになる。

つまり、今すぐ用意しないと置いて行かれる事になる。

「まあ…そうでしょうね」

声をかけて来たのはマギだった。手には冬馬の クラウン・クロス が握られていた。

「一緒に来る気か？」

「お忘れですか？貴方が私のマスターですよ。それに私が一緒なら何かと便利だと思いますが」

「…確かに」

と、言う訳で強引といきなりではあるが、そのままアンリエッタ、アニエスらと共に冬馬、マギ、アリスの三人は王都へ向かう事になったのだ。

しかし怒っていたのはアンリエッタだけではなかったようで、出発した後でアニエスに犯罪者の様に拘束されてしまったと言う訳だ。

まさに 口は災いの元 である。お粗末さまでした。

青春謳歌（後書き）

えー、ここで本作に登場するオリジナル技術について説明します。

クロス・ドライブ

テラノニウム と呼ばれる鉱石を使用した、新型のジェネレータ。一つだけでは少量のエネルギーしか生成できないが、同種の鉱石や触媒を用いる事で莫大なエネルギーを発生させる事が出来る。

それにより、従来では実現不可能な技術も使用する事が可能となった。

例として、 G R F（重力緩和フィールド） に用いる斥力を発生させたり、出力によっては空間を歪めて短距離間のワープも可能になる。

更には触媒さえあれば鉱石の再復元、再使用も出来るので、半永久的にエネルギーを作りだせる奇跡のような鉱石である。

なお、触媒に用いる主な物質は地中に含まれるシリコン等になる。

クラウン・クロス

本作の主人公が自作した、携帯型ウェポン・ケースの名称。

小型の クロスドライブ を積んでおり、様々な機能と高い収納力を持つ。

その為に本体が非常に重くなっているので、上記に説明したG R F システムを使用して運用する。

また収納にワイプ機能を応用した亜空間フィールドを内部に発生させ、その中に収める方式にしているのである程度大型銃器を収納させる事が可能。

内容量に関しては本人も完全に把握しておらず、軍隊クラスの相手と互角に渡り合える程の武器が治められているらしいと言う噂もある。

機能についての説明。

G R F

これについては上記で説明した通り。一定範囲に反重力フィールドを発生させて、対象の重量をゼロに近くさせる機能。

これを応用したのが R A G である。各関節部にフィールドを発生させる事により、駆動時の負荷を大幅に減少させる事ができる。

ディメンション

D・シールド

対衝撃用の防御機能である。

G R F をケースの前面に展開して、衝撃を緩和、相殺して無力化させる特殊シールドを張る。

主に高高度からの落下時や衝突時にクッションとして使用している。攻撃として用いる場合、本体を固定した状態で体当たりすれば、対象を弾き飛ばす事もできる。

リフレクション

R・カウンター

D・シールド同様に使用する特殊防御機能。

こちらは展開されたシールドに触れた対象は、条件無視で跳ね返される。

D・シールドと違い、対象の運動エネルギーを一切損わずに跳ね返すので、威力が強ければ強い程効果も跳ね上がる。

また、短時間であればエネルギーを跳ね返さずに留めておく事が可能で、その場合跳ね返しの威力を引き上げて返す事ができる。ただ

し、その分の反動はこちらにも返ってくるので注意が必要。

ナノマシン

実際に研究されている、超小型の精密機械の名称。本作中では、主人公の肉体強化に使用されている。

具体的には筋力の増強、治癒能力の向上、動体視力と動体反射神経の強化に使われている。

まだ民間には普及しておらず、軍事利用にのみ用いられている。これは クロスドライブ も同様に使用は制限されている。

理由として民間用の転用が困難である事と、技術に対する未完全な制御の問題がある為に相当のリスクが生じる事が主な原因である。

その為に研究、実験には国では無く民間（軍事関連も扱う）企業に頼っている。

中には非合法的な研究をしている企業もあり、各企業間での競争は研究が進むに連れて激化の一途をたどっている。果てには国家を巻き込んだ抗争に発展した事もあり、次世代型の機動兵器にも着手し始めた。

ラウンド・アーク・ギア

RAG

各企業が開発し、国家間で運用が開始された人型機動兵器の名称。

クロスドライブ を使用した兵器として、戦場の在り方を一変させた革命的な機動兵器である。

様々なパーツを組み替える事により、あらゆる環境での運用が可能になった。

名称にある アーク とは、開発元が民間企業のアーク・コーポレーションと言う事でその名前の一部を取った物だが、開発してすぐ

に他企業に吸収合併されたので今は存在しない。その高い汎用性が買われ、現在では軍だけで無く傭兵の間にも幅広く流通している。

RAG乗りの傭兵を アーサー と呼称する。

カスタマイズの仕方次第では同じ機体でも能力が異なるので、強い機体には褒賞金が懸けられる事もある。

また、これも非合法ながら闘技場アリーナが行われており、参加しているアーサー達は ギルド を組んで出場している。

と、まあこんな所です。

この後も色々出しますので、また説明させていただきます。

似た者同士

「おい、いい加減にコレを外せ」

「断る」

「ならコレを解け」

「断る」

「緊縛プレイに興味は？」

「無い！」

「なら外せ」

「断る！」

王都への道中アニエスと冬馬の不毛な言い争いは絶える事はなかった。

ちなみにまだ冬馬の両腕は縛られたままだ。

「そんなにツンツンした態度じゃ男が寄って来んぞ」

「余計なお世話だ！」

「自覚してるのか」

「うるさい！」

「……………男日照り（ボソッ）」
シュッ！

「その良く回る口を閉じてやろうか……？」

殺気のこもった眼で冬馬に剣を突きつける。

だが冬馬はそれに動じず、少し下がって構える。

「あいにくと俺は口以上に下半身も良く動くぜ。特に腰がな」
クイツと腰を動かす。

「……………プチ」

ア二エスの中で何かが切れる音が聞こえた。

「やめんかあ！」

冬馬を斬りつけようと剣を振るった瞬間、一瞬速かった冬馬の脚がア二エスの剣を蹴り上げた。

「……………な」

宙を舞った剣は冬馬の前に突き刺さり、両腕を縛っていたロープがハラリと落ちた。

「おいおい、顔を真っ赤にしてナニを想像してたんだ？」

笑いながら腕の具合を確かめる。

「くっ……」

ア二エスは悔しそうに剣拾った。

「……………このセクハラマン（ボソツ）」

ア二エスも負けじと言い返す。

「……あ？なんつつた」

「フン」

二人は顔を近付けて睨みあった。

「「ガルルルル」」

その光景を他の隊士たちが遠巻きに見ていた。

「隊長……」

「なんだかんだで息ぴったりよね、あの二人」

「なのであの男隊長の動きについていけてるのよ。信じられない」
「これが本当の 犬猿の仲 ってやつかしら？」

「隊長が犬で？」

「彼がお猿さん？」

「やだー！」

こそこそと盛り上がっている彼女たちを目敏く察知しアニエスの湯が飛んだ。

「そこ、私語は慎め！今は任務中だぞ」

「……はっ！」

すぐに敬礼して隊列を整える様はさすがに良く訓練されていた。

冬馬はふとアリスの方を見た。

アリスはアンリエッタと共に馬車に乗っていて女同士話に花を咲かせている。

（気のせいかな……ここ最近で随分周りが女くさくなってないかな？）

なおここで説明しておくとして現在アリスはアンリエッタと馬車に乗り、冬馬は村で借りた馬で一緒に同行している。マギはある理由で徒歩でついて来ている。

まあその理由も、ひたすら重たい クラウン・クロス をマギが背負っていたから馬に乗る事が出来なかったからだ。

「で？そのトリスタニアには明日到着するのか？」

馬の背に寝そべりながらアニエスに聞く。

「そうだ。途中の宿場街で宿を取って一泊する予定だ」

「そうか」

空を見るとすでに日が沈みかけている。

「……… どうかで俺達も宿を探すか」

本来予定になかった冬馬たちの宿など無いと思っていたの言葉だったが……。

「冬馬ー、アンリエッタお姉ちゃんが一緒に泊めても良いってー！いきなりアリスからのOKの返事をもらって、危うく馬から転落しそうになった。」

「……なに？」

あわててアリスを見る。

「交渉してみました」

アリスからVサインが返ってきた。

「あ…そう」

その手際よさに冬馬は力なく頷くしかなかった。

「しかし宜しかったのですか？」

唐突にマギが質問してきた。

「ウェールズ…ここではクラウンの方が良いですね、彼を置いて来てしまった事です」

「どうだろうな。ただ、何となくその方が良いと思ったただけだ」

「勘…ですか」

「ああ…っと、宿場街が見えてきたな」

街道の先に街の明かりが見えて来た。地球と違い小さな明かりだったが、夜も間近なこの時間帯には良い目印だった。

「ようこそいらつしゃいました。小さな宿ですが、どうかごゆっくりとお休み下さい」

宿に着くと、さっそくその主人が出迎えてくれた。

アニエスたちは馬を休ませ、アンリエッタとアリスは先に部屋へと向かった。

「すっかり俺は蚊帳の外だが………あいつ俺が自分の使い魔だって事忘れてないか？まあ、こつちとすれば都合がいいけど」

胸元のルーンを確認する。確かにあの時に刻まれたルーンがそこにあった。

「アリスー！とりあえず俺は近くの酒場に行くけど、ちゃんと宿に居るんだぞー！」

「はいー！」

奥からアリスの元気な声が返ってきた。

「…本当にご主人の自覚があるのか？」
あまりのあつさりとしたアリスの反応にばやきながら冬馬とマギは宿を後にした。

「それで、なんでお前も一緒に来るわけ？」

近くの酒場………と言うか宿の隣にある小さな酒場で何故か不自然な人物と一緒に飲む事になった。

「ふん、私はアンリエツタ様の警護が任務だ」

「だから？」

「一番怪しいお前の監視に付いて来ただけだ」

「…どこまで真面目なんだよ。あつ姉ちゃん地酒と適当なツマミを二人分ね」

一緒に来たのはアニエスだった。

冬馬はとりあえずウエイトレスをしていた娘に適当に注文するとアニエスに向き直る。

「二人分？そこに居るお前の従者の分は無いのか？」

注文した人数に疑問を覚えたアニエスは冬馬の隣に座っていたマギを見た。

「私は結構です」

マギは丁重に断わると店の外の方へと視線を向ける。

「こいつの事は気にするな。それよりも本当に姫さんを放つといいのか？」

「私の部下が付いている、問題は無いだろう」

アニエスは運ばれてきた酒を一口飲んで宿の方をチラツと見る。

「聞きたい事があって一緒に来たんだろ？」

唐突に冬馬がアニエスに聞いてくるとアニエスの酒を飲んでいた手が止まった。

「……何故そう思う」

「お前が責任感の強い人間だったのは初めて会った時に良くわかつ

た。にもかかわらず警護を部下に任せて俺達について来たのは、何か知りたい事があるからだと思ってね」

アニエスは少し驚いた表情を見せた。

「…私も初めて会った時に思ったが、お前もかなりの洞察力と判断力に優れた男のようだな。まるで幾つもの部隊を指揮している司令官のような印象を受けたぞ」

「そりゃどうも」

アニエスの意外な言葉に少し頬が緩むが悟られないようにそっと隠した。

「マスターをおだてても何も出ませんよ」

だがマギがあっさりと言い切った。

「喧しい、余計なお世話だ」

「では黙ります」

そう言つて黙り込んでしまふ。

「……このヤロ」

「……………」

冬馬はギロつと睨むがマギはポーカーフェイスでスルーする。

「……………話を戻そう。で、聞きたい事つてのはなんだ？」

「ああ……そうだな。聞きたい事と言うか、ちよつとした頼みなんだが……」

「頼み？」

「そうだ。アルビオンの事は話しには聞いていたが、お前の言う通り必ずレコン・キスタはこのトリスタニアを攻めて来るだろう」

「だろうな」

「しかし、完全な劣勢だった状況をひっくり返したお前の力があれば奴らを迎え討つ事が出来るかもしれない」

「で？」

「お前の力を貸して欲しい」

「やだ」

即答だった。

「……………なっ！？何故だ、先に危険性を訴えたのはお前だぞ！それを…」

「それは俺達にトリスタニアの軍人になって国の為に戦えって意味になるぞ。生憎だが俺は余所の国の揉め事には介入しない主義なんだ。俺が戦う理由はそんな面倒くさい物じゃない」

「…ではどんな理由だ？」

「シヨボい理由」

「……………は？」

「俺は負けず嫌いなんだ」

「だから？」

「売られたケンカは買ってやるまで」

冬馬の返答にアニエスは絶句してしまった。

「…そんな理由で？相手は国家だぞ」

「国家だろうが世界だろうが相手にするのは人間だ。それに、どうしても決着を着けなければならん奴がいるしな」

真剣な顔である人物の事を思い出す。

アルビオンで決着を着けられずに逃したメイジ、ワルドとの戦いは未だ記憶に新しい。

「…わかった、では頼み事を変えよう。その力を私達の銃士隊に幾つか貸してはくれないか？」

「…おいおい、随分と分かりやすい頼み事になったな」

「どうだ？」

「仮に力を貸すとして、俺に見返りはあるのか？慈善事業は勘弁だぞ」

「見返り…」

アニエスは腕を組んで考えた。

「名誉」

「いらん」

「称号」

「もっといらん」

「爵位」

「必要ない」

「金」

「自分で稼ぐ」

「酒」

「すでに飲んでる」

「……………女^{ボツッ}」

「（ピクッ）」

冬馬の動きが止まった。

「マスターの心拍数が上昇しています」

「五月蠅い黙れ」

アニエスはこの条件に脈有りと判断して一気に畳み掛けた。

「銃士隊の綺麗な娘たちでハーレム！」

「乗った！」

バキッ！

ハーレムに釣られてOKした冬馬の顔面に、アニエスの持っていた

カップがめり込んだ。

「…このドスケベ（怒）」

「アホですか」

「……無念。つーか嘘だろ、その条件」

顔に綺麗な長方形の痕を残したままアニエスに向き直る。

「ぷっ」

その姿を見てアニエスは少し噴き出してしまった。

「笑うな」

「すまんすまん。だが、力を貸してくれるならそれ相応の礼はするつもりだ」

「マスター、どうしますか？」

「……わかった。ただし、だからと言って軍や国の指揮下になる気は無いからな。俺達は俺達のやり方で力を貸してやる」

「わかった」

「あと！」

「なんだ？」

「名前でちゃんと呼べ、俺は神楽冬馬だ。わかったなアニエス」

「……！わかった冬馬」

「交渉成立だな」

二人は成立の証にと握手を交わした。

三人で酒場にいた頃、アンリエッタたちの泊まっている宿にこっそりと近づく者たちがいた。

黒いコートに身を包み建物の影から宿の様子を伺う。

「見張りは？」

「正面に二人、裏口にも二人」

「それだけか？」

「正面の窓で確認したが三人待機している」

「合計で7人：いや、直接警護で1～2人で約10人か」

「見張りは我々にお任せを」

「頼む。：ふふふ、ここでアンリエッタ様を亡き者にすればトリスタニア攻略の良い足掛かりになるだろう」

「マスター」

外を見ていたマギが冬馬を小声で呼んだ。

「どうした？」

マギは自分の耳を軽く叩く仕草で合図を出してくる。

すぐにマギの意図がわかり、冬馬は自分の耳にインカムをはめた。

「つい先程、奇妙な会話を傍受したので再生します」

インカムを通して数人の男たちの会話が聞こえてきた。

「見張りは？」

「正面に二人、裏口にも二人」

「それだけか？」

「正面の窓で確認したが三人待機している」

「合計で7人：いや、直接警護で1～2人で約10人か」

「見張りは我々にお任せを」

「頼む。：ふふふ、ここでアンリエッタ様を亡き者にすればトリスタニア攻略の良い足掛かりになるだろう」

『以上です』

「相手の数は？」

「生体反応は全部で5体。正面に2、裏口に2、残りは宿の最上部にいます」

「つまり屋根の上だな」

「Yes」

「……？何の話をしている」

アニエスが冬馬とマギがいきなりコソコソとし始めたのを見て、いい加減黙ってられなくなつたのか話に加わってきた。

「曲者が現れたらしい。それも姫さんを狙ってる」

「なにっ！」

曲者と聞いてアニエスが大声を出した。

「ばか！声が大きい！胸が小さい！」

ゴンッ

「…悪かったな」

「一言余計ですよ」

後頭部にきつつい一撃をもらつた冬馬はテーブルの上で踞^{すく}る。

「…とにかく会話から察するに全員かなりの手練れだろう。すぐに店をでるぞ」

頭を擦りながら代金を置いて（何故か冬馬の奢りで）外に出るとすぐに宿に向かった。

「アニエスは正面をマギは裏口、俺は屋根の奴を叩く」

「了解」

「一人で大丈夫なのか？」

「こいつを相手にする気なら、軍隊でも連れてこなけりゃ話にならん」

「…すごい自信だな」

「気になるならサッサと片付けて裏口に回ってみるんだな。…ああ、

「そうだマギ」

「はい？」

「殺すなよ」

「了解」

こうして三人は急ぎ宿へと戻って行った。

V S 襲撃者

異変が起きたのは日も落ちて辺りの人通りも疎らになった頃だった。
「……………」

宿の入口で見張っていた隊員が不審な動きをする者を見つけた。

「なにかしら？」

「私、ちよつと見てきます」

一人を残して様子を見に行こうとした所で、酒場に行っていたアニエスが血相を変えて戻ってきた。

「まて！お前たちは持ち場を離れるな」

「隊長！」

「どうしたんですか？」

アニエスは建物の影に消えようとした人影を見て咄嗟に叫んだ。

「不味い！伏せる！」

急いで二人を抱えて地面に押さえ込む。

ボン！

二人の立っていた壁に火の玉が命中したのはその直後だった。

「ファイア・ボール！？」

「メイジだ！」

すぐに目標を見つけるとアニエスは駆け出した。

「奴は私が追う！中の者と共に守りを固めるんだ」

「はっ」

（…………こちらの敵は二人。しかも少なくとも一人はメイジときたか！）

対して裏口では既に戦闘が繰り広げられていた。

「くっ！」

裏口を見張っていた隊員たちも、不意打ちで食らった　ファイア・ボール　を寸での所である人物に助けられた。

冬馬の従者として一緒に来ていたマギと呼ばれる青年に間一髪で庇われて難を逃れたが、代わりに彼が魔法の直撃を受けて炎上してしまっている。

「……しまった」

しかし近くには火を消せる物が何も無く、その上全身が炎に包まれていたのでは到底助からないと誰もが思った。

「……体表面温度は150。これではガスバーナーの方がまだ熱いですね」

だが周囲の予想と違い、本人は平然としていた。

燃えている身体を見ても大したことの無いように立っていた。

「とはいえ、これ以上は熱暴走の危険がありますから消しましょう」マギは身体中から白い冷気を出して瞬時に消化してしまった。

冷気の正体は機体内部に備わっている緊急冷却用の冷却水である。

それをごく少量放出して炎を消し去ったのだ。

最も　RAG　における基本耐久温度はおおよそ800　と高く、この程度なら短期間の内に消化してしまえば全く問題にならない。

「……な、何故」

襲撃者は平然と立っていきマギを見て後退りしていく。

「さあ？　貴方方の炎が　弱すぎた　だけなのでは無いでしょうか？」
「なんだと……ならばこれでどうだ！」

矢継ぎ早に呪文を完成させて放つ。

「ウィンドウ・ハンマー！」

エア・ハンマーの強化タイプの魔法で破壊力も段違いに高い。
「貴女方は後ろに下がっていてください」

隊員たちに下がるように伝えたと、魔法を正面に見据えて構えた。

「ふん」

巨大な風の塊がマジにぶつかり一気に呑み込まれる。

「ふはは！そのまま吹き飛ばがいい！」

「…それは無理です」

が、吹き飛んだのは風の方だった。

「なっ！」

「……ね？」

またしても平然と立つマジがそこにいた。

「…化け物か」

「どうでしょう？」

その問いかけにマジは首をひねって答えた。

すると魔法が効かないと判断したのか、腰に差した剣を抜いて襲いかかって来た。

「接近戦ですか」

対するマジは両手を下げて無抵抗の構えをとる。

「死ね！」

アニエスは建物の影に消えた襲撃者を追っていた。

「逃がすか！」

だが路地裏に入っていく所で追跡を止めてしまう。

「くっ、これ以上は地の利の無いこちらが不利か」

これ以上の深追いは危険と判断したアニエスは、一旦宿に引き返す事に決めて踵きびすを返して戻って行った。

「隊長！」

「ご無事でしたか」

帰ってみると警備を三人に増やした隊員たちがアニエスを迎えた。

「犯人には逃げられたがな。他に異常は無かったか？」

「いえ、何もありません」

「そうか……」

（……妙だな。冬馬は確か正面には二人いると言っていたが……先程逃げたのは一人だけ。……残りの一人は何処へ行った？）

アニエスはその残りの一人を警戒するように指示を出して、宿の中を抜けて裏口へと向かった。

酒場で冬馬が言っていた事が気になり、様子を見ようと思ったのだ。

「なっ……！」

アニエスが裏口に着いたのとマギに向かって剣が振り降ろされたのは同時であった。

「死ね！」

剣に対して、避ける事も守る事もせずに微動だにしないマギの身体にその切っ先がめり込んだと思った瞬間、予想と違う音が辺りに響いた。

ガキン！

それは生身の人間が切られた音にしては余りにも無機質な金属音であつた。

「…テメエ、中に鎧を着込んでやがったか」

「違いますよ。私は…」

マギが二本の剣の根元を人差し指と親指で軽く挟んで引き抜く。

「頑丈なんです」

そのまま小枝を折るかのようにポキッと剣を二本の指でへし折ってしまった。

「ひっ、化け物か！」

慌て折れた剣を捨てて逃げようとするが、すぐにマギに回り込まれて片手一本ずつで捕らえられてしまう。

「くっ…なんて力だ」

「振りほどけない…！」

男たちがジタバタともがくが全く外れず、蹴り込まれてもマギはビクとしなかった。

「…接続回路を解放。放電開始…」

「なっ、なにする気だ！」

マギの言葉に本能的に危険を察知した男は更に抵抗を激しくする。

「貴方たちを殺すなどの命令が来ているので、殺さずに無力化します」

「ひっ」

「スタン・ショック」

「…うわああああ！」

バチバチバチバチ！

強力な電流が放射されて男たちに感電した。

5秒程続けた後で手を離して男たちを解放する。

「あが……が……は……」

多少痙攣しているが気絶しているらしく動く気配が無かった。

「対象の生存を確認。…お怪我はありませんでしたか？」

マギがのんびりと後ろにいた隊員たちとアニエスに聞いてきた。

「…ええ、まあ」

「そ、それより貴方こそ斬られた傷が」

「大丈夫です。損傷…怪我はしていませんから」

「嘘をつくな！確かに斬られただろうが！」

アニエスが強引にマギの斬られた痕を掴んだ…が、

「……な、傷どころか出血も無いだと」

「だから言っただけでしょう？」

マギは軽く肩を竦めてアニエスの手を外す。

「頑丈なんです」

「……冬馬の奴が言い切る訳か」

「はい」

この飄々（ひょうひょう）とした態度に、アニエスを始めとした他の隊員たちも思わず肩の力が抜けてしまった。

「頑丈なんです……か。全身フルアーマーみたいな奴が良く言うよ」

冬馬は宿の屋根の上でその様子を面白そうに眺めていた。

「そうは思わないか？不審者の旦那」

視線を同じように屋根の上に立っている男に向けてそう聞いた。

「中々に腕の立つ部下を持っているな。私の部下とは大違いだ」

「確かに。正面から来た奴らはサッサと逃げちまったしな」

くつくつくと笑いを堪える。

「さて、私も予定があるのでそこを譲ってはもらえないかね？」

「そりゃ無理だ」

「無理かね」

「無理だな」

「残念だ」

コートの男の腕が動くのと同時に冬馬の腕も動いた。

ギン！

風切り音の後に刃のぶつかる音が響いた。

「飛剣か…」

「いかにも」

屋根に落ちた短剣を見て冬馬も抜いたナイフを構える。

「この距離で弾くとは…なるほど、噂に違わぬ腕だ」

「……噂？ああ、出所はワルドか」

この時点で冬馬は男の正体がレコン・キスタに繋がる内通者の一人だと言う事に気付いていた。

「名は神楽と言ったか。この様な所で手合わせ出来ようとは、アンリエッタ様の首よりも価値ある手柄になるうな」

「おいおい、欲張りは損するだけだ…ぜ！」

一歩踏み込んでナイフを一閃する。

「むっ！」

男は素早く抜いた短剣でナイフを受け止めた。

「悪いが名は聞かない。身柄を抑えさせてもらう」

「ふっ、欲張りはどちらかな！」

ナイフを弾くとそのまま冬馬の喉元を狙った。

「へっ！」

紙一重で避けて伸ばした腕を掴もうとするが、一瞬速くその手を引っ込めた。

「むうん！」

冬馬の腕辺りをもう一本の短剣が通りすぎていく。

（…二刀流だど!?）

急ぎ距離をおいて下がった。

「おかしなメイジだな。魔法じゃ無くて剣で戦う奴は初めて見たぜ」

「ワルド殿から魔法戦では不利だと聞いたものでね」

「あらら、入れ知恵かよ。……でもな」

ナイフを逆手に持ち変えて構え直す。

「その程度でこの首を落とすには少々荷が重すぎるぜ！」

二人が同時に駆け出し、2つの月の下で激しい金属音が鳴り響いて木霊する。

「良くあの足場であれだけ動けるな」

アニエスは下から屋根の様子を伺っていた。

「と言うか、このままでは安眠妨害ですよ」

マジはこの金属音が気に入らないのか耳を塞いでいる。

「手を出すとは言われてませんし、アレを使いますか」

一気に飛び上がって屋根まで登ると、袖口を二人に向けるように構えた。

「アンカー・リール 発射」

パシュ！と発射音と共にワイヤーが発射されて狙い変わらず二人に巻き付いた。

「なんだ！？」

「ワイヤーだと！？」

いきなりの事に動きを止めてしまったのが命取り。タイミングを見計らってワイヤーに電流を流した。

「ぐわあああ！」

「ぎゃああああ！」

見事に痺れて二人共に倒れ込んだ。

「状況終了。被害はナシ、任務は無事成功しました」

ワイヤーを巻き取って、代わりにコートの男を拘束すると地面に降りて行った。

「待てこら！無事じゃねえだろ！」

電流を食らってもすぐに復活した冬馬がマジに詰め寄った。

「いえ、無事完了です。主犯は捕らえて怪我人も死人もナシ。申し分ありません」

「…おい。ここに怪我人がいるが？」

「マスターの場合、この程度では怪我人扱いになりませんので、実にさらつと言いつてくれた。」

「………ほう、ではどの程度が怪我人の範囲だ、言ってみ？」

「では………まず全ての四肢が損失または損壊し、内臓関連に深刻なダメージを抱え、かつ大量の出血をしながら意識不明の状態が妥当な範囲かと」

「普通に死にかかっているだろうが！むしろ瀕死通り越して半死人じゃねえか！」

「冗談です、報告を訂正します。任務は成功、軽度の負傷者が一名、残りは 無傷 で終了しました」

「何故 無傷 だけ強調して言うかな、お前は…」

「さあ？」

二人はぶつぶつと何かを言いながら宿の一室に男たちを集めて尋問する事にした。

「後は任せた」

ただし、冬馬だけは尋問をアニエスたちに任せて自分の部屋に戻って行った。

マギは部屋の入り口の前に立ち、中を観察しつつ見張りをする事にした。

中身が機械な事もあるので夜通しの見張りだって平気でこなせる。

尋問の結果として襲撃した者達は案の定、反逆者として名の上がっていた貴族の一人だと言う事だった。

アンリエッタを襲ってその首を手土産にアルビオンへ向かうつもりだったのが、冬馬の噂と情報を知っていた為に目標を変えてしまったせいでこんな結果に終わってしまった訳だ。

「まさに 二兎追うもの一兎も得ず って奴だったな。だから欲張ると損すると言ったんだ」

その事を聞いた冬馬は、思わずそうばやいた。

その後の処分は衛兵に引き渡した後で決めるらしかったので、見張りにマギを残してそれぞれの部屋に戻る事となった。

ちなみに、狙われていた当の本人たちはと言うと……………。

「すーすー……………」

「すやすや……」

呑気に寝ていたそうである。

次なる戦に向けて…（前書き）

遅くてすみません。イヤ、ホントニ…

次なる戦に向けて…

翌朝、宿の前には捕まった襲撃者達が並んでいた。

ただし、その中に主犯の男はいなかった。念のために別の場所に拘束しておいてある。

欲しい情報もこれ以上なかったので引き渡す為に表に出したのだ。
「ふわ… ったく、騒がしい一夜だったぜ」

冬馬は生欠伸をしながら衛兵が来るまで彼らを見張っていた。

無論、主犯の方にはマギが見張っている。このハルケゲニアでアレの眼を盗んで脱出など不可能と言えるだろう。

「しかし、真っ先に逃げ出した二人は何者だったんだ？」

後ろにいるアニエスに聞いてみるが、こちらでも少し寝不足のよう目で力がない。

「…さあな。こいつらの大半が傭兵崩れのゴロツキなのはわかったが、正面から来た奴らはどこか感じが違ったな」

「メイジ」貴族と思っていたが少し違っていたかね？」

「いや、その認識は合っている。しかし中には勘当されたり落ち潰れた貴族が盗賊や傭兵になるのはさして珍しくない」

「…勘当ね。ま、こいつら見てればその理由も大体察しがつくよ」

大方、素行や性格に問題が有りすぎて追い出された連中が殆んどであろう。

それ以外の真つ当な理由を持っている連中の方が少ないのかもしれない。

程なくして駆けつけた衛兵たちによって連行されて行くのを見送ると、早速出発する事にした。

その道中……………。

「そついや姫さん、会った時から気にはなっていたんだが……」
冬馬が馬車に近づいて窓越しにアンリエッタに話しかけた。

「なんででしょう？」

「なんで俺達の動きがわかった？アルビオンから脱出船を送り出して、遅れて二日後に俺達がウェールズを連れてトリスタニアにたどり着いた。だが、いくら何でも動きが早すぎる」

「……それは、これを使ったのです」

アンリエッタが取り出して見せた物に冬馬が驚いた。

「コイツは通信機！しかも軍用の長距離型無線機じゃねえか！」

「これは脱出船と共に現れた赤いゴーレムから渡された物です。船はトリスタニアのすぐ近くの郊外に不時着したので、その時にルイズの使い魔さんから説明を受けたものですが……使い方が分からない代わりに聴く事は出来ましたからそこから動きを調べました」

「……赤いゴーレム」

じろりとマギを見る。

「お前の言っていた野暮用ってのはコレだったのか？」

「YES」

「つまり、こちらの行動は合流してから逐一そちら側に流れていた訳か」

「そうなります。でも今はこれも使えませんし、お返しします」

通信機を受けとるとバッテリーの残量を見える。

「バッテリーが底ついただけか。マギ、一応充電しとけ」

「私は充電機ですか」

そう言いながら通信機を胸ポケットにしまいこむ。

王都が近くにつれて冬馬は話す内容を考えていた。

一つは自分たちの事。異世界からの人間なんて言える筈もなく、マギの正体を明かしても理解はされまい。

二つ目はフェリーテス家の事。異種族、禁術、異端の研究者……挙げればキリがない。

さらに問題なのがウェールズだ。この様子だと下手をすれば逆に怪しまれる事態になってもおかしくない。

（……なんでもこうもお偉方と話す時は面倒な配慮を考えなくてはならんのだ）

ふと、今はないかつて 紅い翼 の副官兼参謀長だった男の事を思い出す。

しかしその者がいるのは遠く離れた地球である。この類いの面倒事は大抵彼がやってくれたのだ。

「しかし……正直俺の話をするにしても、どれだけの人間が納得するか……微妙だな」

内容からすれば大体が奇想天外なのでこの際無視する事にする。（とりあえず知りうる限りのレコン・キスタの情報とそれに対応した作戦の立案が出来れば良いな。一応この手の戦争なら経験があるし）

最も空中にある国との戦争はしたことがないが、人間が起こす戦争なら攻め方に差ほどの違いはない。

城に着くと随分と痩せこけた老人が待っていた。

「随分とお早いお戻りですな」

見るからに機嫌の悪い目でアンリエッタを睨む。

「……ただいま戻りました、マザリー二卿」

バツの悪い顔をして返す様子からどうやら頭の上がない人物らしい。

「ここに到着なされる前に報告がありました」

そう言つて冬馬たちを見る。

「襲われたそうですね？」

「先に言つておく、俺達は何もしてない」

次の展開が感じ取れたので先手を打つておく。

「当たり前です。ゲルマニアとの婚約の前に傷物されたとあつては解消されかねません」

また聞いた事のない国の名前が出てきたな。

ウェールズが旧アルビオンの国王………なのは後で知ったが、脱出後に先代の国王が王位をウェールズに譲つて隠居してしまったそうだ。この事はウェールズ本人はまだ知らないらしい。

ともかくゲルマニアとはアルビオン以外の隣国で、婚約する事から政略結婚の類いが行われるみたいだった。

この事からトリスタニアの上層部はレコン・キスタの一件以来、周囲の国との同盟でも結ぼうと画策しているようだ。

(……一応、頭の切れる奴もいたか。しかし足元がお留守で国の王族を貢ぎ物にするのは少々浅はかだと思うがね)

同盟を結ぶ以上、ゲルマニアと言う国はトリスタニアより大国なのだろう。とすればこの政略もただの時間稼ぎでしかないと結論に至る。

「して、貴公は何者だ」

アンリエッタから視線を冬馬に向ける。

「これは失礼、俺の名は神楽冬馬。アルビオンからの脱出船、並びにウェールズ皇太子の脱出に助力した者だ」

「ほう？」

「此度はその件に関しての詳細な報告と、情報提供の為に参つた」
あくまでも堂々とした態度で受け返す。ここで下手に出ては後々不利になってしまうだろう。

「……………良いでしょう。姫さまお疲れの所申し訳ないですが、職務も溜まっておりますから此方へ。あなた方は別室にてお話を伺いましょう」

「え、これからですか？」

アンリエッタはぎよっとするが、冬馬はとりあえず門前払いされずに済んでホッとしていた。

「決まりだな」

だが、さすがに何処までも都合良く事が進まないのは世の常である。

「ま、わかつてはいたがな」

「想定内です」

辺りにはカビ臭い空気が立ち込めた薄暗い空間が広がっていた。と言つか、早い話地下牢に放り込まれたのだ。

「どこら辺が想定内か答えよ」

「まずは我々が余所者である事、平民として扱われている事。何より

……」

「なんだ？」

「マスターの人相が善人には見えない事が理由になります」

「バラすぞ（怒）」

しかしどんな形であれ時間が出来たのは幸いだ。後は……。

「お呼びがかかるのを待つだけか」

「来るでしょうか？」

「さあな。来ないなら……」

チラッと格子の鍵を見る。

「こっちから行くまでだ」

「了解」

見た感じここの鍵には大して複雑な物を使っではないらしい。魔法でロックされていようともしこちらには歩く重機があるので然したる障害にはならないだろう。

……………待つこと30分後。

幾人かの足音が地下牢に響いてきた。

「来たようだな」

その足音は冬馬たちの牢の前で止まった。

「出る」

兵士の一人が牢の鍵を開けて促す。完全に罪人の扱いだ。

「早かったな」

そう言いながら地下牢から案内されるように兵士についていく。

案内されたのは王宮にある会議室だった。

名前はわからないが、恐らく將軍や各地の領主達が顔を揃えて冬馬たちの方を見ていた。

「この者達か？」

「……まさか平民だぞ」

「……信じられん」

ざわざわと騒ぐ者達の中でアリスが入り口の近くにるのが目に入った。

「改めてご紹介します。彼が私の使い魔である神楽冬馬です」

真剣な表情で將軍らに説明する様子はとても10歳の少女とは思えなかった。

（……なんだ、姿が見えないと思ったら先に来ていたのか）
城に入ってから別々になっていたが、大方アニエスにでもくっついて行ったのだろう。

「では早速ですが、アルビオンでの一件の詳しい説明をして下さい」
アンリエッタからの質問を皮切りに会議が始まった。

.....。

「……と、ここまでが脱出に至るまでの大体の経緯です」

とりあえずアルビオンでの行動などを当たり障りない程度で説明すると、一旦ここで話を区切る。

「なにか質問は？」

スツと手が上がる。將軍のド・ポワチエと言う四十代の男だ。

「あー、先程話しに出てきたレコン・キスタの兵力についてだが……その……本当に3万もいたのかね？たかが反乱軍にしては数が多いのでは」

「敵の兵力数は本当です。具体的な概要は不明ですがね。そして、城の道連れに掃討した兵力数は推定で約20000〜30000人と、大体1割弱つてところですよ」

「むう……」

「ついでに言えば、この程度なら大した時間も掛けずに補充出来る数でもあります。元々、一国を落とせた軍隊ですから当然と言えば当然ですね。」

そして、残った兵力でこの国に宣戦布告してくるのも時間の問題で

す」

冬馬は坦々と説明を続ける。さすがに將軍もこれ以上は何も言えず黙り込む。

「他に質問は？」

しかし誰も手を挙げようとはしなかった……いや、一人だけこちらは領主のヴァリエール公爵が手を挙げた。

「私も聞きたい事がある。よろしいかな？」

「どうぞ」

「……では聞くが、貴公はアルビオンの脱出の際に作戦指揮を取っていたそうだが、私の知る限り城ごと敵陣を吹き飛ばす兵器など一個人が所有していたとは俄に信じられんのだが？」

（……やはりそれに食い付いてきたか）

質問の来るレパトリーの中で最も確率の高い質問が来たので、冬馬も予め用意しておいた解答を出した。

「別に元々はそこまでの威力のある兵器ではありませんが、あの時使った兵器は 反応弾 と言う特殊な砲弾によるものです。城の基盤を破壊を目的にしたのですが……予想よりも規模が大きくなった為に城の全壊と言う結果になった訳です」

「……で、その砲弾はまだ残っているのか？」

「残弾はあと2発つてところです。ですがもう使用はしません」

冬馬としてもそれは本音であった。使い方一つで核弾頭同様の威力のある 反応弾 は非常に使い勝手が悪い代物だからだ。

冬馬自身、RAGに搭載されていると知った時は驚いた。

「しかしそれ以外の兵器も数多く保有しているのではないのかね？」

ヴァリエール公爵と言う人物は相当に目敏い男のようだ。仕方ないので冬馬も持ちネタを出すことにした。

「ご慧眼には参りますね。確かに自分はそれ以外の数々の兵器を保有しています。大規模の破壊兵器に関しては数も種類もごく少数ですがまだあります」

「貴公一人で国を落とせそうだな」

ヴァリエール公爵は冬馬に対して明らかな警戒心で睨み付ける。

「ではその兵器は今何処にある？」

「ここにありません」

マギが持っていた クラウン・クロス を床に置いた。机の上に置いても良かったのだが、ケースそのものが非常に重いため床に置いた方が安全と判断した。

冬馬がケースの中から色々な武器や火器、銃器等を取り出して机の上に並べるが……………。

「おいおい……………」

一抱えあるケースの中の何処に入っていたのか？と疑いたくなる程の大小様々な武器が次々と出てくる。

あつという間に机の上には大量の武器が並べられた。

「これらの武器は主に歩兵などが装備する銃器などで向かって右からハンドガン、マシンガン、ライフル……………等々。で、こちらが小隊での運用する重火器でチェインガン、ロケットランチャー、ガトリングガン……………等々。で、こちらが……………」

次から次へと武器の説明をしていくが、その殆んどが話しについていってなかった。

勿論わざとそうなる様に説明しているので当然と言えば当然である。真つ先に強いインパクトやプレッシャーを与えてやれば、相手は大した判断も出来ずにその空気に吞まれてしまう。

その心理を突いた冬馬の作戦だった。無論、こちらの手の内を多少なりとも明かしてしまいうリスクはあったが、成果を考えれば問題のないリスクである。

（あーやっぱりこの手の説明は面倒くさいな）

だが、世の中にはついてくる人間も一人や二人はいるものだ。

「これを持っている全てか？」

質問を返したのは案の定ヴァリエール公爵だった。

「まさか、これ等の武器は全体のごくごく一部。正直、自分でも数種類も完全には把握してません」

これも本当の話で、何せ重火器満載の軍の倉庫を3つ程すつからかんにしてやつと8割が埋まった位に異常な積載能力を持つケースを完全に把握するのは至難の業だった。

「ヴァリエール公爵まさかとは思いますが、その一部を兵に貸し出せと？」

「ふむ。察しが良くて助かる。それで返答は？」

（……………あつさりと認めやがったな）

先程の説明で部隊規模としての兵器運用の有効性を瞬時に認めて、即座に決断したようだ。

（しまった……………このオヤジはとんでも無い狸だぞ）

冬馬の目論見もくろみが外れ、説明内容を誤った事に今さら気が付いた。

「……………まあ全てとはいきませんが（こちらにも限りがあるし）、兵の錬度と適正次第（むしろ適応レベルが）では一個小隊くらいなら可能と言っておきます」

冬馬の返答はYESである。

現状で戦力の乏しい冬馬にしてみれば、この提案はかえってありがたい。

むしろ予想外だったのがこうもあつさりと事が進んだことである。

「一つ……………兵器の貸し出しの事について条件があります」

静かにアンリエッタを見て他の將軍や領主の方も見渡す。

冬馬のそもそもの目的はトリステインの軍隊に対しての協力要請で、敵の狙いもトリステインと一致していた事もあってその迎撃をする為にもこの条件を飲んで貰わなければ何の意味も為さない。

「俺に軍の部隊の指揮権と人事権を委ねて貰いたい」

……………まあ無茶苦茶な条件であるが、冬馬自身が誰かの下について行動する人間ではない。それに効率的に銃火器の運用を目的とするなら下士官では話しにならないからだ。

「それは無理です」

予想通りの言葉がアンリエッタから返ってきた。

「私も同感ですな。幾らなんでもそこまでの条件を承諾したとあつ

ては、国が傾いしまいます」

さつきから黙っていたマザリー二卿も口をだす。

「……………マスター、言葉が足りない過ぎます」

「……う」

コホンと咳払いをして言い直す。

「失礼しました。要するに貸し出すにあたってその効率化の為の部隊を新たに設立してもらい、俺にその指揮権兼人事権を与えて欲しいと言う意味です」

「そう言う事でしたら……………承諾しましょう」

今度はあつさりと受け入れてくれた。

「助かります。部隊の内容としては使用火器の操作訓練やそれを用いた戦術運用の学習……………平たく言えば新基軸の戦闘に対しての育成と教育を目的とします。勿論有事の際には戦線にて防衛をさせて戴きます」

「それで部隊名は？」

冬馬が予め決めておいた名前を口に出した。

「紅い翼 またの名を……………」

紅の教導隊^{アイグレッサー} と命名する。

ちなみに、紅い翼 は昔の部隊名で 紅の教導隊 はさつき地下牢で思い付いた名前である。

……口に出さないのはお約束と言っ事で。

次なる戦に向けて…（後書き）

何一つか、主人公ほったらかしです。勿論ヒロインもほったらかしです。

いざ！乙女の部隊へ（前書き）

イエーイ！キャッホー！

早く続きを書けたぞー！

………え？なに？それでも遅いつて？

シヨボシヨボ（´ω｀；）

いざ！乙女の部隊へ

会議が終わりアリスと共に部屋から出ると、冬馬のため息が聞こえてきた。

「あー……面倒だった。肩が凝っちまったぜ」

肩を押さえて首をグルグル回す姿はまさに何処ぞのオヤジそのものである。

「冬馬もカッコいいんだかカッコ悪いんだかわからないよね」

「私には疲労の要因が判別しにくいのですが？」

「うるさい。俺は元々こういうのが苦手なんだよ」

アリスとマギからの言葉も今の冬馬には少々痛い言葉に聞こえてしまう。

「実際問題、本当に忙しくなるのはこれからだ」

あっさりと部隊の設立を為したとしても、本当の問題はまさにここから始まるのだ。

「人員の選別に活動場所の確保、予算の割り当てに………ウンタラカンタラ」

まともに機能させるには人員が圧倒的に足りなさすぎる。メンバーは銃士隊同様にアンリエッタ自身が決めてくれるらしいが、それも何時になる事やら……が現状である。

はつきりと言って、連中の侵攻にはまず間に合わないだろう。

（……最初の侵攻をどうやって防ぐか、それが肝心だな）

敵の出鼻を挫く事は、後々のアドバンテージを確保する事にも繋がる。それにしくじれば………どうなるかは目に見えて分かる事だ。
「頭が痛いぜ……」

冬馬が頭を抱えていると、廊下の先で会議室で見た人物が立つてこちらを向いている。

「あれは……」

果たしてそこにいた人物とは会議の時に冬馬を驚かせ、部隊設立

のきっかけを作る立役者となったヴァリエール公爵であった。

「あ」

そこへ来てやっと目の前の人物の正体に気が付いた。平賀才人の主人で色んな意味で元気な少女の名前のファミリーネームと同じ名前の男……。

「もしかして、ルイズ嬢ちゃんの親父さんか？」

「先程は礼を言えなくてすまなかったね」

こちらに近づくとルイズの親父さんは軽く頭を下げて礼を言うてくる。

「アルビオンで娘を助けてくれてありがとう。感謝の言葉もない」

「……別に大した事はしていない。身体張って助けに行ったのはアイツの連れだったからな」

「アイツ？」

「ルイズ嬢ちゃんが使い魔にした平賀才人って少年だよ。随分と嬢ちゃんを大切にしていたぜ。あれは主人と使い魔と言うより、何処か気になる彼氏かの……」

彼女 と言いかけた所で急に眼光が厳しくなった。

「いや、なんでもない」

思わず口を閉じる冬馬だが、こちらの主人は遠慮をしない性格であつた。

「なんか恋人同士って感じだったよねー」

「……」

三人が静かに沈黙する。

(……………バカ)

冬馬は顔に出さないがかなりマズイものを感じていた。

(…ここで怒らせて目の敵にされでもしたら事だぞ)

しかし、その考えは杞憂に終わった。

「ふむ、いずれルイズが帰ってきた時にでも紹介してもらおうかな。私の娘に相応しい男かどうか一目くらい見ておかなければ」

「はあ……さいですか」

杞憂には終わったが、別の方向にとばっちりが行ってしまったらしい。

（あー、二人とも恨むなよ）

「しかし君は変わった武器を持っているようだが、一体何処で手に入れたんだい？」

突然話を変えて……では無くて公爵（ルイズの親父さんもヴァリエール公爵も言いにくいので公爵にした）が本題に入って聞いくる。

「まあ、昔の職場（？）から持ち出したものだから何処でとは言えませんがね」

幾らなんでも異世界から持って来ましたなどとは言える筈もなかったたので、冬馬は曖昧に答えるしかなかった。

「その威力は確かなのか？」

「整備と補給に難はありますが威力に関しては保証しますよ」

整備、補給、この二点に関しては何らかの対策を考えなければならぬ。

銃器の整備には専用の機材が少なからず必要だし、各種弾薬もなんとか生産出来るようにしなければあつという間に底を着いてしまっただろう。

「難しいのか？」

「単純に技術の問題がなんとかなれば解決……するかどうか微妙ですな」

この世界に来てわかった事の一つに、アルクとの研究を通じて医療や錬金術が魔法の力により地球より遥かに上回っている事が挙げられた。

しかし銃弾などに使われるような鑄造された金属は錬金をもって

してもかなりの難易度の高い技術を要求される。冬馬もアルクと共に何度か製作を試みたもののハンドガン用数丁分の9mm弾は作れたが、ショットガン用の弾薬である ショットシェル やライフル用の弾薬は火薬や構造の関係で作る事が出来なかった。

もし作るとすれば精密な金属加工の出来る設備と、腕の良い土系統のメイジが大量に必要とされるが………そう簡単に揃えられるものではない。

唯一幸いなのが、整備の簡略化が固定化の魔法により実現した事だろう。物理的、科学的の両面からの変化をさせないこの魔法は、発射時の銃内部の部品のダメージを0にしてくれる夢のような魔法だった。

その良い実例がタルブの村にあったゼロ戦だった。機体には錆びも無く風化もしていなかったし、ガソリンも全く変質していない完璧な保存技術には冬馬も驚かされた。

「…ふむ、固定化の魔法がねえ」

冬馬は公爵にその事を伝えたと腕を組んで考え込んだ。

「と言うことは使用する銃器は比較的扱いの簡単な物で部隊もかなり限定せねばならず、それ以外の部隊には従来通りの戦術に手を加えるやり方が限界と？」

公爵の問いに冬馬が頷く。

「あと可能なのが、現在使用している銃に連射機能を取り付ける事と命中率の向上させる改造を施す事です………」

「やはり手が足りない」

「その通り」

最大にして最も対応の難しい人材不足が当面の課題だった。

「ま、なんとかしてみせますよ」

そう言うのが精一杯だったのが実に痛い所である。

.....。

「それで、転がり込んで来たのが私達の隊だと？」

不機嫌丸出しの顔をした隊長に睨まれた。

「まあそう言うな。聞いた話だとお前達が一番銃器の扱いに慣れているらしいからな。手始めに活動するのなら丁度いいと思ったんだ」

冬馬は悩んだ末に自分の知っている部隊を活動場所にする事に決めた。すなわちアニエスのいる銃士隊である。

「心配するなちゃんと許可なら取ってある。ほら」

アンリエッタの署名がされた書類を見せる。

「.....なんだコレは？」

「コレは許可証」

「そうでは無い！書いてある内容の事を聞いている！」

「内容？」

冬馬は書かれた内容を思い出すが不振な所は無い筈である。

「どうかしたか？」

「.....ココに 指導官及び特別訓練生を臨時編入させる と書かれているが誰の事だ？」

「後で分かるさ」

床にケース等の荷物を置くとそこに腰かけた。アリスはと言うと

他の隊員たちとお喋りをしていた。

女同士だと話しも弾むのだろうか？最近是一緒に行動しないパターンが多い。

「もう一人はどうした？」

アニエスが冬馬と一緒にいたマギがない事に気が付いて聞くと、もう一人の誰かを迎えに行った」とだけ言って部屋を見回した。

「何を見ている？」

「綺麗な部屋だなと思ってな。……さて」

よっこらしよと腰を上げてアニエスに訊ねた。

「とりあえず、俺の部屋は何処だ？」

「屋外で寝ている！」

「ガンΣ（　　；　）」

初っぱなから苦勞する。肩を落としながらトボトボと冬馬が部屋から出ていった。

「あいつは……ここが男子禁制の部隊だと気付かなかったのか？」

アニエスはため息を吐いたが、冬馬はホントに気が付いていなかった。

「これが使っている銃か？」

翌朝、本当に王宮内で野宿をした冬馬はさっそくアニエスに今軍内で使用している銃を見せてもらったが……。

「これを使っているのか？」

……いやー、さすがに技術レベルが中世のど真ん中を突っ切っているだけあって実にレトロな銃を使っている。

「マスケツト銃とはね……こりゃ魔法の方が大きな顔をする訳だ」

超前時代的なレトロ銃では無理もない事ではあるが、コレの改造をするとなると二苦勞くらいするだろう。

「……………何が言いたい？」

非常に渋い顔をして聞いていたアニエスが耐えきれずに口を開いた。

「とりあえず銃の問題点を挙げるが、第一にリロードしづらい事。第二に命中率が低い事。第三が射程の短さ。第四で単発式である事だ」

指を折って順番に指摘していく。

「で？」

「詳しい説明は省くけど、最初のリロードに関しては俺はこの弾を使う事で解消している」

冬馬はハンドガン用の9mm弾を取り出してアニエスに見せる。

「これは……………弾か？」

初めて見る弾の形に繁々と眺める。

「薬莢と呼ばれる筒の中に弾丸、火薬、雷管と言う発火装置を組み込んである物でな。これを装填して打ち出すのが俺の銃だ」

「複雑な銃だな。本当に撃てるのか？」

「百聞は一見にしかず。実際に見せてやろう」

そう言って屋外に他の隊員らと出ると、兵士達の訓練場の一角に案内した。

「……………あれま」

着いた先には黒山の人だかりが出来ていた。いずれも王宮内の名だたる将校や騎士が集まっている。

「どうやら全員が見物しに来たらしいな。さて準備はいかな程かと……………」

その一角には古びた鎧が柱に支えられて並び立っていた。

「よしよし、準備はいいな」

冬馬の登場に周りにいた者達がざわざわと騒ぎだす。

「冬馬、これはいい？」

ア二エスも不信に思つて冬馬を見る。

「なに、昨日あれから色々な所を回つて今日ここで新型の銃の実演演習をやると触れ回つておいたのさ。まさかこれだけ集まると思つてなかつたがね」

ケラカラと笑う冬馬だが、ア二エスは啞然としていた。

「上にもお偉いさんが見ているし、良い機会だ。始めよう」

ケースからハンドガン、アサルトライフルを数丁取り出して周囲の面々に先に注意を促した。

「えー、これより実演演習を始めますので、皆様方は自分の後方にお下がりにください。…ですが、どうしても前で見たければ死ぬ覚悟でご覧下さい！」

「そんな所を強調するな！」

後頭部にア二エスの拳がヒットする。

「いたた……いちいち突つ込むな」

周りのギャラリーが安全な位置に下がった所で冬馬はハンドガンを構えた。今回使用する銃は グロッグ17 というオーストリア軍が使用しているハンドガンだが、整備は簡単、操作も簡単、取り回しも便利でマガジンの拡張も容易とお気に入りの一つだ。

この改良型で グロッグ18 というハンドガンがあるが、スイッチの切り替えでフルオート連射が可能なくせして命中率が悲しい程低い欠点をもつ素人泣かせな代物だ。

それを前面の立て掛けた鎧の胸元に狙いをつけて引き金を引いた。

パンツ、パンツ、パンツ！

乾いた音がして鎧の胸元のプレートに小さな穴が3つ空いた。鎧までの距離はだいたい30m程。外す事はない。

「やべ、貫通しちゃった」

外さないが、鎧の反対側の石垣にも弾痕が3つ残っていた。勢い余つて鎧を貫いてしまったらしい。

「やっぱりフルメタルジャケット仕様の弾丸だと、あの程度の鎧だと貫通するか……。一応、厚い場所を狙ったんだがな」

撃つという予想外だと言う様に頬をかくが、周りはそれどころでは無かった。

「なんだあの威力は……」

「重歩兵用の鎧を貫通した……」

「しかも連続で撃ったぞ……」

「見るよ……あの石垣が割れてるぜ」

ザワザワとどよめきながら鎧とハンドガンを交互に見ている。

それを確認しながらアサルトライフルに持ち変えて次の鎧に狙いを定める。

使うアサルトライフルは M4カービン。アメリカ軍で幅広く使用されているライフルで、市街地での戦いに適しているので需要が多いのが特徴だ。

同じく需要の多いライフルで AK-47 通称 カラシニコフと呼ばれるライフルだ。こちらはゲリラやテロリスト等が世界各地で使っているメジャーなライフルになっている。このライフルには随分と世話になっているし、ちゃんと大量にケースに収納してある。

今度は先程よりも更に距離を取る。目測で150m程の距離から狙い撃つ。

パパパッ！

乾いた銃声を立て続けに三回響いた。これも鎧の胸元に三カ所の穴を空けて、その後ろの石垣にも弾痕を残した。

「……鎧じゃなくて盾を使うべきだったかな」

またもや貫通してしまった穴を見て冬馬は唸った。

「まあ、こんな具合です」

「今……150メートルくらいから撃ったよな？」

「全く外れ無かったぞ？」

「……………信じられん」

本当なら350mくらい迄なら余裕で命中させてやれるのだが、あえてこの距離で撃ったのは正解だったようだ。周りの動揺を感じながらハンドガンやライフルをアニエスら他の隊員に渡す。

「とりあえず貸してやる。鎧に撃ってみな」

「あ……ああ」

アニエスは構えるが、やはり初めて扱うせいか何処かぎこちない。肩の力を抜いて脇を締めろ。視線は遠くに、鎧の向こう側を狙うように構えろ」

冬馬がアニエスの背中から正しい構えに整えてやる。

「……こうか？」

「違う、しっかり持たないと反動で身体が傾くぞ。右手をトリガーに、左手で銃身を支えて……おい、聞いているか？」

「……………」

「どうした？」

「いや……首筋に息がかかるとちょっと……」

どうもさつきからモゾモゾとしていと思うたら、密着し過ぎたせいでくすぐったかったようだ。

「アホ。だったらサッサと撃て」

アニエスの頭を軽く叩き冬馬はすぐ後ろに離れる。

「……ああ、わかった」

アニエスは改めて狙いを着けて引き金を引く。

パンッ！

狙い違わずに鎧を撃ち抜いた弾は木製の支柱に当たり鎧の反対側で止まった。

周りから歓声が飛び交う。

「やるじゃん」

「マグレだ。しかし、私にはこの銃は少し大きいな。こっちの片手銃にしてくれ」

アニエスはハンドガンを手にとると次の的へ狙いを定めた。

「……………撃たんのか？」

構えたものの、なかなか撃とうとしないので冬馬が聞いてみた。

「さっきみたいに教えないのか？」

チラッと冬馬を見る。心無しか期待した目をしているが、構えは問題ないし指摘する動作と言えば安全装置の解除くらいだ。

「別に教える事は特にないだろ。安全装置に関しては終わったら説明するし」

「む……………そうか」

少し残念そうに視線を戻して引き金を引く。

やはり狙いは外さず鎧の胸元に命中する。

他の隊員たちもそれぞれが選んだ銃で試射を行い、全員が終わった頃には全ての鎧が無惨な穴だらけの鉄屑に変わり果てていた。

冬馬は落ちた薬莢を全て拾い、演習の終了を告げた。

「……………」

アニエスは演習の終わった後、ボロボロになった鎧を黙ってみていた。

「どうした？」

一人後片付けをしていた冬馬がアニエスに気が付いた。

「いや、厚い装甲の鎧も簡単に打ち抜いてしまった威力に驚いてな」
アニエスも演習で見せつけられた銃の威力に半分驚き、残りの半分では少し恐怖を覚えていた。

「怖いかな？」

「え？…ああ、まあ…な」

いきなり冬馬に凶星をさされてぎこちなく答える。

「それで良い」

「は？」

アニエスは思わず聞き返す。

「銃つてのは本来人殺しの道具だ。用途や目的に関わらずな。だから恐怖心があるなら好奇心で使う事は無くなるって事だ」

冬馬は後ろ指で鎧を指す。

「好奇心で撃てば、生身の人間があんたの鎧のようになる」

「……！！」

一瞬アニエスには横たわった穴だらけの鎧が、惨たらしく打ち殺された人間の死体に見えた。

「昔っから良く聞く言葉で『撃たれる前に撃て』『撃たれたから打ち返せ』ってのがある。一応、覚えておきな」

鎧を借りてきた荷車に乗せながら冬馬が演習場を後にした。そして去り際に一言だけ、

「『撃つ者は撃たれる覚悟のある者だけ』俺の体験談からきた言葉だ」

アニエスはその言葉を黙って聞いていた。

その余りにも重い言葉に返す言葉を失っていたのだ。

「……冬馬。お前は一体何者なんだ？」

その背中は何故か重たくて小さいように見えた。

妥当案Ⅱ 女体化？

演習の後片付けが終わって王宮内にある銃士隊の隊舎に戻った冬馬は、早速翌日からの訓練案を説明した。

無論隊長であるアニエスにも先に簡単な資料を渡してあるが、詳しい内容は口頭で説明する事になっている。何せ訓練自体が何処から手を着けたら良いのか全くわからないから、具体的な事だけ書面で伝えておくしか無かったのだ。

「では、これから行ってもらう訓練内容を簡単に説明させてもらおう。と言っても今までの訓練に少しだけ加えさせて貰うだけだから、それほど気を張らなくて結構だ」

そこでアニエスが渡した資料の事で口を開いた。

「今回加える訓練内容とは 特殊移動訓練 と言っものらしい。具体的には建物や森林地帯などを移動する際に効率的に行動できる手段との事だ」

「俺はこの訓練法を レンジャー移動訓練 と呼んでいる。訓練自体も実に簡単で、ワイヤーやフックを用いた壁登り（ロッククライミング）や障害物を使った隠密移動法、屋内戦闘時の銃器の扱いかな、トラップの活用方法…等々」

「全然多いではないか」

「そうか？」

アニエスの指摘に冬馬はシレッと答える。

「まあ慣れた、慣れ」

「そういうものか？」

「コホン。話を戻して、要するに現在主流の戦い方である魔法戦に対応するべく、新たな戦闘スタイルを学んで貰うのが訓練の最大の目的だ。先程の演習に用いたライフルなどは、実は機動力を重視した部隊が使用する事を前提に作られている。だから今までの様な構え！撃て！ なやり方をしていると、相手が同じくらいの兵器を

所有していればあつという間に蜂の巣される訳だ」

他の隊員たちも頷きながら聞いている。

やはり魔法を使えない平民と言う立場では、自然と戦う上でのデメリットと言う物を心得ているようだ。

「つまり、この訓練は対魔法戦用だと？」

「その通り。しかも、これは通常の戦闘でも有効な方法だ。訓練する上では深く考えずにアクロバットをする様な感覚でやって貰えば結構楽に出来る」

周りから軽い歓声の様な声が聞こえてくる事から、あまり反対意見は無さそうに思える。

「明日にはもう一人加わって訓練を開始するのでそのつもりでいてくれ」

「……はい！」「……」

一応敬礼込みで返事が返ってきたので、これ以上 なにか が起きない内にミーティングを終了させて部屋から出る事にした。

その なにか ったのは最近になって多発する女難絡みに関してなのだが……。

「冬馬」

案の定アニエスから来た。まだアリスからの方がマシかも知れない。

「なんだよ？」

無視は出来ずに振り返る。

「知っていると思うが、ここは平民の女性で構成されたアンリエツタ様の直属部隊だ」

「知ってる。通称 百合^{レス}の部隊 …… スミマセン軽いジョークです」

問答無用で銃口を突きつけて来た。いくら旧式レトロ銃だからって当たれば死ぬ。

「だれが百合^{レス}だって？」

「イエイエ、極めてマッソーな部隊です。ハイ」

コクコクと機械の様に首を縦に動かす。…今気が付いたが、この女難の相は己の余計な一言が招いているのでは無かるうか？

「次に言ったらそのふやけた頭に風穴が開くからな」

「…はいはい。で、直属の女性部隊が何だって？」

「つまり、本来なら此処に男が居るのは不自然な事だ」

「自然になれば？」

「それでは女性部隊にならないか！」

この言葉にまだ残っている隊員たちも頷く。…おいおい、そんなにあっさり賛同されてはこっちの立場が無いのだが。

「つまりここは、本来なら男子禁制の部隊だと言いたい訳だな？」

「そうだ」

「……………例外を作る気は無い？」

「無い」

「許可書があるけど？」

「部隊の活動には問題は無いが、それ以外には許可しない」

「ブー（、ω、）」

「そんな顔をしてダメだ。つか、昨日も言っただが男に部屋は用意出来ん」

「……………今日も屋外か」

いっそ城下町に宿を取った方が良くかもしれない。

あのままこっさりこの隊舎に居着くつもりだったのだが、しつかり見破られていたようだ。全く、女の勘つてのは妙に鋭くて敵わん。しかし、このやり取りにトンでもない爆弾を放り込んでくれたのは例によってアリスだった。

「だったら冬馬が女の子になれば？」

「……………はい？」

部屋の空気が止まった気がした。

「何だって？」

「だから冬馬が女の子になれば部屋も用意してくれるし、部隊のお姉ちゃんたちと一緒に居られるし。ね？大丈夫でしょう」

「……………理屈はまあ合っている。合っているが、それを認めるには男としての尊厳だの威厳だの何だかんだを捨てなければならぬ気がする。」

「先に言っておく、女装の趣味は無い。ニューハーフになるつもりも無い」

こんなゴツイ体型で女装もへつたくれも無い。

「違う違う。忘れたの？マギさんの事」

「マギ？RAGの……………あー、その手があつたか」

以前、アルビオンでマギ！RAGを人間に擬態させた時の事を思い出した冬馬はポンツと手を打った。

「しかし……………またやるのか？それも人間相手に？」

「大丈夫だって。自分で試した事があるし」

アリスが小さい胸をポンツと叩いて自信満々に頷く。

「一体なんの事だ。RAGとはなんだ？」

聞き慣れない単語と状況にアリスも眉を潜める。

「あーこつちの事、こつちの事」

冬馬は軽く手を振ってはぐらかす。

「で、まさかここでやるのか？」

小声でアリスに聞くが、冬馬の予測が正しければ……………。

「うん。その方が皆に分かりやすいし」

パンパカパン。大当たりー！

（…じゃねえよ！）

自分でツツコミを入れてから慌てアリスを止めようとするが無駄だった。

「彼の者を望む姿に変えよ！」

前回と違ってえらく短縮された呪文を唱え終わり、白い煙に冬馬

が包まれた。

「どわー！」

まさか自分がこの呪文をかけられようとは思ひもしなかった故に、抵抗らしい抵抗も出来ずに受けてしまった。

「ケホケホ……だから煙たいんだよ」

自分の発した声は予想よりも高く聞こえた。

「うん、成功ーだね♪」

アリスも結果が成功したとあって上機嫌だ。

煙の晴れた場所に立っていたのは、若干背の低くなった黒髪の女の子……もとい変わり果てた冬馬がいた。

服の上からでも分かるメリハリの効いたボディーに、肩まで伸びた少々癖っ毛のある黒髪、そして早くも死んだ魚の眼になっている黒い瞳。確かに冬馬の面影が残ってはいるが、そこに居たのは紛れもない女の子であった。

「……………悪夢だ」

誰が聞くまでもなく冬馬が呟いた。

自分が産まれてから二十数年、まさか女になろう日が来るとは誰が予想出来ただろう。何人かは妄想した事だろうが、実際になった奴は不運としか言いようがない。

俺もその一人だ。

「ああ……こうなるなら早く宿を探しておくべきだった。後の祭りだが」

「……………えーと、冬馬？」

「悪夢だ……」

アリスが遠慮がちに声を掛けるが冬馬の耳に届いて無いらしい。そんなアリスにアニエスが軽く肩を叩く。

「今はそつとしておいてやれ」

「うん……」

そうやって他の皆さんも冬馬を気遣ってか、静かに部屋をあとにした。

ちなみに、冬馬が正気に戻ったのはあれから実に一時間も後の事だった。

「いたーい！」

頭にたんこぶが出来たアリスを睨みながら冬馬は隊舎の一室にいた。

その後、アニエスの計らいで特別に冬馬とアリスの部屋を用意してもらったのだ。本当に言葉の意味で、女になったから出来た計らいだそうだ。

「痛いのは当たり前だ。つたく、わざわざ変えなくても宿を取るなり方法は色々あったんだよ」

「ごめんなさい」

魔法でたんこぶを治しながらアリスが素直に謝る。

「まさか呪文の短縮まで出来る様になったとはね。驚いたぞ」

たぶん、暇を見つけてはマギにダウンロードされた研究データを見て練習していたのだろう。

「今度からは良く考えて使え。ほら、もう怒ってないから泣くな」
今度は優しく頭を撫でてやる。

しかし元の身体より低いし手や足も少し小さくなっているから違和感がある。

(…に、してもこの胸は大きいな)

元の背が平均よりも高かったせいか、胸の大きさよりも身体の線の細さが目立つ。

「うーん。腕や脚の筋肉は元のままの様だが、まさか身体が細くなった分全部胸に行っただんじゃ無いだろうな？」

だとすればこの胸は、元々の筋肉の量に比例して大きくなったんでは無かるうか？

「……………いや、この考えは止めよう。何故か危険な予感がする」
不吉な気配がしたので思考を切り替えた。

「それで、元の姿に戻るにはどうするんだ？」

「うーん。マギさんと同じように元の姿を思い浮かべれば良いと思うけど、私がやった時は解除の呪文を唱えてたし」

「じゃあ呪文唱えなければ戻るのは無理か」

冬馬は肩を落とした。呪文を唱えた「魔法を使ったのであつては魔法の使えない冬馬では自力で戻すのは不可能と言う事だ。

「あ、でも冬馬なら出来るかも」

「何でだよ」

少なくとも冬馬は異世界の人間だ。この世界の魔法が使えないのはごく当たり前の事なのにアリスは可能性があると云ってきた。

「ほら、前に船が墜落しそうになったでしょ？」

「まあ、な」

冬馬の目が遠くなる。

「その時に良く分からなかったけど、すごい魔力を感じたの。それも冬馬から」

「風石で変換された魔力じゃねえの？」

「ううん。冬馬の身体から感じた」

「…やっぱり俺からかよ？」

この世界にやって来て色々あったが、まさか自分に魔法を使う事が出来ようとは……………まさしく俺の予想を遥か斜め上空を突っ切っている気分だ。常識捨てるのも大概にしろよ。

……………。

教えられた呪文を唱えるとすんなり元に戻った。やはりこのゴツい身体が一番使いやすい。

「おー戻った戻った」

「じゃあもう一回変わってみて」

戻ったのを確認してアリスが嫌な要求をしてきた。

「また変わるのかよ？」

ついさっきの姿を思い出してしまうと……………。

ボン！

「ウソだろ……」

また元に戻った。試しに身体のおちこちを触ってみるが間違いなく先程の女バージョンの身体だ。

これで自分が 変身する魔法 を自分の意思で使える証明になった。

グッバイ俺の常識。ウェルカム新たな非常識。

どうやら俺は昔受けた ナノマシン の改造手術だけで無く、この世界へ来て魔法にも目覚めたらしい。ふざけるな（怒）。

「もう寝よう」

結局俺は辛い現実を忘れてふて寝を決め込んだ。

……………。

「なるほど。そのナリはそんな事情がありましたか」

翌日やっとな帰ってきたマギに、この変わり果てた姿を見せて一応説明をした所だ。

「マスター、一つ言ってよろしいでしょうか？」

「なんだよ」

「アンタ本当に人間ですか？」

「デメエにだけは言われたくないわ。このターミネーターもどきが（怒）」

「言い得て妙ですね」

マギは納得した様に頷いた。

「あー冬馬。少し見ない内に随分と可愛くなつたよね」

「言うな！クラウン」

一昨日マギに頼んだ用事とはクラウン（ウェールズ）を連れて来てもらう事だった。勿論髪の色や眼の色もバレないように変えてもらっているが、アンリエッタに頼んで 特別訓練生 としてこちらに寄越したのだ。

「冬馬、この者か？昨日話した訓練生とは」

アニエスが冬馬に並んで聞いてきた。以前は頭一つ分こちらの背が高かったが、今は大体並んでいる。

「そうだ、以前より鍛えたかったからな。良い機会だと思つてね」

「また男か……」

「文句を言うな。戦場では男も女も関係ないだろ？」

「まあな」

ただし襲う側と襲われる側になれば話は別だが。

「じゃあ全員揃った事だし、始めるとするか」

銃士隊の練習時間は早朝と夕刻の二回で、それ以外では本来の警備任務に就いている。

よって効率化をする為に2つのグループに分けて訓練を実施する事にした。

1つのグループが通常の訓練で、もう1つのグループがこちらの特別訓練をする。これをローテーションで回す事で任務を含めて円滑に行う事が出来る。

「ああそれと、一週間後に暇な別の部隊と模擬戦闘を行う予定だからそのつもりでいてくれ」

この発言に一堂（マギとアリスを除いて）が驚いた。

「…なつ、聞いてないぞ！」

「俺も言っていないから当然だ。それに昨日話した通りにこの訓練は対メイジ用の物だし、味方くらい蹴散らして鼻を証すのも悪くはないぞ」

演習を見に来ていた連中の反応や態度でどれ程の奴らが平民の、

ましてや若い女性だけの部隊を軽く見ているかが良くわかった。

剣の腕や組織力で分かっていても、やはり女性と言う立場では下に見るものだろう。

「どうせならメイジ相手に完勝すれば誰も文句は言えなくなるだろう？」

「……たしかにそうだな。私も個人的にメイジだの貴族だのは嫌いだし、他の者たちも昔貴族に恨み辛みを持つものばかりだ」

「良くそんなメンバーで組織したな……」

貴族中心の王宮内で反貴族精神の部隊を作るとは、アンリエッタ王女恐るべし。

「よし、全員聞いたな！これより我々は一週間後の模擬戦に備えて新たな戦術をマスターする！貴族どもの高い鼻をへし折ってやるぞ！」

『おー！』

一致団結した銃士隊の姿を見て冬馬は自ら口にした言葉で段々目的が遠ざかるような気がしてきた。

「妥当貴族か……。妥当レコン・キスタへの道は少し遠くなりそうだし、そんな事は最初っから分かっていたのでため息一つについて訓練のローテーション内容を考える事にした。

妥当案Ⅱ女体化？（後書き）

ボタン！

ダダダダダ！

ドカーン！

メデー、メデー、応答乞う！ただいま本編の主人公から攻撃を受けている！タスケテー！

冬馬：

「やゝまゝとゝ！（怒）」

ひいゝ、ランボーも真っ青な主人公が来たー！何だよ！何怒ってるんだよ！？

冬馬：

「理由を聞かねば分らないかオイ？」

理由？…………カルシウム不足の反抗期？

ダダダダダ！

わぁー！ゴメンなさい！冗談です！すみません！

冬馬：

「誰があ魔法のお使えるうマジカル少女にいしろと言ったあ？」

マジカル少女って…歳考えろよ。26にもなって、逆にキシヨイし。

ドカーン！ドカーン！ドカーン！

ひいひい！対戦車ライフルなんて人に向けちゃダメでしょ！

冬馬：

「あああ？聞こえねえぞ。まっつたく聞こえねえなあ」

って！？なんで釘打ち機とホッチキスを持つてるかな！？明らかに用途が違うよね！？ね！？

冬馬：

「合ってるさ。これでお前を○○○○して××××した後にすりゃ少しはマトモになるだろ？」

ならないから！メチャクチャ死亡プラグ立ってんじゃん！

ドスドスドス！パッチンパッチンパッチンパッチン！

ノオオオオオオオー！！！！

冬馬：

「ふう、これでもう大丈夫だろ。後はコンクリートで固めて東京湾にでも埋めておきたいが、ハルケゲニアだと無いからそこら辺の綺麗な湖に沈めておくか」

ぼっしやーん！

冬馬：

「よし、もう復活しない事を祈ろう。アーメン」

ブクブクブクブク……。

乙女の底力（前書き）

ブクブク……………ぷはぁ！

ゼーゼーゼー… あー死んだかと思った。

冬馬のヤロウ湖なんぞに放り込みやがって… 思いつきり水の精霊に怒られたじゃないか。プンスカ。

ん？服に何か引つ掛かってるぞ。なんだこりゃ？指輪か？… もらっておこつ。

水の精霊の指輪だ。高く売れるだろう。

……………と、気が付いたらもう30話じゃん。やべえ、まだ開戦してねえよ。

ま、そのうちするべ。

でもこの指輪……………なんか大切な事を忘れているよーな。（ゼロの使い魔4巻 誓約の水精霊 参照）

乙女の底力

「よし、ここまでだ！」

その日の訓練が終わり、訓練から解放された隊員たちが一息つく。
「は、疲れた」

一番最初に座り込んだのはエレリアと言う名の少女だった。歳も17歳と若い、全隊員の平均年齢が16、17歳と言う若さは最早さすがとしか言えない。

ちなみに最年長は隊長のアニエスで23歳だ。

「まさか、壁登りがこれだけ大変だとは思わなかったわ」

他の隊員たちも壁などに寄りかかって休んでいる。

「そりゃ腕の力だけで登れば疲れるだろ？ワイヤーを伝って全身の力を使えば疲労も少ない」

そう言って地面をみると一人だけ横になって動けない者がいた。

「……まあ、全身使いすぎて痙攣起こしたのもいたけどな」

「うーん……」

すっかりノビているその隊員を起こして別の場所に寝かしてやる。

「教官一つ質問があります」

「なんだ？」

他と違いまだ立って呼吸を整えている者もいた。

名前はたしかレイと名乗っていた。

「このような訓練がメイジ相手に通用するのでしょうか？」

まあ、もつともな質問だ。

「戦場で兵士が恐れるのはどんな事態だと思う？」

「……質問に質問で返されても困るのですが。そうですね、士気が落ちて統率が執れなくなる事でしょうか？統率を無くした軍隊は烏合の衆も同然ですから」

「では統率を無くすには何が効果的だ？」

「ですから質問に質問で……はあ、効果的なのはそこの指揮官を倒

すことです」

少し諦めながらレイは答えた。

「それがなにか？」

ジト目で冬馬を見ながら聞き返す。

「それが正解。指揮系統が機能しなければ軍隊は成り立たない。平民だろつとメイジだろつとな」

「その通りです」

「戦場で指揮系統を潰す それこそがこの訓練の真の目的だ。戦場で一番恐れる事態は指揮する者がいないこと。これに陥った軍隊の末路は……」

「……はい全滅です」

半ばヨレヨレな声を出して答えたのは座つて……いや、すでに地面に突っ伏しているエレリアであつた。

「エレリア……貴女ね、このくらいで情けない声を出さないでよ。情けない」

「あゝ情けないを二回も言った。私はレイみたいに体力バカじゃないもん」

「な……体力バカとはなによ！」

「私は頭脳派、レイは体力バカ、でしょ？」

「バカバカ言わないでよ！モヤシっ娘！」

「むっかゝ！モヤシつて言うなゝ！」

体力的にはヘロヘロの筈の二人が口喧嘩を始めるのを見て冬馬は呆れて肩を落とした。

「おーい。続きを言つて良いか？」

『どうぞ』

レイとエレリアが仲良くハモつて答えるので、危うくずっこけそうになった。

「ちよつと、一緒に言わないでよ！」

「そつちこそ、タイミングをずらしなさいよ！」

ギヤーギヤー。

「…お前らな、仲が良いのか悪いのかどっちかにしろよ。で、要するにこちらより力量の上回る相手と渡り合うには、指揮官を潰しバラバラになった所で各個撃破するのが一番だつて事だ」

「それで、奇襲や強襲しやすいように色々な移動手段を習得しようつてのがこの訓練なんですね？」

「その通り」

「なるほど…」

冬馬の言葉をつなぐ形でエレリアが補足するのを、レイが納得したようにうなずいた。

「レイ、理解した？」

「なんとなく」

それでも なんとなく らしい。そんなに分かりにくかったか？

「分かった所でもう1セットやってから解散だ」

『ええー！Σ（「」）まだやるんですかー！？』

おもいつきり全員からブーイングが返ってきた。あーおもしろい。

「あはは。それは大変だったね」

クラウン（ウェールズ）は冬馬の打撃を素手で捌きながら笑った。

「よそ見している場合か？」

軽く足を払うとクラウンが気持ち良く転んだ。

「うわっ」

尻餅をついた所に冬馬の拳が突き付けられる。

今の時間は以前クラウンに約束した格闘技を教えている所だ。

「足運びに気を付けろつて言っただろ？足元を崩されるとほぼ無防

備状態になるから、相手が手練れでなくても一撃で決められるぞ」

「すまない」

すぐに身体を起こして構える。

「よし、もう一度行くぞ」

冬馬も構えてクラウンと対峙する。

「はああ！」

「あまい！」

クラウンの鋭い打ち込みをさらりと流して足払いをかける。

「なんと！」

間一髪冬馬の足払いを避けて背後に回ると、腰に差した杖を引き抜きかなり省略した呪文を唱えた。

「ウル・ソムルア・アラスムラ！」

「やばっ」

冬馬が慌て身を捻る。

「エア・ハンマー！」

捻ったすぐ後ろを突風のような空気の塊が通り過ぎる。

「せい！」

即座に後ろ手に拳を振り上げて杖を叩き落として更に追撃として回し蹴りを放つ。

「イタッ」

クラウンが蹴りをガードしつつ後退すると、落ちてきた杖を器用にキャッチした。

「おしいな。あと少しだった」

ガードした腕を擦りながら荒くなった息を整えた。

「ぬかせ。まだまだだ」

クラウンは訓練するにあたって、アリスから魔法の短縮化についてのノウハウを学んでいた。その結果、冬馬の教える武術に加えて短縮魔法を組み合わせる技法をマスターする事に決めたらしい。

いずれは複数の系統魔法を同時に組み込みたいそうだ。

冬馬も軽く呼吸を整えて言い返す。

「俺に一撃を加えたければ動きでも封じることだな」

「おいおい、それを言ってもいいのかい？」

「言って対応出来るのならな」

「やって見せよう！ ディープ・ミスト」

クラウンが短縮魔法で 風、 水 を組み合わせた魔法の霧を展開するとその中に身を潜めた。

「目眩ましか？ いや！」

冬馬はクラウンの気配を探る前にすぐにその場を離れた。するとさっきまで立っていた場所に霜が降りているのが見えた。しかし、その霜はつもるや否や瞬時に氷となって広がった。

「凍結攻撃か！」

もし冬馬がクラウンの動きを探ろうと動きを止めていたら、今ごろはそこで礫はりつけとなっていただろう。

「……いきなり武術は無視か」

戦いに手段を選ばないのは常套句ではある。これが格闘技の訓練なのを忘れているのではと思ったが、要らない杞憂だった。

「隙あり！」

冬馬が動きを止めた隙を突いて、立ち込めた霧の中からクラウンが飛び出してきた。

「つて！？ 今のが囷テコイかよ！？」

まさに予想外の奇襲であった。まあ、予想外すぎて……。

「………お前はドコへ出てくる気だったんだ？」

冬馬とは反対の方向に飛び出していた。

「あれ？（；、）」

「………」

「………テヘ」

スタスタと冬馬がクラウンに近づいていき……。

「アホか」

思いつきどついた。

「あいた！」

「なんで完璧に隙を作ったのに相手の反対方向から出てくるんだよ！驚き損じゃねえか！」

「そんな事言ったって、途中で姿が見えなくなるからドコにいるのか全然……」

「…魔法を凶にした意味ないだろうが」

「確かに」

頭を押さえて踞^{じすくま}るクラウンを見ながら、冬馬の呆れたようなため息が聞こえる。

「はあ…今日はここまでにするか」

「じゃあ、また明日だね」

クラウンが乱れた胴着を整えて帰り支度をしている中で、冬馬は何故かいそいそと物陰に入ってしまった。

「ん？どうしたんだい？」

「クラウン。見るんじゃないぞ」

「？」

すると物陰から白い煙が立ち込めてすぐに消えていった。

そして、物陰から現れたのは冬馬と同じ髪型の女の子であった。

「その姿は…」

「以前に話した通りだ……っ！か、あまり見るな」

しっかり女性特有の高い声をした冬馬は、気恥ずかしさからかクラウンから目を反らした。

「へえ、こんな姿なんだ。うん。なかなか可愛いね」

「可愛い言っつな！トラウマになるぞ！」

「いやいや、実際に本当の事だよ。僕…いや俺も宮中で色々な娘に会ってきたからね。目は確かだよ」

クラウンはうんうんと頷くように自信満々に答えた。

「だけど、愛しのアンリエッタには敵わないけどね」

さらに自信たっぷりに答えた。

「……とりあえず、殴っていいか？」

「君ね……それって殴ってから言う言葉じゃ無いよね？」

言葉よりも半ば無自覚に伸びた拳を確認しながら冬馬はクラウンを見た。

「いや、なんとなく」

「そんな理不尽な……」

「世の中と、ある家庭用胃腸薬の半分は理不尽で出来ている。後は屁理屈な」

「……愛と優しさは何処にあるんだい？」

「知らん」

バ○アリンのCMで聞いたような回答に減なりとした顔で呆れるクラウンだった。……と言うか、何故クラウンがこの地球産のネタを知っている？

「何にしてもこの格好で無ければ宿舎に入れないからな。仕方ない事だと割りきってやるしかないさ」

「ま、君らしいね。じゃあ俺も宿に戻る事にするよ」

「おう。マギによろしくな」

現在クラウンには、アンリエッタの計らいで街に宿を一軒借りて生活してもらっている。

とは言えここに来る途中でアンリエッタが反王国派の一味に襲われた事もあり、同じように反王国派の連中がウェールズ（クラウン）を狙わないとも限らない。そこでマギをボディーガードの代わりとして一緒に付かせると言う安全策を取ったのだ。

外見は普通の人間でも中身は地球製の特殊合金の装甲と、軍用人工筋肉によるハイパワーを誇る全身兵器のリアルターミネーターに敵う奴は恐らく存在しまい。

更にマギにはフェリーテス家所有の魔法関連の知識もあり対魔法戦にも対応できる。だめ押しに生体センサーによる周囲の監視網も張り巡らしてあるので、これ以上ないボディーガードであった。

文字どおり 人間の業 では到達不能な猛者^{もさ}である。

冬馬はクラウンを送った後で一人食堂へと向かった。
理由は簡単。酒を飲みに来たのだ。

「お？先客か」

入って一番奥のテーブルに見慣れた姿が目に入った。

「よう」

「…ん。ああ、冬馬か」

そこにいたのはアニエスだったが顔がほんのりと赤くなっている。
どうやら先に来て一杯やっていたようだ。

「隣いいか？」

「構わん。好きにしろ」

冬馬はアニエスの隣に腰掛けて、近くで給仕をしていたメイドに
酒と適当なツマミを頼んだ。

「はい。かしこまりました」

営業スマイルで答えるとトレイを持って厨房へと戻っていった。

「もう訓練の方は終わったのか？」

「一応な。そっちは？」

「問題なく終わった。前に比べて皆の動きが良くなっていたぞ」

「そうか」

特に大した会話をする事なく簡単な受け答えをするだけだったが、
二人は静かに酒を楽しんだ。

「……一つ聞いても良いか？」

「なんだ？」

ポツリとアニエスが質問してくる。

「お前がここに来るまでは何をしていたんだ？」

「ん？アリスの使い魔ってそれは今もか。それより前はジャンク屋をやっていたな」

「ジャンク屋？」

「古い物や壊れた物を修理して再利用する仕事の事だ」

「更にその前は？」

「……………随分深入りして聞くな」

少々質問の答えに食らいついてくるアニエスに疑問を感じたが、ふと以前にアリスの母親のマリアと過ごした一夜（第8話 双月のお茶会 参照）の事を思い出した。

あの時も以前の自分の事を聞かれたが、またも聞かれるとは思わなかった。

「なんで聞くんだ？」

「いや…今行っている訓練も、以前アンリエッタ様が襲われた時の判断力と行動力も一介の兵士以上の物を感じてな。まあ、話したく無ければ別に……………」

「傭兵さ」

「なに？」

「傭兵だよ。もっとも途中から傭兵ですら無くなったがな」

「それは一体…」

「まあ…色々とな。じゃあ俺からも質問だ。なんで貴族になんかなったんだ？その腕さえあれば傭兵家業って道もあっただろう？」

「…確かに。私には目的があるんだ。その為には貴族の中に入り込まなければならなかった」

その時少し酔っていたアニエスの眼に、殺意ともとれる鋭い光が走ったのを冬馬は見逃さなかった。

「目的…復讐か？」

「…なっ！」

突然の冬馬の言葉にアニエスの動きが止まる。

「なぜそれを…」

「言つただろ？元傭兵だつて。誰かに恨みを持っている人間の眼つてのは大勢見てきたからな」

「…そうか。その通り、私の目的は復讐だ。昔、住んでいた村を国によつて住民ごと焼かれてな…幼かった私はある男の人に助けられて九死に一生を得たんだ」

「なら復讐つてのは、国に焼かれた事を手がかりに貴族の中に潜んでいるその時の奴等を探し出して、村の仇をとりたいって事か」

「……ああ、全くその通りだ。凄いな冬馬は、全てを語らなくても良く理解している」

「誉められる事じゃないさ。それだけ人間の闇を見てきただけの話だ」

「色々あつたんだな…」

「お互いにな」

冬馬とアニエスは互いに苦笑しあつて酒を口に運んだ。

「キヤアアア！！」

そんな時に一人の女の子の悲鳴が食堂に響き渡った。

「ん？」

「なんだ？」

見ると先程冬馬に酒を運んで来てくれたメイド二人が酔つ払いの兵士たち二人に絡まれていた。しかもメイドの一人は突き飛ばされたのか顔を押さえて蹣跚つまずくまっている。

「あらら…」

「…行くぞ冬馬」

有無を言わさずアニエスが立ち上がった。

「え、俺もやるの？」

「当たり前だ！お前は漢だろうが！」

「でも今は女」

「余計に尚更だ！同じ女性が危険に晒されているのを見過ごせるか

「！」
まさに聞く耳持たずだった。もはや酔っているアニエスを止めるのは不可能と判断した冬馬は、やれやれと言って立ち上がった。

「だからさー一緒にお酌してくれば良いんだよ。こう、その可愛い唇で口移しでさあ」

真つ赤な顔で酒臭い息を吐きながらキスしようとする男を、必死に引き剥がそうとメイドの女の子は抵抗していた。

「突き飛ばして悪かったねー。代わりにさ、ベッドの上で介抱してやるからよお。ほら！大人しくしろよ！」

もう一人の娘も倒れた所を二人がかりで押さえつけられて衣服をむしり取られようとしていた。

「いやあ！離してえ！」

「きゃああ！誰か！誰かあ！」

必死に周りや他の同僚たちに助けを求めるものの、皆平民だから、メイジだからと助けに入ろうとせずに見て見ぬ振りを決め込んでいた。

それでも他のメイドたちの手や唇はワナワナと震え、他のメイジたちはニヤニヤと事の成り行きを見ていた。

「おら！手を退かせや！」

強引に腕を引き剥がし、もう一方の手で彼女の頭を掴むと一気に自分の顔へ引き寄せた。

「んっ」

「いやあああ！」

ガン！

しかし、男の顔に当たったのは銀色のトレイだった。

そしてそのトレイを持っていたのは凄まじい形相をしたアニエスであった。

「なんだぁおい？」

「おい……乙女の唇と言うのは、貴様の様な下棲^{ゲス}な者に軽々しく
れてやれる程安い物ではない！身の程を知れ！」

怒りを込めた右ストレートが男の顔面に思いっきり突き刺さる。

「ひでぶうう！」

酷い奇声を上げながらテーブルを乗り越えて壁に叩きつけられた。
「ふん。貴様の様な輩がいるから我々が下に見られるのだ。まったく忌々しい！」

完全に白目を向いて気絶しているのを確認してアニエスはメイド
の女の子に近づいた。

「大丈夫だったか？」

やさしく乱れた髪を撫でてやると、女の子は堰を切ったようにア
ニエスに抱きついて泣き出した。

「ふええん！アニエス様、怖かったよー！」

「よしよし。もう大丈夫だ」

子供を宥めるように背中をポンポンと叩いて受け止めてやる。

「きゃああ！お願いします！止めて下さい！」

すでに上着の大部分が破かれて、残った下着とボロボロになって
しまったスカートを押さえながら抵抗していたが、両手を掴まれて
しまい残った下着も剥ぎ取られてしまった。

「うほ！きれいな肌をしてやがるぜ！」

「見るよこの脚！スベスベだぞ。うへへ、たまんねえな」

「ひっ……い、いや……それ以上は……もう」

もはや声も掠れて身体力も入らなくなってきた時に、急に両腕が自由になった。

「…え？」

顔を動かして振り向いてみると、そこには信じられない光景が広がっていた。

「あ…があ…は、離せ……」

両腕を掴んでいた男が、後ろから現れた女性の片腕で後頭部を鷲掴みして持ち上げていたのだ。

「まったく、本当にいい迷惑だよ。こっちは楽しく酒を飲んでいただけなのによ。すっかり酒が不味くなっちまったぜ！」

ブンツと風を切る音がして先程の男と同じ壁へもう一人の男が投げ飛ばされた。それも掴んでいた片腕だけで。

「げひあ！」

こちららも白目を剥いて完全に気絶した。

もう一人の方もギロリと鋭い眼光で睨み付ける。

「ひ…ひい…ま、待て。お前、め…メイジに逆らっていいと思っているのか？」

冬馬の威圧にすっかり腰を抜かした最後の兵士は、杖を構えるもその手はガタガタと震えて狙いが定まっていけない。

その様子を見ながら、拳をペキペキと鳴らしてゆつくりと冬馬が近づいていく。

「妙な事を言う奴だな。ケンカを吹っ掛けて来ておいて、メイジもメンマも関係ある訳無いだろ？で、んな棒っ切れ持って何をするんだ？指揮者の真似事でもやる気か？」

「ふ、ふざけるな！ま、魔法だぞ！？お前みたいな小娘の平民なんかイチコロだぞ！？」

「そうかそうか。魔法だったのか。そうかそうか」

冬馬はそつと兵士の耳元に顔を近付ける。そして大きく息を吸い込み……。

「酔っ払い風情が意気がつてんじゃねえぞ！！」

耳に突くような轟音が食堂を揺るがした。

否、轟音では無く冬馬の大音量の罵声が轟音となって鳴り響いたのだ。

「……………！？……………ブクブク」

それを直に食らった兵士はその場で泡を吹いて即倒してしまった。

「……………死んだか？」

あまりに豪快に倒れたので試しに指で突っついてみたが反応がない。

「このまま置いておくと迷惑だから外に捨てておこう。おい、そこで傍観者を気取っているバカ共。この者達のようになりたく無ければ運ぶのを手伝え」

アニエスの睨みに他のメイジ達がビクツと固まった中で立ち上がった者達がいた。

「ははは、バカ共とは耳が痛いね。分かった彼らは我々が引き受けよう」

「貴方は？」

「ジャック・ロッキングラムだ。城の警備隊隊長を任されている。酔っていたとはいえ、婦女子に手を上げるような不届き者にはちゃんと制裁を与えるのでそれで勘弁してくれ」

「分かった。ではロッキングラム隊長殿、銃士隊隊長アニエスよりこの者達を引渡し致します」

「確かに受け取りました。よし、連れてけ」

気絶した兵士三人を引き摺って他の隊員たちが食堂をでると、ジャックは改めてこちらを見た。

「いや、しかし大した腕だね。女性にしとくには少し勿体ないな」

「その言葉も女性に対して言う言葉じゃないと思うが」

倒れていた女の子に自分の上着を着せながら、冬馬がジャックにツッコミをいれる。

「あは、これは失礼。だけど、君たちが銃士隊で無ければ是非ともウチにスカウトしたい所だけだね」

軽く謝罪するとそそくさと食堂から去って行った。

「……………ア二エス」

「なんだ？」

「……俺、いつから銃士隊に配属された？」

「今からではないか？」

「否定しろよ！Σ（」Д（」

女難の一日（前書き）

少し主人公が壊れますが、作者の趣味なので気にしないで下さい。
あと、最近ネタに不足気味です。ただいま募集中です。

ストーリー脱線バンザイ！

……って、ダメじゃん。

女難の一日

メイジ対平民という異例異色の模擬戦闘まであと2日と迫った今日は、いつもと違い困った事になっていた。

「教官」

レイが訓練中で冬馬に近づいてきた。

「なんだ？」

いつもの低い男の声では無く、高い女の声で返す。

「なんで今日は女性の方なのですか？まあ、こちらは一行に構いませんが」

今の姿は宿舎に入る時ぐらいにしか変身しない女の姿になっている。

いつもは普通に男に戻って指導に当たっているのだが、実はこうせざるもやむ無しと言う厄介な理由がある。その理由が……。

「あれだよ」

冬馬が後ろを指差す。そこには一人のメイドが今にも飛び出そうと待ち構えているのが見える。

ただし、冬馬は指を見えない程度に差しただけで振り向いてはいない。

目的がわかっているだけに振り向けないのだ。……っか、単に関わり合いになりたくないだけだが。

「あの娘って……ああ、少し前に教官が食堂で大暴れした時に助けた娘ですよね？」

「がを強調するか、お前は？アニエスと一緒に暴れていただろうが」

「アニエス隊長は何も悪くありません。隊長を制止しなかった教官が悪いです」

「俺のせいかな！？」

確かあの時は自分がアニエスに巻き込まれて渋々参加した筈だが、

何やらア二エスの暴走を止めなかったこちらが悪い事になっているらしい。

まあその辺の事は良いのだが、問題はその翌日に起こった。なんと助けたお礼と言う理由で、彼女がその助けてくれた女性（冬馬）を探しに銃士隊の訓練場までやって来たのだ。

無論その時冬馬は男に戻っていたし、声も違っているので見つかる訳がない。

だから訓練の邪魔にならない程度に周りをちよこちよこと動き回っていたのだが……いくら離れていても、はつきり言って邪魔な事には変わらない。

オマケに休憩に入るや否や、休憩していた隊員たちにその彼女の行方についての質問責めを浴びせる始末で、結局こっちにクレームがきてしまった。

仕方なくもう一度女に変身して会う事になったのだが……。

「またお会い出来ましたわ!」

いきなり抱きつかたばかりか、そのすぐ後に出た言葉が……。

「あの……私の お姉さま になって貰えませんか!」

……さすがに思考停止ね。うん、さすがにあり得ないわ。

また一つ、自分の中の何かが壊れた気がする。

「……えーっと。何だって?」

「ですから、私のお姉さまになって欲しいんです。…私、貴女に一目惚れしてしまいました!きゃっ!」

…いやもう勘弁してくれ。自分のアイデンティティーが音を立て

て崩れていくのをしっかりと聞きながら、頭の中で現実逃避出来る逃げ場所を必死に模索していた。

「……いや、だけどね。俺……あー自分も仕事がある訳で……」

しどろもどろで必死に お姉さま 発言を取り止めて貰おうとするが、成功する望みが薄そうだ。

「お仕事の事でしたらご心配なさらないで下さい。メイド長からも本人が許可するのなら構わないと言ってくれました」

「ああそう本人が………って、何が 構わないと？」

冬馬の方は お姉さま の方を撤回してもらいたいただけなのだが、どうも彼女の望みは他の所にあるらしい。

「はい」聞けば新しい部隊の隊長様と言う事ですから、色々とお忙しい所も多々お有りだと思ってお手伝いをさせて貰えないかと「思ってメイド長に直訴してきたと？」

「はい」

「はあ………」

あまりの事に二の句が出てこない。人生の、その殆んどを戦場で費やしてきた冬馬にとって、こんな事は初めてであった。

異世界に飛ばされ、戦争に巻き込まれ（飛び込んで）、更には女装……ならず本物の女性になるという異常能力を手に入れ、その派生でメイド付きの お姉さま になりかけて（ほぼ確定）……。俺の人生は只今濃密な事になり始めていた。

まあ、今更であるが。

「今欲しいのは従者では無くて隊員なのだが……」

「では私が隊員に！」

「ダメだ。この部隊は戦術戦略に特化させた教導隊だ。隊長として認められない」

「……う」

「そして従者も今は必要ない。悪いが諦めてくれ」

「はい……」

……と、まあここまでが事の顛末だった。

しかし、諦めきれずに只今後ろでストーカー状態になっている。

一応自分の仕事はこなしているらしく、こちらに来ていても何ら問題ないらしい。なんじゃそりゃ？

「どうします？」

「どうすりゃ良いんだ？」

「私に聞き返されても困ります」

「俺はこの手合いが苦手なんだ」

「……私は訓練に戻ります」

「……逃げやがった」

レイが付き合いきれないとスタスタ戻っていくのを尻目に、冬馬もこの件は置いてく事に決めた。

それよりも大事なものは明後日の模擬戦闘訓練の方だ。

ここで負けるなどとなれば大問題である。

「とりあえず今日の夜の内に下見を済ませるか……」

演習場の場所は事前に聞いていたので先に見ておく事にした。

……。

「……ふむ。なるほどな」

今いる場所はトリステイン郊外にある演習予定地である。

戦場となる舞台は見通しの良い草原に林が隣接している地形だっ

た。この地形であれば訓練の成果も存分に発揮出来るだろう。

「後はむこうの出方次第だが……」

しばらく歩き回っていた冬馬の足が止まる。

「こんな夜更けに何の用件だ？」

月明かり照らされ草原に一人の人影が立っていた。

「ふむ、気配は消していたつもりだったがね」

「……………誰だ？」

闇の中から姿を現したのは食堂で出会ったジャックだった。最も、今の冬馬は男に戻っているのでジャックからして見れば初対面になる。

「これは失礼、城の警備隊の隊長をしているジャック・ロッキンガムと言う者だ。君が噂に聞く教導隊の隊長さんだね？」

「…どんな噂だか聞く気は無いが、まあその通りだ」

王宮に流れる噂は聞かなくても自然と耳に入る。だが、当たり前の話ではあるがロクな噂しか流れていない。

「で、警備隊が此処に何の用だ？」

「おいおい…お前さんは名乗らないのかい？」

「隊長なら噂の人物ぐらい調べていると思ったが、違うのか？」

「ははは…中々に頭の切れる男のようだね。その通り知っているよ、神楽冬馬隊長殿？」

勿体つけたようにジャックが肩を竦めるが、冬馬は食堂で会った時から彼の高い力量を感じていた。

その男がこの場所に現れた理由、それは……。

「そうか…模擬戦闘の相手は警備隊と言う訳か」

「ご明察。と言う訳で今日の所は顔合わせって感じかな？」

「やれやれ、お互い苦労するな」

「まあね」

二人は揃って苦笑する。冬馬がこの模擬戦の相手にと考えていたのは、軍内にある適当な部隊であれば良いと考えていた。

しかし、実際に相手となったのは軍の部隊とは別の部隊になる警

備隊だった。

主要部の警備を担当するこの部署は言わば 守衛のスペシャリストの部隊だ。 守衛 にも色々あるが、こと警備関連に関しては下手をすれば軍隊よりも厄介な相手になる。

無論それはアンリエッタ直属の銃士隊とて同じ事だが、一番厄介な面がまさにそこである。

軍による守衛 と 警備による守衛 、同じように武力を用いて対象を守る手段だが、決定的に違う事がある。

軍は外敵が現れたら真っ向から力で制圧する。即ち 剛の守りを得意とする。

対して警備とは、内外問わずに的確かつ正確に目標を守る臨機応変のやり方を得意とする。即ち 柔の守り が出来るのだ。無論、軍の用に外敵に対して正面から守る事も出来る。

だから互いに模擬戦とは言え、相手を倒すとなれば非常に戦い難いのだ。 守り 対 守り の戦いは総じて膠着状態になりやすい。まさしく戦術と戦略で勝敗が決する戦いと言うわけだ。ジャックもそれが理解出来ていたからこそ笑ったのだろう。

「それじゃ 明後日にまた会おう」
踵を返してジャックが去っていく所を見て、彼の用件も済んだようだった。

「あー…こりゃあ面倒くさい奴が相手になったな」
ポリポリと頭を掻きながら冬馬はため息を洩らした。この後帰ってから対策を講じ直さねばならない事に疲れを感じていた。

「……………ん？この気配は…まさか」
背後に何者かの気配を察し、振り向いたが……。

「こ…こんばんは」
もう冬馬の口から言葉が出ることは無かった。それこそ金魚の如く口をパクパクさせていた。

そこに居たのは、言わずと知れた ストーカー メイドその人だった。

「……オイ待て。それこそ何で貴女が此処に居るんだ？」
「えへへ……」

再度硬直。

そして沈黙。

更に思考は停止した。

「あの～大丈夫ですか？」
思わず不安になったのか聞いてきた。

Q・大丈夫ですか？

A・大丈夫じゃない。

Q・その理由は？

A・お前が原因だ。

脳内でそんな会話が流れてきた。

「どうして俺の所に来た？」

なんとか正気を取り戻し、質問を投げ掛けた。

「あの～つかぬ事をお伺いしますが……」

「？」

「貴方が冬馬さんですか？食堂で出会ったあの……」

そういう事か。

推測するならジャックとの会話の時には此処にいて、俺の名前を聞いた事で冬馬（女）との関連性に気付いたようだ。

「まあな」

否定しても後々厄介なので頷いておく。

「やっぱりそうでしたか」

彼女は少し目を伏せてその言葉を理解した。

「てつきり女性の方だと思っていたのですが、女装された方だし……」

「待て待て待て！それは誤解だ！あれは本物の女だ！」

「はい？」

いきなり在らぬ誤解が発生して慌て弁解する為に彼女を止める。

「えーと…はい？」

再確認するように頭上に？マークを浮かべて首を傾げる。

「あー…だから、貴女が会った女性と俺は同一人物だって事だ。女装では無くてあの時の俺は本物の女に変わっていたんだよ」

………自ら言っておきながら、理解するのに相当に困難な説明をしていると思う。

「??????」

案の定彼女は理解出来ずに首を傾げたままだ。頭から煙らしき物体が上がっているのも気のせいではあるまい。

「……つまり私を助けてくれた方は本物の女装した女性で、今此処にいる貴方も女装した女性と同じ女装してない男性で、でもって再会した方も本物の女性だけど女装して無くて……あれ??？」

…だから脳内から女装を外してくれ。女装した女性って普通の女だろ??…あと別に女装した事一度もないから。

完全に思考回路がショートしたらしく奇妙な事をブツブツ言い始めた。

「…おい。もう誰か助けてくれ。コレの相手するの俺もうイヤだ」

今人生で初めて、名も知らぬ神様やら悪魔にやらに本気で祈りたいと思わずにいられ無かった。助けてプリーズ。

そして願いは叶った。

………ただし、悪魔側の方にだが。

「あー！冬馬見つけた！」

「………二人で一体何をしているのだ？」

現れたのはアリスとアニエスだった。

この局面でこの二人に出会ったのは、絶対に神の思し召しではあるまい。悪魔（某作者）の仕業に違いない。何処かで高笑いの声が

聞こえる。

「お前…なんでそこで固まっているんだ？」

あまりの冬馬の不審な挙動にアニエスも理解が追い付かない。

「お前たち…なんでココにいる？」

まさに絞り出した声で冬馬が力無くそう尋ねた。

「何でもなにも、全然宿舎に帰って来ないとアリスが訪ねてきたから一緒に探しに来たんだ。で、お前は真夜中に何をしに来たんだ？」

「………ただの下見だよ。此処が明後日の模擬戦の舞台だからな」

「ほう？ただの下見に彼女を連れて来たのか？」

「後から付いて来ただけだ」

「そうか……。しかし此処は街から離れているから静かだな」

アニエスは辺りを見渡してそう呟いた。

「まあな。だから下手に暴れても周りに迷惑はかからない様に配慮されているんだろう」

「それに此処ならすぐには逃げられないし、助け声も街までは聞こえない」

………なにか会話が変な感じになってきた。

「まあその様子だと互いに同意の上の様だし、私も別に前が仕事以外で何をしようと、色々と言を出す気もない」

「おい、アニエス？一体なんの事を……」

「しかしだ。やはり顔見知りの者が男の毒牙にかかるのを、黙って見ているのもやはり気が引ける」

何故かアニエスの目が据わっている気がする。

ここは一つ状況を整理しよう。

1 . まず時間は深夜である。

2 . ここは郊外の誰もいない草原だ。

3 . そして二人が来る前には冬馬と彼女と二人だけ（ジャックは

帰ってしまったため）。

A・深夜 + 無人の草原 + 若い男と女の子が二人だけ
II 男と女の妖しい肉体関係

.....。

状況整理が完了し、結論が出るとサーと冬馬は全身から血の気が引いてきた。それも、危険なレベルにまで下がっていった。

（……マズイ！アニエスは……いや、この場にいる全員が壮絶に誤解している！）

でた結論は彼女を誰もいない草原に誘い出し、押し倒して犯した（野外プレイ）……となる。

急ぎ周囲を見渡すとメイドの娘は頬を赤く染め、アニエスの眼は鋭くつり上がり、アリスは凄く真剣な表情で三人を観察している。

誤解を通り過ぎ、もはや修正不可能の段階にまで事態は進んでいた。

「それで、私らが来る前までにはドコまで行っただ？いや、まさか既に……」

冬馬が答えれずにいるとアニエスの顔が赤くなっていくのがわかる。恐らく想像してしまったのだろう。

「もう汚しきったのか……純粹無垢な乙女を……こ、このケダモノ……」

「うおい！まだ何も言っただねぞ！」

素敵に勘違いしたアニエスの神速の一撃を冬馬は辛うじて避ける。「うるさい！き、貴様の様なハレンチ極まりない男は私の剣の錆びにしてくれる！」

「だから違うつての！勝手に付いて来ただけで何もしてねえって！」
むしろ女装の疑惑を挙げられた被害者である。

「問答無用！」

アニエスの剣を白刃取りで迎え撃つ。ジリジリと睨み合うが、双方共に一歩も引かない。

まあ、冬馬の場合は命がかかっているので引けないのだが。

「くおら！当事者なんだから黙ってないで………そー言えば名前を聞いて無かったな？」

今更ながら彼女の名前を全く聞いてない事に、やっと気が付いた冬馬だった。

「なんだと？名も知らぬ娘を抱いたのか！」

更にアニエスの力が加わる。一気に剣が顔に近づいた。

「ええいっ！アニエス、お前は少し黙ってる！……で、名前はなんだ！？」

「え？……ああ、そう言えばそうでした。私の名前はアイラと申します。以後宜しくお願いしますね」

メイドの彼女……アイラはのんびりと挨拶した。

「じゃあアイラ！早く弁護（？）してくれ！」

「弁護……ですか？ん……そうですね、私としては抱いて貰っちゃっても構わないんですけど？」

「はいい！？」

更に剣に力が加わって、もう刃先が目と鼻の先まで来ている。

「おい待て！なんだよ！？どう言う理屈だよ！？」

切羽詰まったように冬馬がアイラに聞くが、返ってきた回答が……。

「あのですね……私が女性の冬馬さまに お姉さま になって欲しいのは本気ですよ？でも、同じようにお慕いするのなら男性の方の冬馬さんでも、それほど変わらないと思います。でしたら抱いて貰った方が一番分かりやすいかと……」

…… 本気で身体から力が抜けてきた。彼女の言っている事は間違

いなく本気の言葉だろう。

「うわ…アイラお姉ちゃんって大人だ」

さすがのアリスも感心したようにアイラを見つめている。……このマセガキ（怒）

「お、お前ら…人を何だと思って……ん？」

急に剣から来る圧力が消えた。

「…どうした、アニエス？」

アニエスからも先程までの威圧感が完全に消えていた。

「おい？」

そのまま何も言わずに剣をしまつて踵を返す。

「……………邪魔をしたな」

そこにはいつもの覇気が無く、どこか気落ちしたような背中があった。

「あ……アニエス、一体どうしたんだよ？」

冬馬も訳が分からず、アニエスにかける言葉も見つからない。

「私は別に大丈夫だ……模擬戦まであと2日だしな。冬馬、お前も無理はするなよ」

出てくる言葉にも力が感じられない。

「……………」

完全に出す言葉を見失った冬馬は、ただアニエスが帰っていくのを見ているしか無かった。

「あの……」

アイラが冬馬に声をかけようとする前に冬馬が駆け出す。

「悪い！今の返事は今回の件が全部終わってからするから、気を付けて帰れよ」

言う事だけ言ってからアニエスの後を追うように冬馬がアリスを連れて走り去って行った。

「あ……はい」

慌て答えて冬馬を見送ったアイラは、一人ポツンと草原に立っていた。

「えっと……もしかして、アニエスさんも冬馬さんの事を……？」

今の二人のやり取りを思い返してみても、ふとそんな事を思ってしまった。

「まさかね」

少しあり得ない事だなと考え直してアイラも帰る事にした。

「あ、そうだ。ついでにお父さんの所に寄ってこつと」

アイラの足は来るときと比べて何故か軽いような気がした。

アニメスの恋心？（前書き）

..... スミマセン。 いや、読んで貰えればわかります。

アニエスの恋心？

冬馬と別れて部屋へと戻ったアニエスは、部屋着に着替えるや否やテールブルに突っ伏した。

「何をやってるんだ私は……」

頭の中に先程の出来事が鮮明に蘇る。

最初はただ一人外出した冬馬をアリスと共に探すだけの筈であった。外出先の検討は既についていた。

二日後に迫った模擬戦の為の会場の下見に行っているだけだと思っていた。

しかし実際に行ってみれば、そこにいたのは冬馬と昼間から冬馬の後をついて来ていたメイドの娘のアイラと二人つきりだった。

勿論なんでその場所に彼女がいたのかは容易に想像がつく。冬馬はここ暫くの付き合いではあるが、女性に対して無節操に付きまとうような軽い男ではない。

むしろ、一人の人間として対等に接してくれる良き友人の様な感じの男だ。

だから彼女がいたのも冬馬の後をこっそりと付いて来ただけの事だろう。

戦いの事となると勘が鋭いが、それ以外の事となるとそうでも無さそうだから少し困る。そもそも彼女が迷惑なら最初っからしつかりと断っておけばこんな事に為らなかつたのだ。

だから少し懲らしめてやろうとしたのだが……。

《私は、女性の冬馬さまでも男性の冬馬さまでも、この身を全て捧げられる程お慕いしています》

と、アイラからそう言い切られて（注意！かなり脚色されています）ふと我に返った。

彼女は本気で冬馬の事が好きになったのだ。その事を理解すると、何故か熱くなっていた自分の心が急に冷えてしまった。

あれが彼女の告白。だとしたら、自分がやった事は一体何だったのか？

「……これでは、まるで私が冬馬の奴にヤキモチを焼いているみたいじゃないか。私は別に冬馬の事なんて、どうでも……」

ここまで言つて、いきなり食堂で見た時の冬馬の顔が出てくる。口に出す言葉の一つ一つが妙に重みを感じさせ、それを紛らせるように自信に満ちた笑顔で話す冬馬の顔が何故か頭から離れない。それを一生懸命に消そうとしていると、逆に自分の顔が熱くなってくる。

「ええい！違う違う！私は冬馬に好意なんて……いや、だからって別に嫌いでも無くて……ああ！もう！」

浮かんでくる冬馬の顔と、自らの気持ちで頭の中がグルグルと回るのに堪えきれなくなつて、机から立ち上がった。

「とにかく頭を冷そう。こんな事で冷静さを無くす様ではアンリエツタ様の騎士……いや、銃士隊の隊長失格だ」

アニエスは水でも飲もうと部屋から出るために扉を開けた。

「あ……」

そこには、今まさにノックしようと構えていた冬馬が立っていた。夜遅いからなのか、女になつておらず男のままだ。

「……なつ！冬馬——！！！」

一気にアニエスの顔から火が出るみたいに真っ赤になると、冬馬を押し退けて走り去つて行つてしまった。

「え！？あっおい！………もしかして、逃げられた？っーか、嫌われた？」

あまりの出来事に思考が付いて行かず、ただ開かれた扉の前で突っ立ってしまう冬馬だった。

「はあ…はあ…はあ」

完全に冬馬の姿が確認出来なくなる所まで走り終わると、適当な場所に腰かけた。

「あー驚いた。まさかいきなり冬馬に会う事になるとは……………いやいや、待て待て、なんで驚く必要があつたのだ？そりゃ、今さっきまでアイツの事を考えていたから当然と言えば…………だから！そうじゃ無くて！」

ドキドキと高い音を立てて鳴る胸を押さえるが、どういう訳か治まる気配がない。それどころか冬馬の顔を思い出す度に、更に胸の鼓動が高まっていく。

「……………はあ。ん？誰かいるのか？」

ふと人の気配を感じて振り返る。何時もならこの時間帯で彷徨く者にはかなり警戒心を抱くのだが、今のアニエスにはそれがなくなっていた。

「……………ああ、アリスちゃんか」

アニエスの前に現れたのは冬馬と一緒に帰ってきていたアリスだった。

「アニエスお姉ちゃん…？あれ？冬兄とっにいと一緒にだと思つてたんだけど」

冬兄 とは彼女が冬馬がいない時に口にするアダ名だ。この呼び方を冬馬が恥ずかしいのか、なかなか認めたがらないのでこっそりと本人の居ない所で呼んでいた。

「え？…ああ、少し色々とあつてな」

色々どころか、冬馬に会った瞬間に逃げたとは流石に言えないのではぐらかした。

「それよりもアリスちゃんこそ、なんでこんな所に居るんだ？」

「私？私は迷子なだけだよ」

実にあつさりと答えられてアニエスもキョトンとしてしまう。

「迷子って……なら少し良いかな？聞きたい事があるんだ」

「うん。良いよ」

アニエスはアリスを連れて自分の部屋へと戻って行く事にした。

冬馬がまだ部屋の前で待っているかもしれないと考えたが、恐らくもついでないだろう。冬馬の性格からすれば急ぎの用でも無ければ後日に回す筈である。

部屋に戻してみると案の定冬馬は帰っていた。まあ、あのまま部屋の中で待っていたのなら叩き出していただろうが。

「よつと」

アリスがアニエスのベッドに腰掛けて、アニエスは椅子を持ってきて座る。

「で、お話ってなに？」

「ああ。少しだけで構わないのだが、冬馬の事を聞きたいと思ってな」

「冬兄の事？ふーん、やっぱり気になるんだ」

意味あり気に微笑むアリスを見てアニエスは慌て否定する。

「いやいや、そうじゃ無くて！ただ、なんて言うか……その……アレだ……やはり同じ部隊で行動しているから、だから少しは知っておかないと不味いと思ってな！べつ別に気になるとかじゃ無くて……あー気にはなるが、異性として気になる訳では……無くもないが……そう！同じ仕事仲間として色々を知りたいのだ！」

もう自分で何を言いたいのかわからないまま、半分メチャクチャに説明する。

「うーん……要するにいつも一緒にいるから冬兄がどんな人で、どんな女性（ひと）が好みなのかとか、どんな事が好きなのかが知りたいんだ

ね？」

「いや……まあ、ちよつと色々違うがそんな所だ」

アニエスが顔を真つ赤にして頬を掻きながらゴニョゴニョと答える。

何故かアリスには、こと色恋沙汰になると凄い洞察力を見せる。

天性の才能か、それとも自らの経験から生まれた力なのか、アニエスから見れば彼女もまた冬馬同様に気になる一人だった。

「じゃあ聞くけど、冬馬はアリスちゃんの使い魔なんだろう？私の友人にも人を使い魔にしている娘が居るけど、何か関係があるのか？」
「それってルイズお姉ちゃんの事？」

「ああ。そうか、前に会った事があるんだったな」

アニエスはアリスと冬馬がアルビオンで会っていたのを、アンリエッタ経由で知っていた。その際にも使い魔の平賀才人と呼ばれる少年にも面識がある。

今考えれば 神楽冬馬 と 平賀才人、どちらも似たような言い方の出来る名前だった。

「アリスちゃん。平賀才人と神楽冬馬の二人って、もしかしくなくても同郷なのか？」

「うん。前に聞いた時に二人共 地球 って世界から来たんだって」

「……世界？国では無くて？」

アリスが冬馬が以前言っていた事をアニエスに説明すると、少し困惑したような表情で頷き返す。

「そうか……………異世界の人間だとは考えもなかったな。他には何を言ってたんだ？」

「冬兄は昔その世界で色々な戦争に参加していたって話してくれた。あまり意味が分からなかったけど、私やお父様やお母様を助けてくれた時や、アルビオンのお城の時も色々な道具や作戦でいつも何とかしてくれたの。……だから、それが出来る位に一杯色々な辛い事があったのだけは分かった」

その言葉に、ふと脳裏に食堂や以前に交わした会話の記憶が蘇る。

何故冬馬は、少し話ただけでアニエスが復讐をしたい事を見破ったのか。

何故、最初の演習の時に大破した鎧の後片付けをしながら、とても遠い眼をしていたのか。

何故、宿場での襲撃の時に、いち早く対応できたのか。

アリスの言葉を聞いて、それらが一本の線となってアニエスの中で繋がりを持った。

簡単な事だ。恐らく冬馬は全て経験したからこそ、今までの事が出来たのだろう。

昔、誰かに復讐しようとしたか、された事があったのだ。

昔、あの鎧の様に無惨にも殺されたか、自身が殺した者達を見た事があるのだ。

昔、自分がその場から離れていた為に予期せぬ襲撃にあって酷い目どころか、悲惨な結末を迎えた事があるのだ。

だからアニエスの気持ちを理解した。

だからアニエス達に警告する事が出来た。

だからアニエス達よりも迅速に、的確に対応できた。

その事を理解した時にアニエスの胸の中にいる冬馬はとても大きく、とても誇り高い男となっていた。

「ただの傭兵では無いと思っていたが、そこまでの男だったとはな……」

この事を本人が知れば躍起になって否定するだろうと、アニエスには何故か自然とそう思えた。

「……………むふふ」

そんなアニエスをアリスが楽しそうに見つめる。

「…な、なにを面白そうに私の顔を見ているのだ？」

「んー？アニエスお姉ちゃんが、冬兄にラブラブしちゃったのがハッキリと伝わったからかな？」

「なっ……………」

これまで以上にアニエスの顔が真っ赤に染まる。

「好きな気持ちを隠すのは、相手にとっても失礼だよってお母様が教えてくれたもん。だから、素直に白状した方が良いと思うよ？」

ニコニコと話すアリスの背中に、何故か小さなコウモリのような羽が見えたような気がした。ぶっちゃけ小悪魔に見えた。

「あ……………う…まあ、確かに冬馬の事は気になるけど……………その…ゴニョゴニョ」

アニエスは人差し指を合わせてモジモジとしているが正直言つてアニエスのこんな仕草は冬馬はおろか、他の隊員やアンリエッタですら見た事の無い珍しい事だった。

「さあさあさあ？」

「う……………はい。冬馬の事が凄く気になります。ラブラブかどうかは分からないが、確かに好意を持ってます…」

十歳以上も年下の娘に観念した瞬間だった。もし冬馬がこの光景を見ていたら、腹を抱えて笑い転げていた事だろう。

（……………うう。なんで私がこんな目に遭わなければ…）

だが不思議な事に、一度そう思ってしまうと同じように冬馬の事を考えてもドキドキはしても、辛くはならない。むしろ胸の奥がポカポカと温かくなる気がする。

アリスと話すアニエスは気が付かなかったが、二人の知らぬ内に

部屋の扉が少し開いていた。

そこから何者かが中の様子を伺っていたが、そつと扉を閉めると去って行った。

「……………またしょーも無いお節介をしゃがって。…ま、今回は良いか」

冬馬は一人笑って二人の会話を一部始終を聞いていたのだ。

…ただし、ホントに一部だけで肝心の部分を聞いていなかった。

特にラストの方を完全に聞き逃していたのは、冬馬にとって後々痛い問題になる事を本人は知らなかった。

アニメスの恋心？（後書き）

……以上。書くのが不慣れなラブラブな一話でした。つーか、なん
でこんな話になったんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3848d/>

紅い翼

2010年10月11日03時09分発行